Ⅱ．遺跡調査の概要

調査の理由と工程

1.発掘調査

調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(m²)	調査の期間	調査担当者
建設省	国道302号線建設	高針原1号窯跡	1,000	96.6-96.9	福岡·後藤·池本
（愛知国道）		鴻ノ巣古窯跡	300	96.10-96.11	福岡·後藤·池本
		細口下1号窯跡	200	96.4-96.5	福岡·後藤·池本
	東海環状自動車道建設	上品野遺跡	3,000	96.11-97.3	福岡·後藤·池本
	伊勢湾岸道路建設	NA335号古窯跡群	250	96.6-96.8	中野·藤井
建設省	伊勢湾岸道路建設	大脇城跡	A 1,200	96.8-96.9	板倉·藤井·北村·中野
（名四国道）			B 1,450	96.11-96.12	板倉·藤井·北村·中野
日本道路公団	第二東海自動車道建設		C 1,700	96.11-9612	板倉·藤井·北村·中野
			D 1,650	96.12-97.1	板倉·藤井·北村·中野·秋田
			E 1,200	97.1-97.3	板倉·藤井·北村·中野·秋田
日本道路公団	第二東海自動車道建設	郷上遺跡等試掘	570	96.4-96.5	板倉·北村
	名神一宮上り線P.A.建設	三ツ井遺跡	A 1,400	96.4-96.6	高橋·山本·小川
			B 1,000	96.8-96.11	高橋·山本·小川
			C 840	96.11-97.1	高橋·山本·小川
			D 760	96.6-96.7	高橋·山本·小川
			E 2,123	97.1-97.3	高橋·山本·小川
日本道路公団	東海北陸自動車道建設	馬引横手遺跡	C 1,355	96.4-96.10	小泉·伊藤太
愛知県土木部	県道萩原三条北方線建設		D 957	96.4-96.8	小泉·伊藤太
（道路建設課）	県道岐阜稲沢線建設		E 2,648	96.4-96.8	小泉·伊藤太
		毛受遺跡	B 745	96.4-96.5	小泉·浅井·飴谷
			C 1,774	96.6-96.10	小泉·浅井·飴谷
			D 1,596	96.6-96.10	小泉·浅井·飴谷
		八王子遺跡	F 277	96.11-96.12	黒田·石黒·大崎
			G 734	96.7-96.9	黒田·酒井·田中
			H 1,359	96.10-97.3	黒田·西原·水谷
			I 2,528	96.5-96.10	黒田·西原·水谷
			J 396	96.10-97.3	黒田·樋上
			K 390	96.11-97.3	黒田·小泉·浅井·飴谷·伊藤太
			L 2,832	96.4-96.10	黒田·樋上
			M 1,065	96.12-97.3	黒田·石黒·大崎
			N 1,193	96.10-97.1	黒田·西原·水谷
			O 1,226	96.9-97.1	黒田·酒井·田中
			P 416	97.1-97.3	黒田·酒井·田中
			Q 1,144	96.4-96.6	黒田·酒井·田中
		苅安賀遺跡	A 218	96.10-96.12	黒田·石黒·大崎
			B 378	96.10-96.12	黒田·石黒·大崎
			C 628	96.10-96.12	黒田·石黒·大崎
			D 357	96.7-96.9	黒田·石黒·大崎
			F 670	96.4-96.4	黒田·石黒·大崎
			G 570	96.7-96.9	黒田·石黒·大崎
			H 767	96.11-97.1	黒田·石黒·大崎
			K 431	96.7-96.9	黒田·石黒·大崎
			L 675	96.4-96.6	黒田·石黒·大崎

調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)		調査の期間	調査担当者
住宅都市整備公団	中丸町三丁目住宅建設	志賀公園遺跡	A	1,740	96.4-96.8	福岡・伊藤秀・永井
			B	390	96.12-97.3	福岡・伊藤秀・永井
			C	530	96.12-97.3	福岡・伊藤秀・永井
			D	950	96.8-96.11	福岡・伊藤秀・永井
			試	1,390	96.4-96.8	福岡・伊藤秀・永井
	尾張西部都市拠点地区土地区画整理	下津北山遺跡		2,000	96.6-96.9	高橋・加藤・早野
愛知県土木部（管理課）	豊橋土木事務所庁舎新築	吉田城遺跡		800	96.4-96.7	増澤・原田
愛知県土木部（都市整備課）	**県道健康の森線建設**	森岡1号窯跡		350	96.4-96.6	中野・藤井
愛知県土木部（道路建設課）	**県道萩原三条北方線建設**	大毛池田遺跡	A	300	96.11-96.12	小泉・浅井・飴谷
			B	60	96.11-96.12	小泉・浅井・飴谷
			C	40	96.11-96.12	小泉・浅井・飴谷
	県道馬飼井堀線建設	一色青海遺跡	B	1,300	96.11-96.12	高橋・加藤・早野
			C	1,300	96.12-97.1	高橋・加藤・早野
			D	1,800	97.1-97.3	高橋・加藤・早野
愛知県土木部（下水道課）	日光川上流流域下水道	一色青海遺跡	A	600	96.4-96.5	高橋・加藤・早野
	五条川右岸流域下水道	権現山遺跡		500	96.6-96.7	高橋・山本・小川
愛知県土木部（河川課）	五条川改修	清洲城下町遺跡		2,000	96.12-97.3	増澤・宮腰・原田
愛知県教育委員会（文化財課）	新資料館建設	朝日遺跡		2,773	96.4-96.9	増澤・宮腰・秋田・原田

2.整理報告書

調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省（名四国道） 日本道路公団	伊勢湾岸道路建設 第二東海自動車道建設	NA335号古窯跡群	（整理）	平成７・８年度
	国道302号線	**円通寺古墓**	（整理）	平成７年度
日本道路公団 愛知県土木部（道路建設課）	東海北陸自動車道建設	田所遺跡	29,159	平成４－７年度
		大毛池田遺跡	41,690	平成５－７年度
		西上免遺跡	13,268	平成２－７年度
		門間沼遺跡	（整理）	平成６・７年度
		東新規道遺跡	（整理）	平成７年度
		東苅安賀道遺跡	（整理）	平成７年度
愛知県土木部（道路建設課）	県道馬飼井堀線建設	大縄遺跡	2,200	平成７年度
愛知県土木部（河川課）	五条川改修	清洲城下町遺跡	2,040	平成4－６年度



1.大毛池田遺跡　2.馬引横手遺跡　3.毛受遺跡　4.八王子遺跡　5.苅安賀遺跡　6.三ツ井遺跡
7.権現山遺跡　8.下津北山遺跡　9.一色青海遺跡　10.清洲城下町遺跡　11.朝日遺跡　12.志賀公園遺跡





19.上品野遺跡

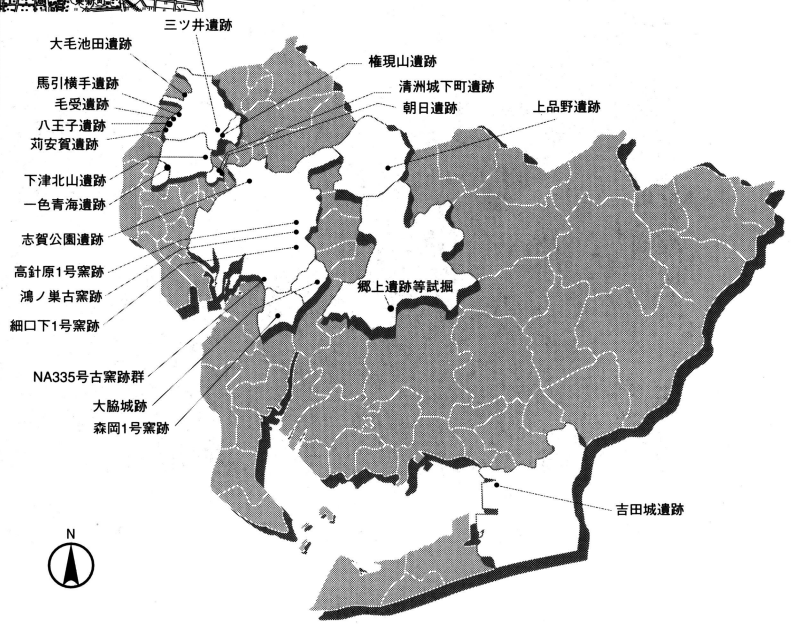


20.郷上遺跡等試掘

13.高針原１号窯跡
14.鴻ノ巣古窯跡
15.細口下１号窯跡
16.ＮＡ335号古窯跡群
17.大脇城跡
18.森岡１号窯跡



21.吉田城遺跡



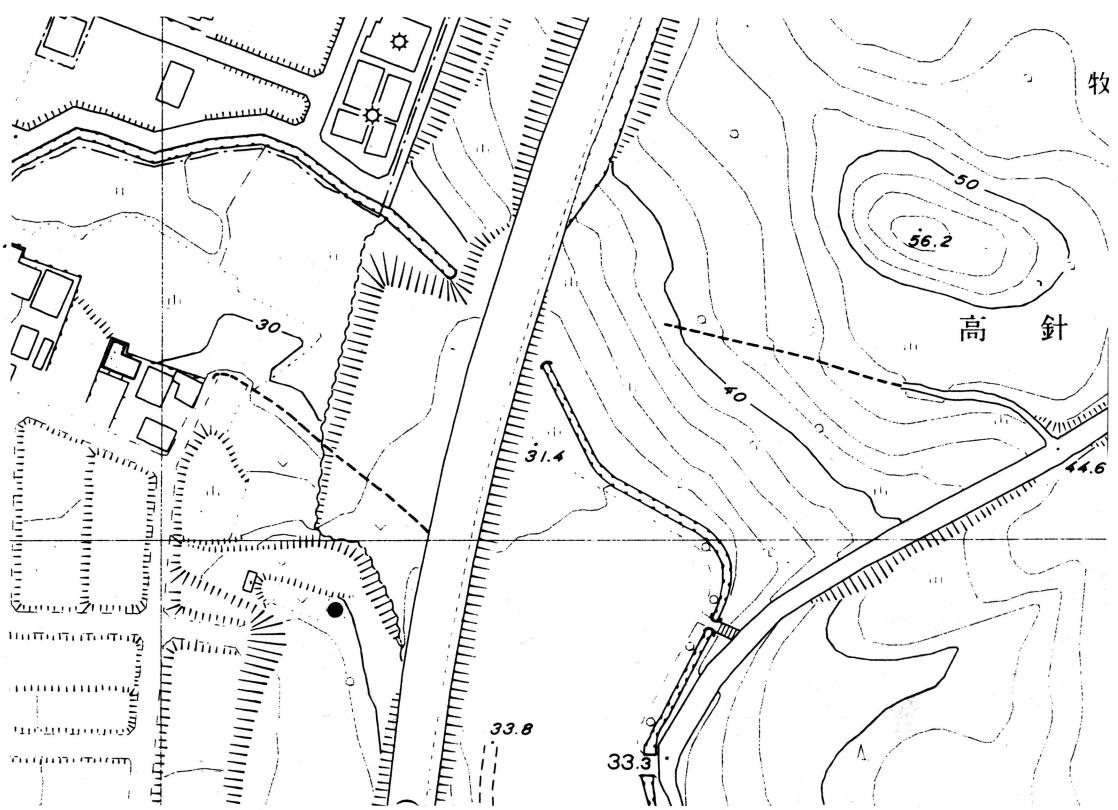
高針原（たかはりはら）1号窯跡

調査の経過　高針原１号窯跡は、名古屋市名東区に所在する。地形的には北側に向けて傾斜する緩斜面で、調査直前には道路の予定用地のみこれが残存していた。

今回の調査は、国道302号線建設に伴う事前事業として実施し、調査面積は1,000㎡である。

調査の概要　調査の結果、窯体（ＳＹ01）１基と、これに伴う灰原や、排水溝（ＳＤ01）などを検出した。窯体は全長7.6ｍが残存し、北向きに開口する。構造は、燃焼室上部に舟底ピットを付設する窖窯で、焼成室上部が開墾により消失している。壁面は、最大残存高1.6ｍ。表面にはスサ入り粘土を貼付した補修痕が著しく、焼成室の築窯当初の最大幅が、2.8ｍをはかるのに対して、最終面では1.9ｍとなっている。舟底ピットは、焼成室下部に設定されている。平面は楕円形で、長径3.3m、短径1.4mをはかる。埋土は燃焼室の埋土とは明らかに異なり、壁面に被熱は確認できない。ただし埋土上面には被熱した床面は確認できなかった。

一方前庭部は、焚口前面の地山面を掘削して形成されたもので、平面が円形を呈する。床面積は約9.0㎡をはかる。前庭部の前面には、周堤部が確認できた。周堤部は地山土を整地したもので、面積は、約60.6㎡をはかる。なお、これら諸施設の中央部分には、排水溝（ＳＤ01）が設置されている。主軸は窯体とほぼ同一で、灰原に向けて伸びる。



第１図　調査地点位置図（１：2500）



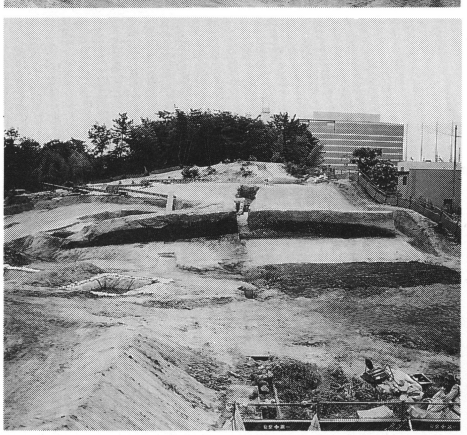
調査区全景

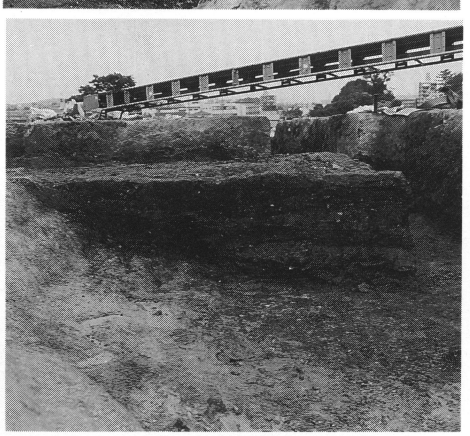




左　ＳＹ01

右　ＳＹ01右壁





左　灰原

右　前庭部

第２図　調査風景



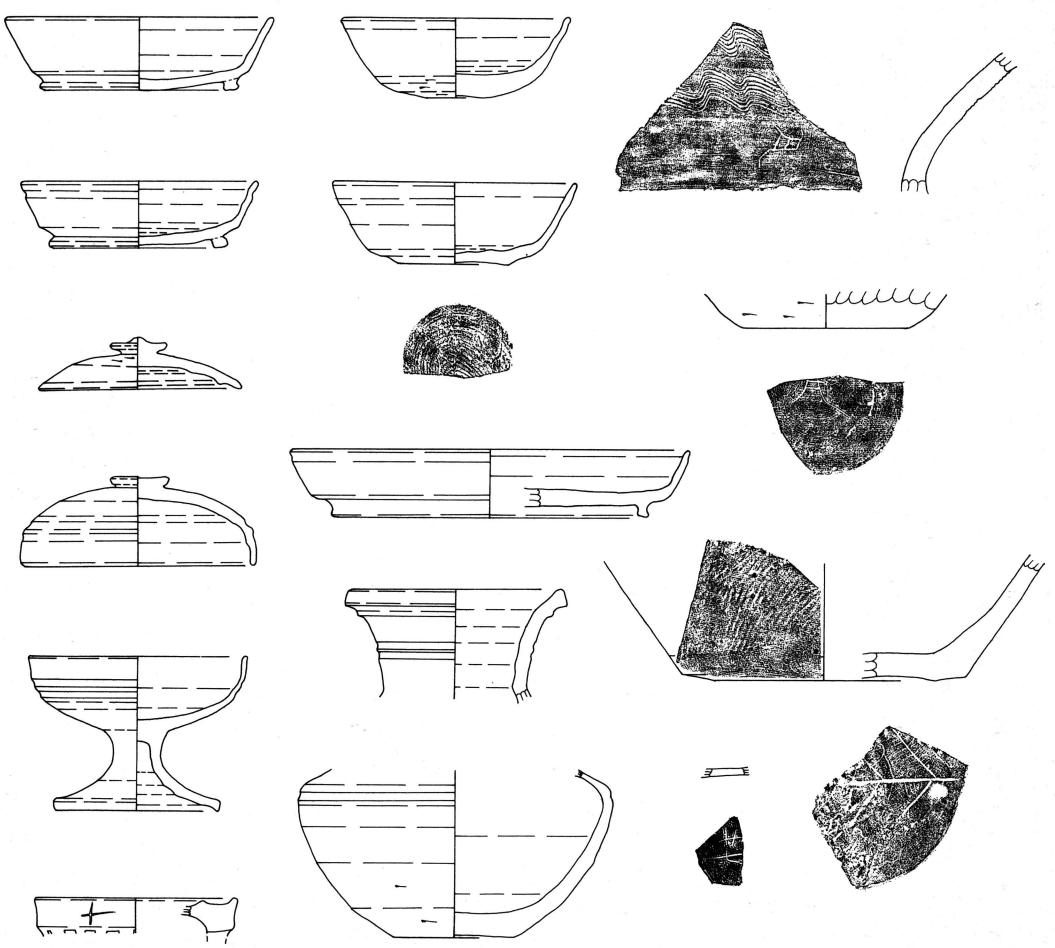
第3図　航空写真

全長7.0ｍを検出し、幅は0.3ｍ、検出面からの深さ0.3ｍをはかる。埋土は上部を覆う灰層と同一となる。

灰原は面積350㎡検出した。最大残存高は約2.0ｍにも及び、やや大規模となる。しかし、上面がほぼ全域にわたって0.3～0.4ｍ程度撹乱されているほか、北側は耕作などにより一部をカットされており、残存状況は良好とはいえない。

今回の出土遺物には、ＳＹ01の焼成品と考えられる須恵器の他、窯道具がある。図示した資料は15点で、すべて須恵器となる。特殊な器種等は、現時点では確認できないが、『月』の刻書は注目できる。時期は、岩崎17号窯式～岩崎41号窯式を中心とするが、これを前後した資料が若干加わる。窯道具には、焼台、分炎棒がある。前者には、直径10㎝大の自然石や、甕などの大型品の須恵器片を転用したのもなどがある。

今回得られた資料は、実体が不明確であった７世紀後半の猿投窯の生産構造を考える上で重要な手がかりとなろう。　（池本正明）



第４図　出土遺物（１：４）

鴻ノ巣古窯跡

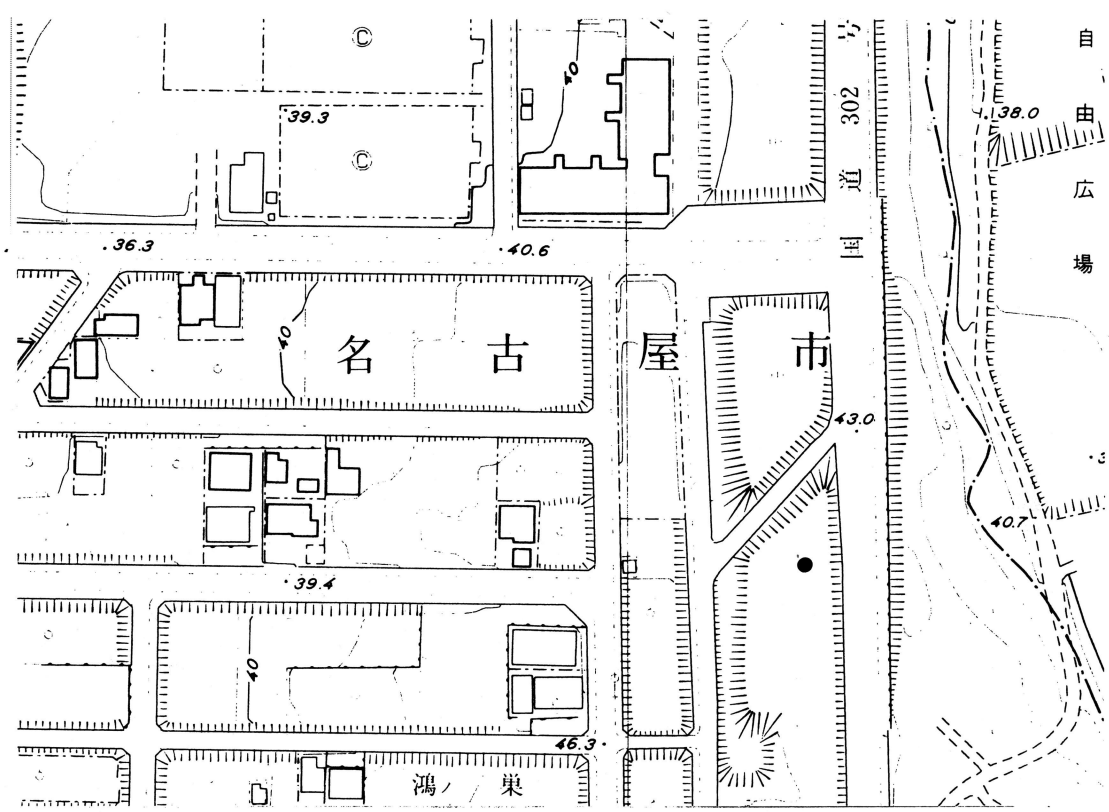
調査の経過　鴻ノ巣古窯跡は、名古屋市天白区天白町に所在する。調査区の本来の地形は、南側に傾斜する緩斜面となる。

今回の調査は、国道302号線建設に伴う事前事業として実施し、調査面積は200㎡である。

調査の概要　調査の結果、調査区の北東部分で灰層を検出した。検出できた灰層は、厚さ0.1～0.3m程度、色調はにぶい黄色を呈する。焼土などの混入はなく、炭化物も乏しい。出土遺物は多量とはいえない。以上の状況から、検出部分はその末端部に該当するものと考えられる。

今回の出土遺物には、灰層から出土した灰釉陶器、灰白軟陶、須恵器の他、窯道具がある。図示した資料は16点で、時期は黒笹90号窯式を中心とする。窯道具には、ツク、焼台等がある。後者には、いわゆる馬爪焼台のほか、直径10㎝大の自然石や、大型の製品片を転用したものなどがある。

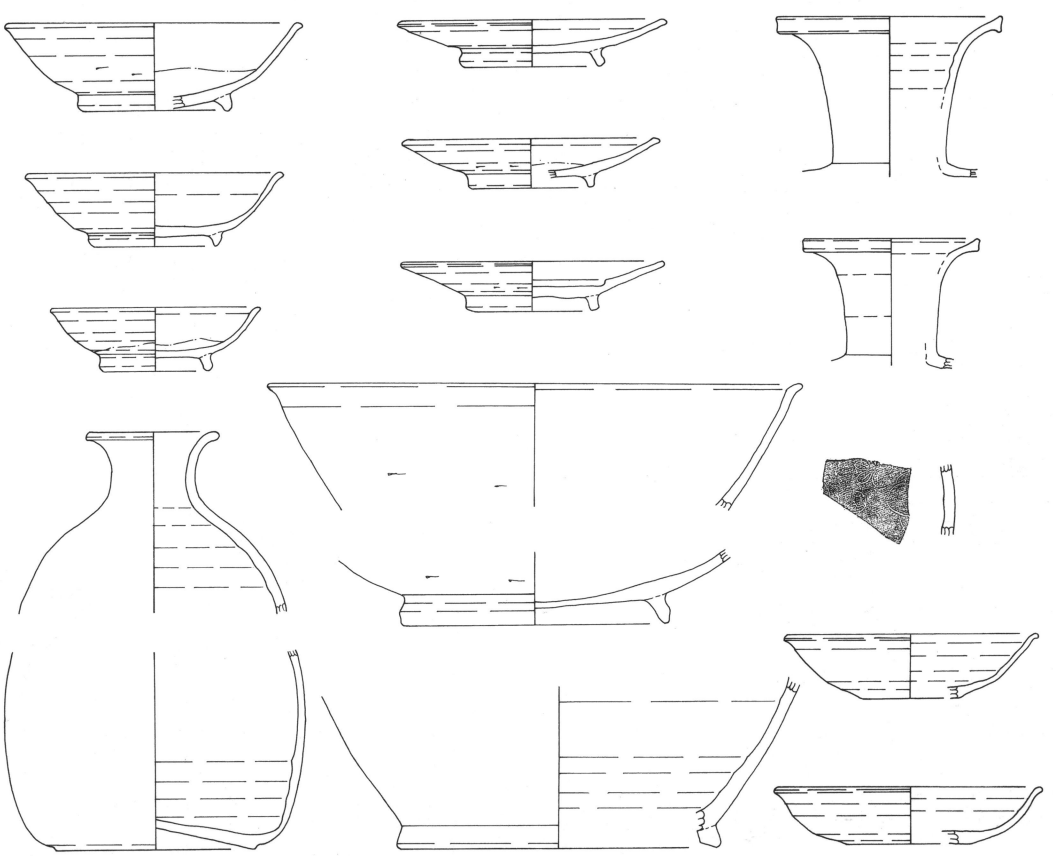
ところで本窯は1977年、1978年の二次にわたって、名古屋考古学会の手で発掘調査が実施され、同団体から報告書も刊行されている。今回得られた資料は、これらを補足するもので、陰刻花文を施す資料などの存在は、当時期の猿投窯の生産構造を考える上で重要な資料となると考えられている。　（池本正明）



第1図　調査地点位置図（1：2500）



第２図　航空写真



第３図　出土遺物（１：４）

細口下１号窯跡（ほそぐちした）

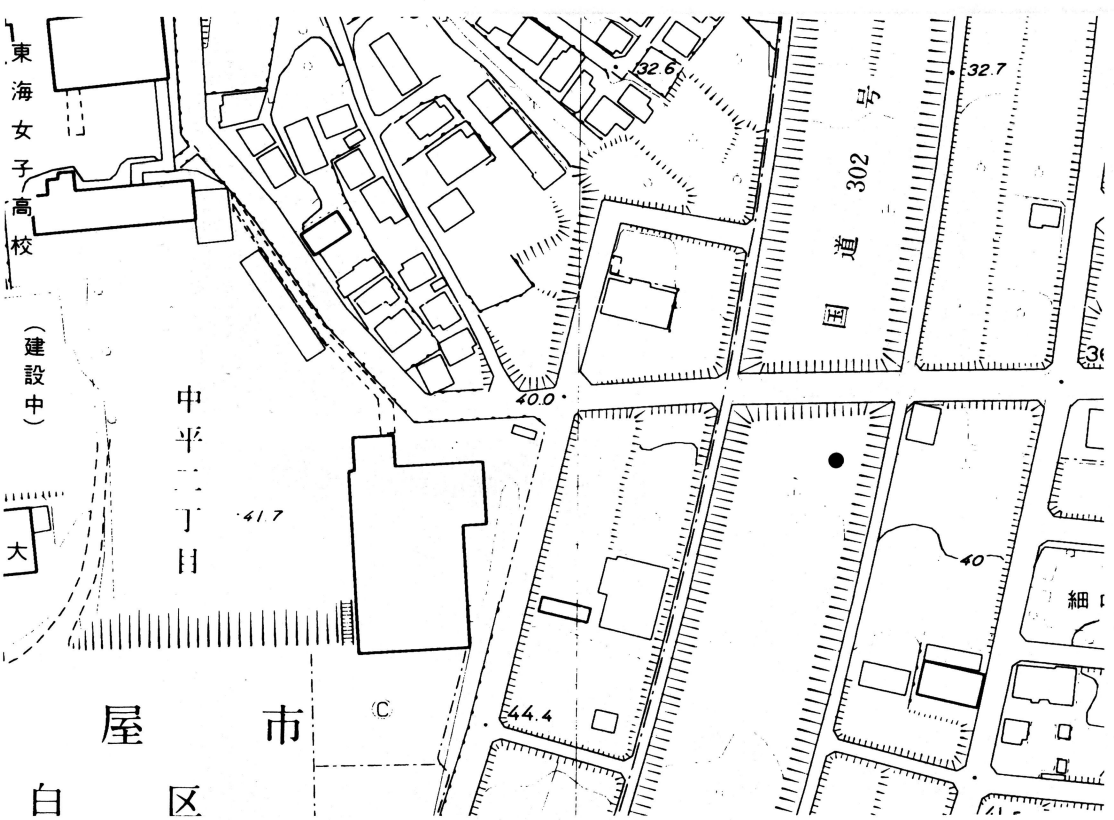
調査の経過　細口下１号窯跡は、名古屋市天白区天白町に所在する。地形的には、東側にむけて傾斜する緩斜面となる。

今回の調査は、国道302号線建設に伴う事前事業として実施したもので、調査面積は200㎡である。

調査の概要　調査の結果、焼成室がほぼ残存する窯体を検出した。構造は分炎柱を有する窖窯で、残存長は5.0ｍ。東向きに開口する。分炎柱は残存高10.0ｍ、焼成室側半分の基底部を残すにすぎない。基底部の規模は、短辺のみ計測でき、0.5ｍをはかる。床面は、断ち割り調査の結果、上下二つを検出している。下層を一次窯、上層を二次窯とする。中央部の床下には一次窯の床面直上に焼成不良の椀を伏せ置いたり、焼台を敷き詰めた二次窯の床下施設が確認できた。分布域は、分炎柱基底部上端から計測して2.0ｍ地点から3.0ｍ地点までに集中する。

今回の調査では、窯体の南側6.0ｍ地点でも、焼土面が確認されている。周囲の状況からこれらが窯体床面の残欠である可能性が高い。検出できた面積は約0.3㎡で、赤褐色に変色している。比熱の幅は３㎝程度となる。

出土遺物は、窯体の焼成品と考えられる灰釉系陶器類がある。時期は、12世紀後半から13世紀に属する。器種には碗、小皿、壺、瓦がある。　（池本正明）

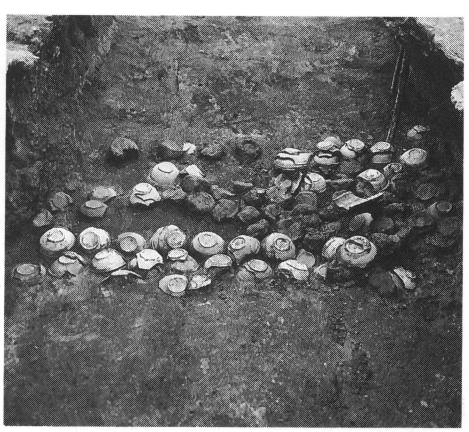


第１図　調査地点位置図（１：2500）



航空写真





左　ＳＹ01

右　ＳＹ01
床下施設





左　ＳＹ02

右　遺物出土状況

第２図　調査風景

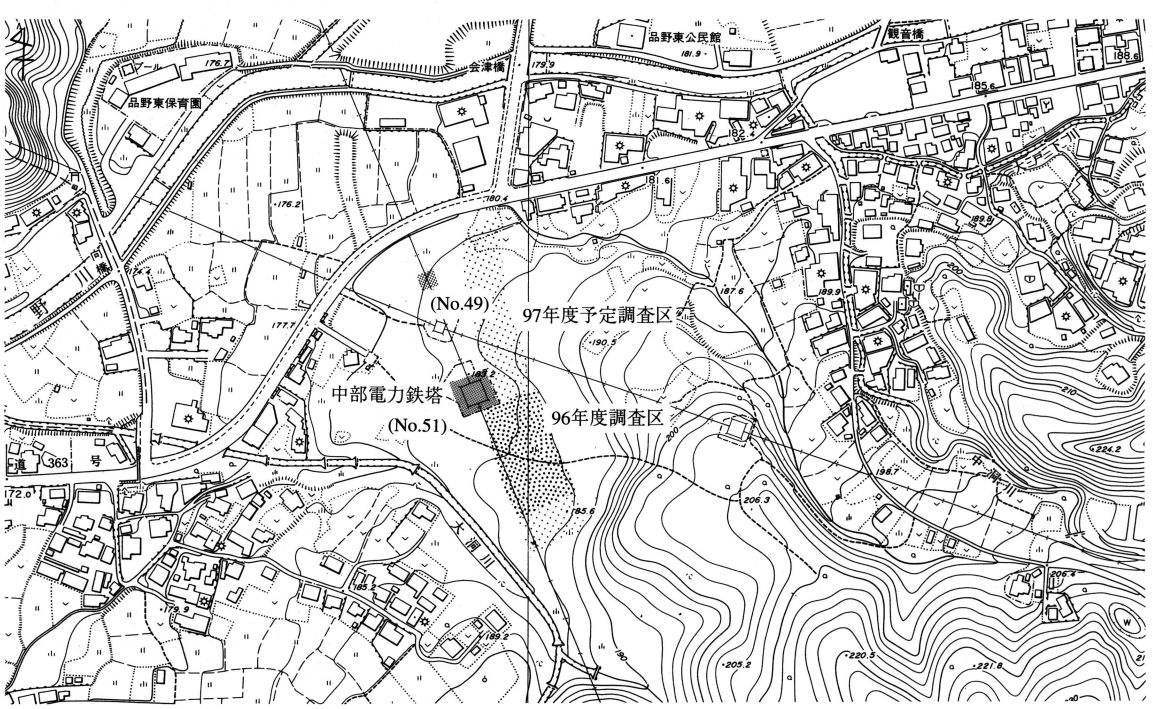
上品野（かみしなの）遺跡

調査の経緯　上品野遺跡は、瀬戸市上品野町に所在する。遺跡は品野盆地北東に位置し、瀬戸市東部丘陵から流れる大洞川の形成する扇状地と、丘陵から続く標高180メートル程の周辺の台地部に立地している。周辺には、縄文後期の中洞遺跡、弥生時代の大洞遺跡、縄文時代から中世にかけての上品野蟹川遺跡、１３世紀に施釉陶器を焼成した中洞窯・宇トゲ窯、１５世紀に施釉陶器を焼成した桑下窯、戦国時代の桑下城跡、１９世紀から磁器を焼成した清五郎窯等各時代の遺跡が存在している。また、本調査区の西隣にある中部電力鉄塔建設に当たり、1988年に瀬戸市埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われている。

本調査は、東海環状自動車道建設に伴う緊急発掘調査で、建設省から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。本年度の調査は、自動車道予定地にかかる遺跡の内、谷状の扇状地部分3000㎡を、平成８年12月より平成９年３月にかけて実施した。

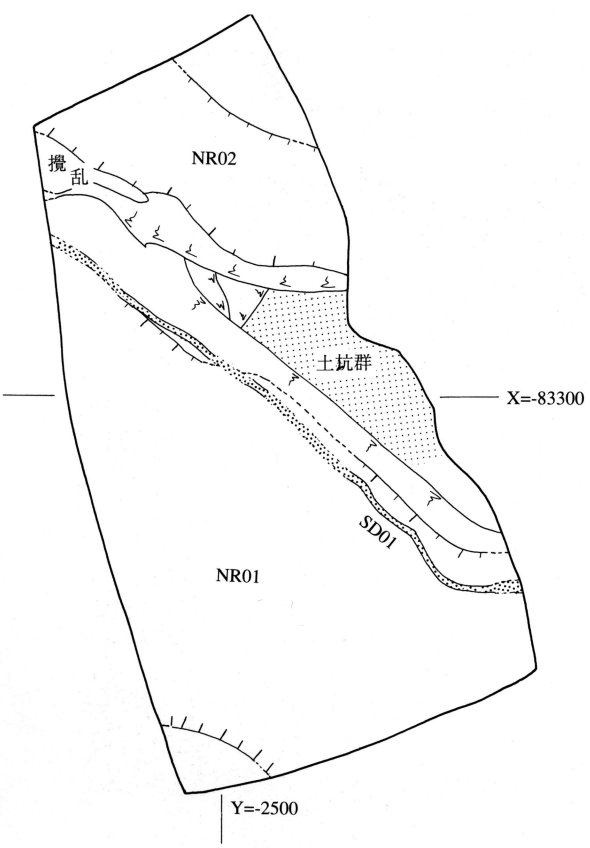
調査の概要　調査の結果、二つの谷地形　（ＮＲ01、02）とそれに挟まれる平坦部を検出した。遺構は、谷に挟まれた平坦部で　で集中的に検出された土坑群と、この平坦部に続く斜面に、谷にほぼ並行して開削された溝（ＳＤ01）である。

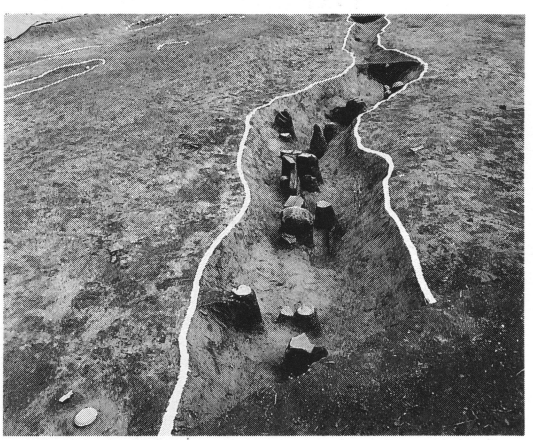
平坦部の土坑群は、数棟の掘立柱柱穴となる可能性がある。また、ＳＤ01は平坦面より下位にあり、地形の制約を受けながらも、土坑群分布域の外縁部を区切る。下位の埋土からは、12世紀から13世紀にかけての灰釉系陶器（椀、小皿、羽釜）、土師器（鍋）などが出土している。またこの遺構群は、調査区東側に若干伸びる可能性がある。 谷は、上部は緩斜面であるものの、途中より急斜面となって深く落ち込んでいる。ＮＲ０１は検出面で最大幅約30ｍ、深さは最深部で４ｍ以上を測る。ＮＲ02は検出面で最大幅約15ｍ、深さは最深



部で５ｍ以上を測る。谷の中からは、弥生土器、土師器、灰釉陶器、灰釉系陶器、施釉陶器、近世陶器等の土器類の他、黒耀石、チャート、下呂石、石英の剥片、黒耀石、チャート製の石鏃、下駄などが出土した。これらの遺物は先の瀬戸市の調査の成果を補足するものである。 また、埋土中に、厚さ数ｃｍの松河戸火山灰堆積層が確認できた。

今回の調査では、12～13世紀以外の遺構は確認できなかったが、今後の調査で当該期の遺構が検出される可能性もある。　（福岡晃彦 ・池本正明 ・後藤英史）





ＳＤ０１遺物出土状況



ＮＲ０１遺物出土状況

ＮＡ３３５号古窯跡群

調査の経過　本遺跡は、名古屋市緑区大高町高根山地内に所在する。いくつのも小規模な尾根が配された丘陵地帯の斜面に位置し、周辺には多くの古窯跡が確認されている。

発掘調査は、伊勢湾岸道路・第二東海自動車道建設に伴う事前調査であり、建設省より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度から実施している。今年度は、250㎡を６月から８月にかけて調査を行った。

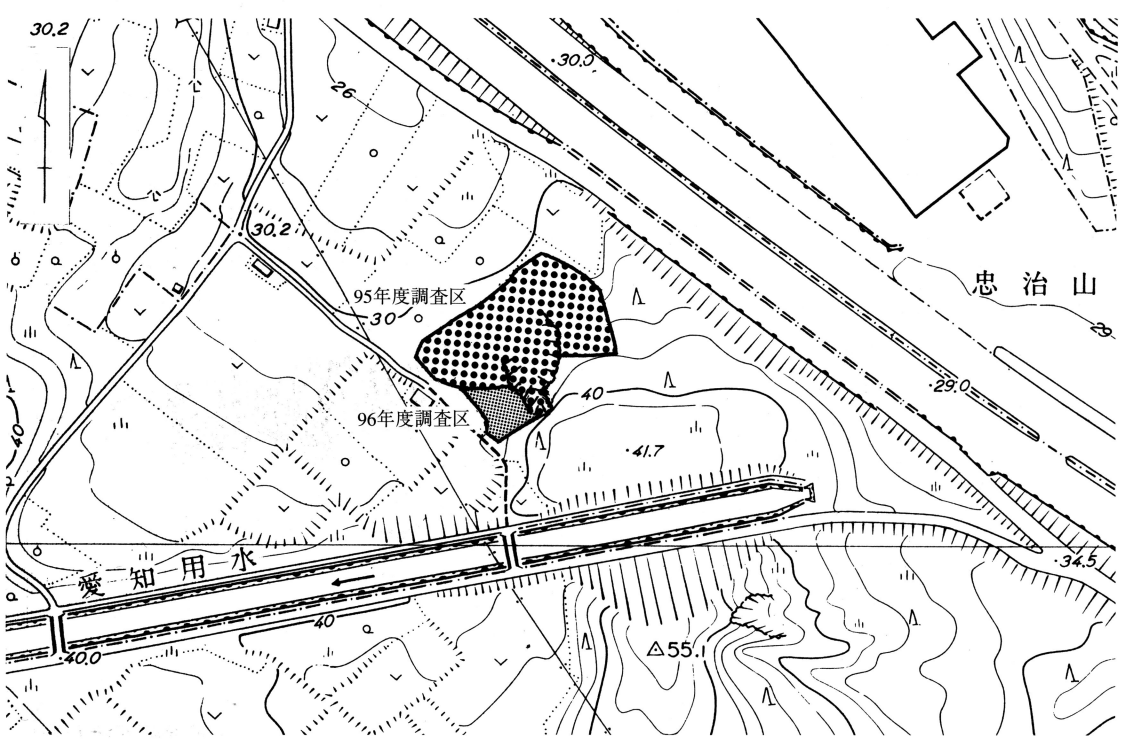
調査の概要　南北に隣接して窯跡２基（仮称Ｆ窯・Ｇ窯）とそれに付随する灰原が確認された。

Ｆ窯は、窯体の上半部が土採り坑により欠損してはいるが、残存部分では、天井部が分焔柱付近で残っており、さらに、焼台も良好な状態で検出された。

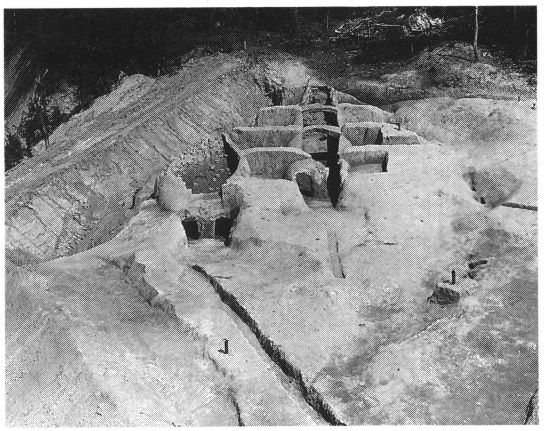
Ｇ窯は、煙道部の一部が欠損するのみで、ほぼ窯体全体が確認され、天井部の残存状況も良好であった。しかし、元位置を保った焼台は、わずかに認められたのみであった。昨年度の調査で確認された、碗を敷き詰めた床面下施設がここでも検出されたが、Ｇ窯の床面下施設は、碗を敷き詰めただけではなく、その上に小枝や幹を配した状況が認められた。

灰原は、各窯跡の前庭部付近にわずかに検出されたのみであった。

出土遺物の大多数は灰釉系無釉碗で、若干小皿が出土している。時期は、12世紀後半から13世紀前半と考えられる。　（中野良法）



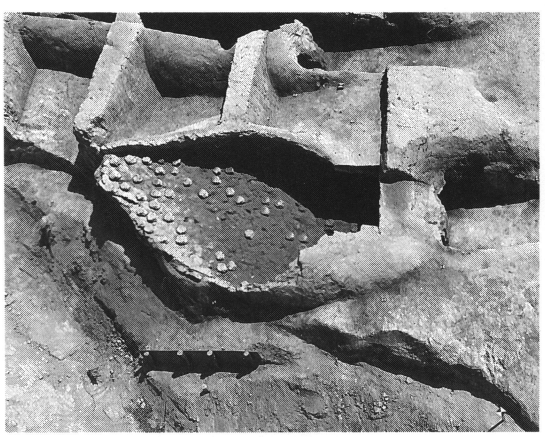
第１図　調査区位置図（１：2500）



F窯及びG窯



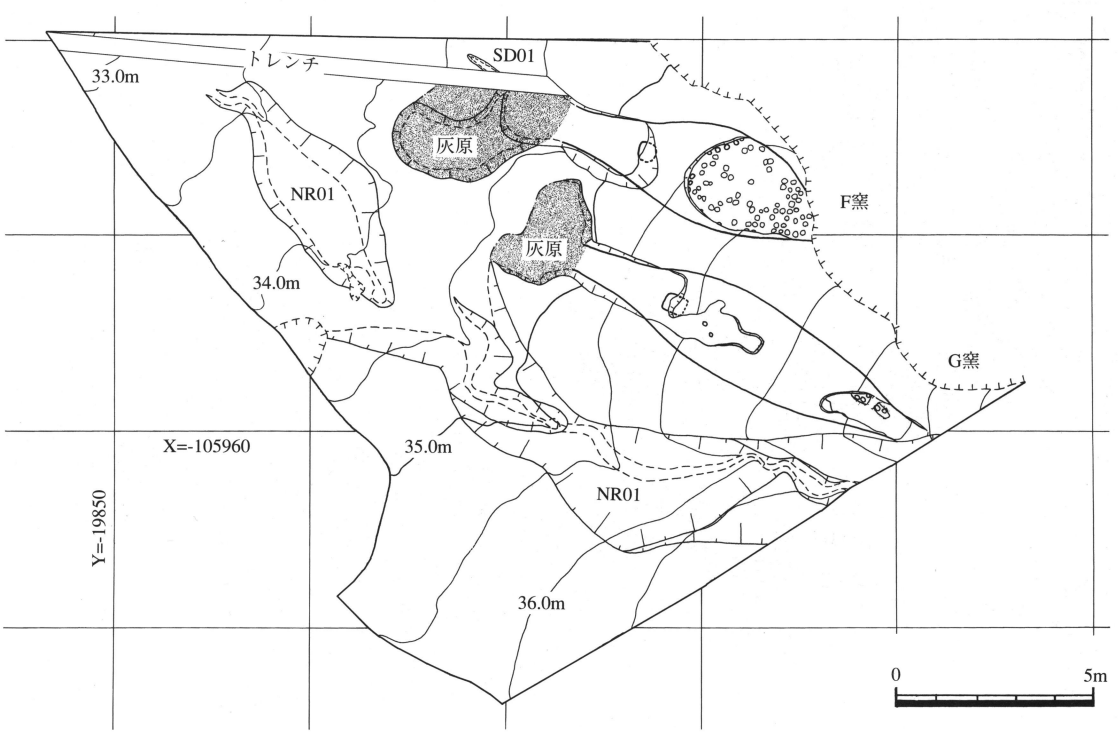
F窯灰原



F窯焼台配列状況



G窯床面下施設



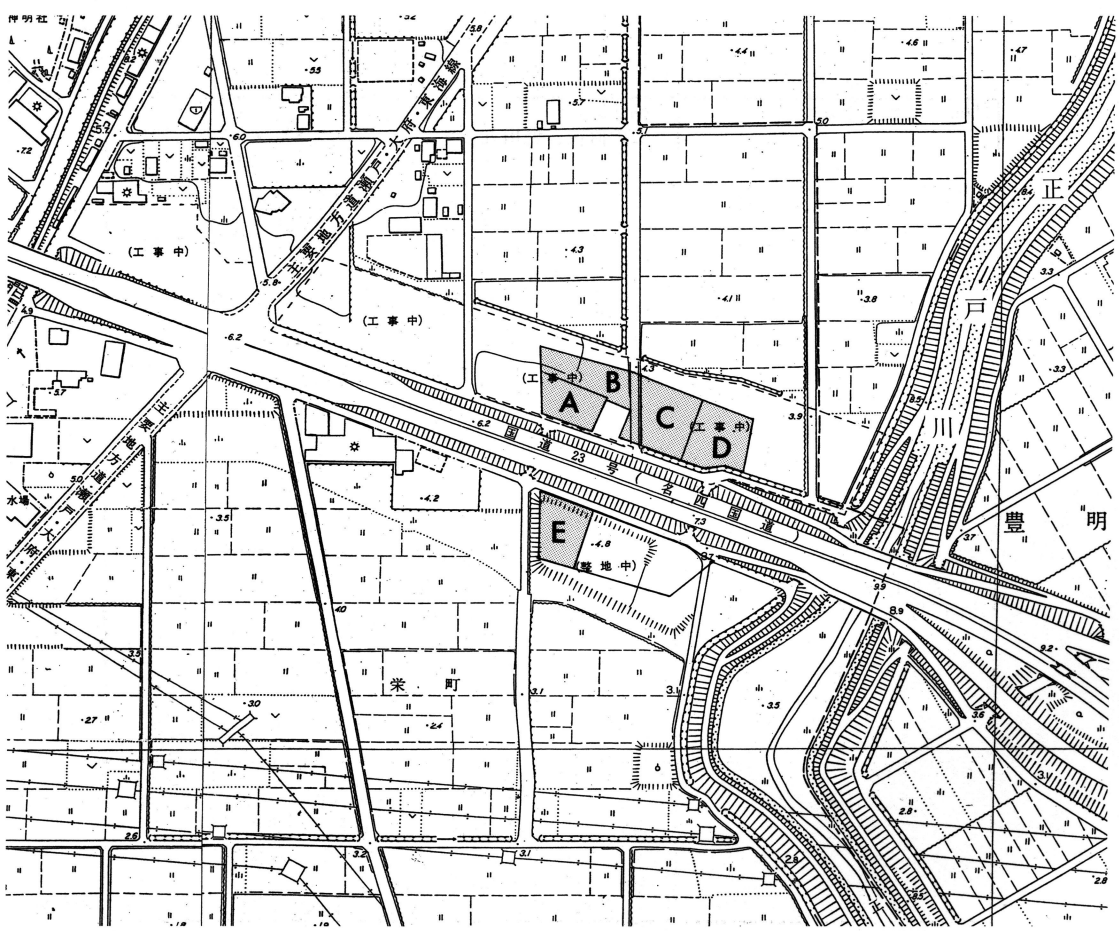
第２図　遺構配置図（１：200）

大脇城跡（おおわきじょう）

調査の経過　大脇城跡は、豊明市栄町梶田地内に所在し、尾張・三河の国境を流れる境川の一支流である正戸川右岸の平坦な沖積地に位置する城館跡を中心とする戦国期の遺跡である。標高は約3.50m前後で、周辺に小高い段丘が展開しているにもかかわらず、平坦な場所に存しているのが立地上の特色となっている。

発掘調査は、伊勢湾岸道路・第二東海自動車道の建設にともなう事前調査であり、建設省・日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成８年８月より実施した。本年度の調査面積は、7,200㎡で、Ａ～Ｅの５つの調査区に分けて発掘調査をおこなった。

大脇城について　大脇城について記す文献資料は、いずれも17世紀後半以降の編纂物で、同時代史料は現在のところ見当たらない。そしていずれの史料も、大脇村に古城跡・大脇城が存在し、城主を梶川五左衛門としている。寛文年間（1670年前後）に成立した『寛文村々覚書』には「古城跡　先年梶川五左衛門居城之由　今ハ畑成」とあって、この時期すでに耕地に改変されていた事が知られる。



第１図　調査区位置図（１：5000）

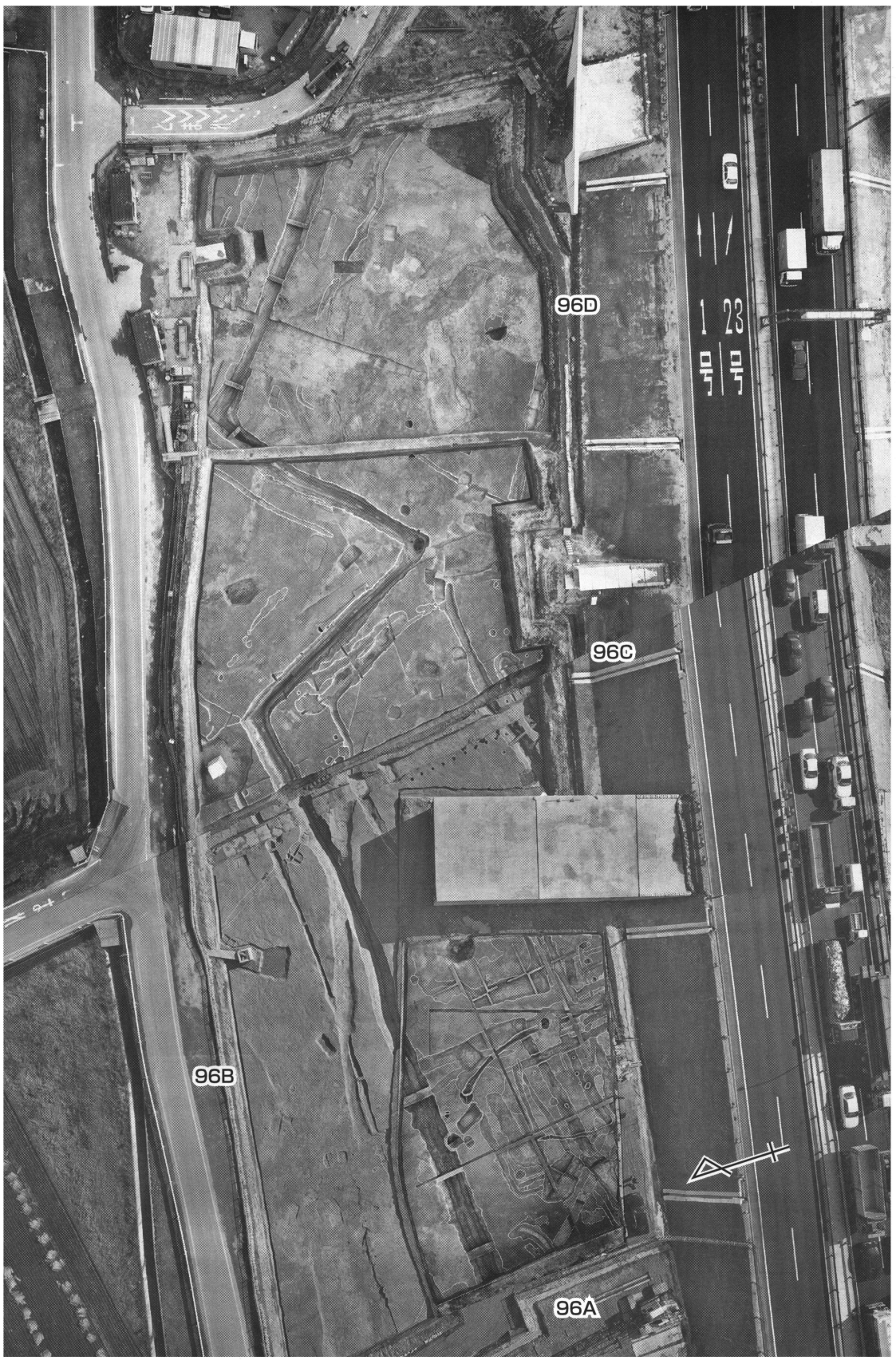
城主の梶川五左衛門の実名は「秀盛」とみられる。（「寛永諸家系図伝」）。梶川五左衛門秀盛は16世紀後半の武将で、その経歴については下表を参照されたい。ただ梶川五左衛門の在城期間・大脇城との関わりなどについては、大脇から横根城（大府市）へ、さらに成岩城（半田市）へと移っていったとの所伝（『尾陽雑記』など）もあって、判然としない点が多い。

調査の概要　遺跡の基本層序は、各調査区とも上から、客土→旧水田耕作土・床土（用地買収前）→黄褐色土（基盤）の順で、遺構はいずれも旧水田耕作土の床土直下で検出された。遺構面の標高は2.5～3.0m前後である。

今回の調査で検出した遺構としては、溝、井戸、堀立柱建物、土坑がある。これらの遺構の細かな時期区分についてはなお検討を要すが、出土遺物からみて、概ね16世紀後半から17世紀中頃にかけての時期のものである。遺構の性格については、その配置、形状、年代等からみて城館跡の一部を構成するものと推定され、殊に96A～D区にかけて検出された幅2.5m前後・深さ1.8m前後の大溝（SD01・06）は、断面の形状が戦国期の城館に特有の「薬研堀」状を呈し（とくにSD01）、城館跡の「堀」と推定されるものである。またこのSD01・06の北側においては殆ど遺構が認められないのに対して、南側では多くの遺構が展開する。こうしたことからみてSD01・06は、城館跡の外側を区画する「外堀」的なものと推察する。

1560　永禄3年5月	桶狭間の戦い この直後、梶川五左衛門、刈谷城主水野下野守信元に属し、松平元康（徳川家康）と刈谷の十八町（緒川の石ヶ瀬とする説あり）にて合戦す、と云う。→「水野勝成覚書」（寛永18／1641）・「松平記」ほか
1574　天正2年	刈谷城主水野信元、織田信長の命により、岡崎にて殺害される。 ＊この後、梶川五左衛門は水野信元のあとに刈谷城主となる佐久間信盛に属することになったとみられる。
1580　天正8年8月	織田信長、佐久間信盛父子を追放。このとき梶川五左衛門、甥の梶川弥三郎とともに信長に召し出される。 →　「池田本信長記」（慶長15／1610）
1582　天正10年6月	本能寺の変 ＊この後、梶川五左衛門は織田信雄に仕えることとなったとみられる。
1573　天正11年11月	梶川五左衛門秀盛、延命寺（大府市）に寺領を寄進す。 →　延命寺文書
1575～86 天正13年～14年	このころ『織田信雄分限帳』、作成される。 梶川五左衛門、1480貫文を知行する。
1590　天正18年	小田原の戦いおこる。織田信雄、参陣する。 そのさいに、信雄、梶川五左衛門を「旗奉行」とす。 →「寛永諸家系図伝　第六」（寛永20／1643） ＊小田原の戦いの後、織田信雄、豊臣秀吉と対立し除封される。このためか、梶川五左衛門は池田照政に仕えることとなる。
1592～1598 文禄元～慶長3年	文禄・慶長の役、おこる。梶川五左衛門、池田照政にしたがい朝鮮へ出兵し、「湯川（現ソウル市近郊）の城に至り彼国の賊徒城をかこむとき、秀盛（梶川五左衛門）城中より敵陣にすすみ出たたかひ死す。」と云い、「六十歳　法名浄慶」と伝う。 →「寛永諸家系図伝　第六」（寛永20／1643）

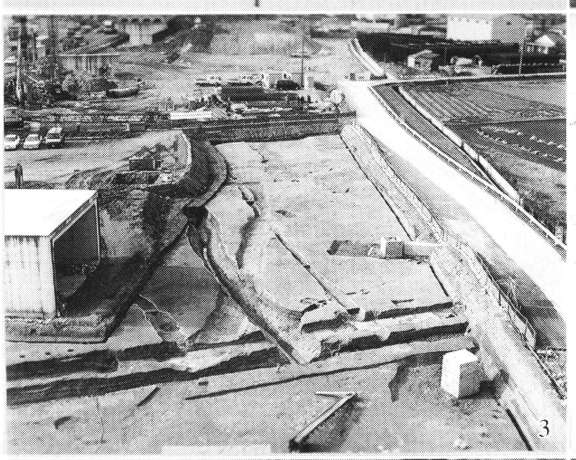
梶川五左衛門秀盛の年譜



第２図　調査区全景（96Ａ区～96Ｄ区）　（約１：520）


1

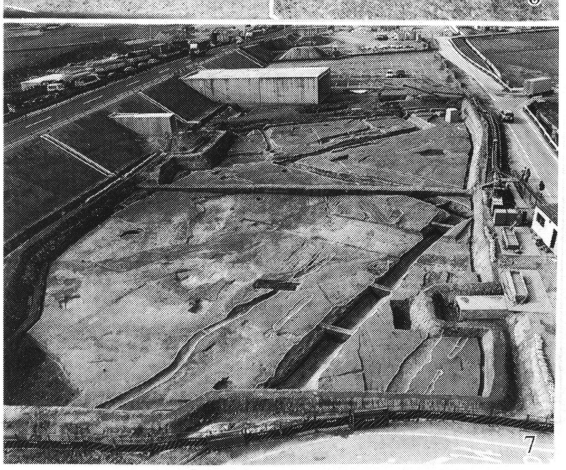

2


3


4


5


6


7

遺構写真

1　96Ａ区　全景　（東より）
2　96Ａ区　SD01（西より）
3　96Ｂ区　全景　（東より）
4　96Ｂ区　SD01（西より）
5　96Ｃ区　全景　（西より）
6　96Ｃ区　SD01（北より）
7　96Ｄ区　全景　（東より）

出土遺物には、大多数をしめる土器・陶磁器類のほかに、木製品（三方・俎・曲物の底板・建築部材など）、漆製品（椀類）および若干数の石製品（西三河式宝筐印塔の笠部・砥石など）、鉄製品（鉈・刀子など）、銭貨（元佑通寶・元豊通寶・宣徳通寶など）がある。土器類には、内耳鍋・羽釜・茶釜型・小皿類が認められるものの、清洲城下町遺跡（西春日井郡清洲町）においてこの時期に数多くの出土をみるホウロクの出土を見ない点が注目される。陶磁器類としては、織部・志野等をはじめとする瀬戸・美濃窯産の各種製品、常滑窯産の甕・鉢類のほかに唐津窯産とみられる碗の底部片（「一山」と墨書あり）および若干の中国磁器（青花皿類・青磁碗・青磁盤類など）がある。なお銭貨の「宣徳通寶」は国内においてはあまり出土例を見ないものである。

まとめ

検出遺構と「大脇城」との関わりについて、今年度の調査で明らかになった点について、今後の課題をふくめて若干のまとめを行なっておきたい。

1）後世の開墾（上記のように、1670年ころにはすでに「今ハ畑成」という状況であった）・区画整理等により一面が水田化し、地表面に痕跡を留めないため、その実態が判然としなかった「大脇城」の存在が、こうした遺構・遺物の検出によって、より明確になってきたものと考える。

2）ただ現段階では、これまでに発掘した遺構が、大脇城そのものの一部なのか、周辺部の、例えば家臣の館・屋敷地なのか等、今後検討を要す点も多い。なお来年度の調査予

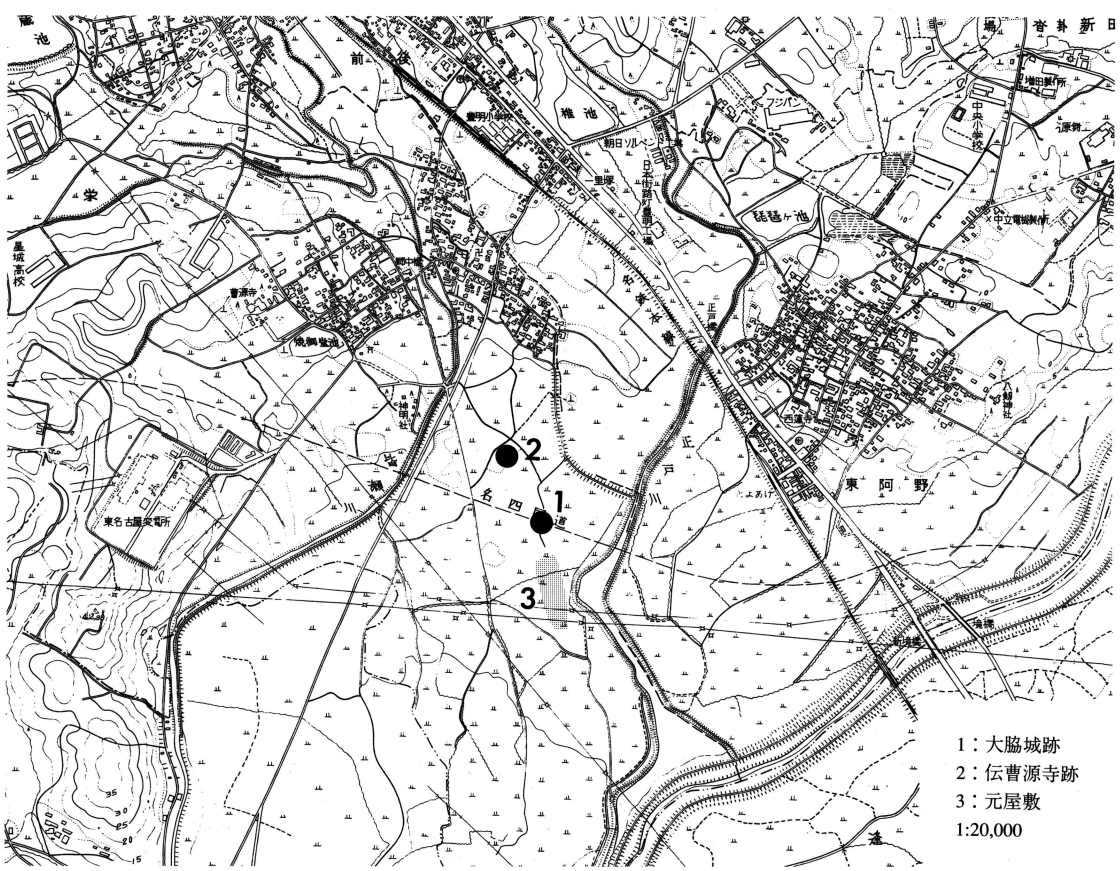


第3図　地籍図と調査区（1：2400）

定地は、遺構が多く検出された96E区の東側で、地籍図から判読からすれば、大脇城の土塁の一部との所伝のあった地点を含む区画に相当し、その調査結果が注目される。

3）既述のように、大脇城の城主とされる梶川五左衛門秀盛は、文献史料によれば16世紀中頃～末の武将である。秀盛の在城期間の問題はあるが、16世紀後半から17世紀中頃という遺構・遺物の年代は、こうした所伝・記録と特に矛盾するものではない。大脇城の盛衰を考えた場合、文献史料からは判然としないが、17世紀前半の遺物がまとまって出土し継続して生活が営まれていたとみられる点には留意する必要があろう。

4）出土遺物の年代からすれば、遺跡は17世紀中頃をもって途絶する。SD01の埋土の上層は斑土で人為的に埋められた公算が大であった。ここで想起されるのが、『寛文村々覚書』の「古城跡　先年梶川五左衛門居城之由　今ハ畑成」という記述であり、かつて遺跡の南側の旧字「元屋敷」辺りにあった大脇村が水害対策のため今の高台へ移転したとする「大脇村移転」の伝承である。文献史料によれば、「元屋敷」の地名は17世紀末（元禄11年）の古文書に見いだされ、また調査地点近くに存した曹源寺が1654年に火災に遭い、18世紀初頭には現在地の高台へ移転したという棟札の記述もある。こうした村の移転・開墾といった動向との関わりのなかで大脇城の終焉は理解されるのかもしれない。すべては今後の課題としておきたい。(坂倉澄夫・藤井孝之・北村和宏・秋田幸純)



第4図　大脇城跡周辺の旧地形（名四国道建設前）

第二東海自動車道試掘調査

第二東海道自動車道横浜東海線豊田ＪＣＴ建設予定地内、郷上遺跡（郷上Ａ地点・郷上Ｂ地点・郷上遺跡）における遺跡の性格およびその範囲の確認を目的に行った。調査期間および調査面積は下記のとおりである。調査方法については、愛知県埋蔵文化財調査センター・豊田市教育委員会の事前調査をふまえて郷上Ａ地点に８カ所、郷上Ｂ地点に４カ所、郷上遺跡に65カ所の試掘坑（トレンチ）を設定し、断面観察および各層位単位の発掘を行い、遺構の有無、遺物の出土状況を調査することとした。なお、試掘地点の遺跡名について、豊田市教育委員会と協議の上、今後「郷上Ａ地点」「郷上Ｂ地点」をそれぞれ「本川遺跡」「川原遺跡」と呼称する。

遺跡名	調査期間	トレンチ番号	調査面積
郷上Ａ地点＜本川遺跡＞	4/10～4/18	Ｔ01～Ｔ08	60㎡
郷上Ｂ地点＜川原遺跡＞	4/19～4/22	Ｔ09～Ｔ12	30㎡
郷上遺跡	4/23～5/22	Ｔ13～Ｔ77	480㎡

郷上Ａ地点＜本川遺跡＞

調査結果から、古墳時代中期および戦国時代の二時期を中心とした集落遺跡と考えられる。

遺跡の範囲としては、Ｔ01～Ｔ07にかけて包含層が展開することから、西端はＴ01以西、すなわち試掘対象内の西端が想定され、東端は、Ｔ07とＴ08の間を想定しうる。つまり、東西両側が谷状に落ち込む微高地上に遺跡が展開するものと思われる。遺構面は部分的に二面存在するが、時期的傾向としては古墳時代中期の遺構はＴ03周辺に、戦国時代はＴ04以東に集中する傾向が見られた。

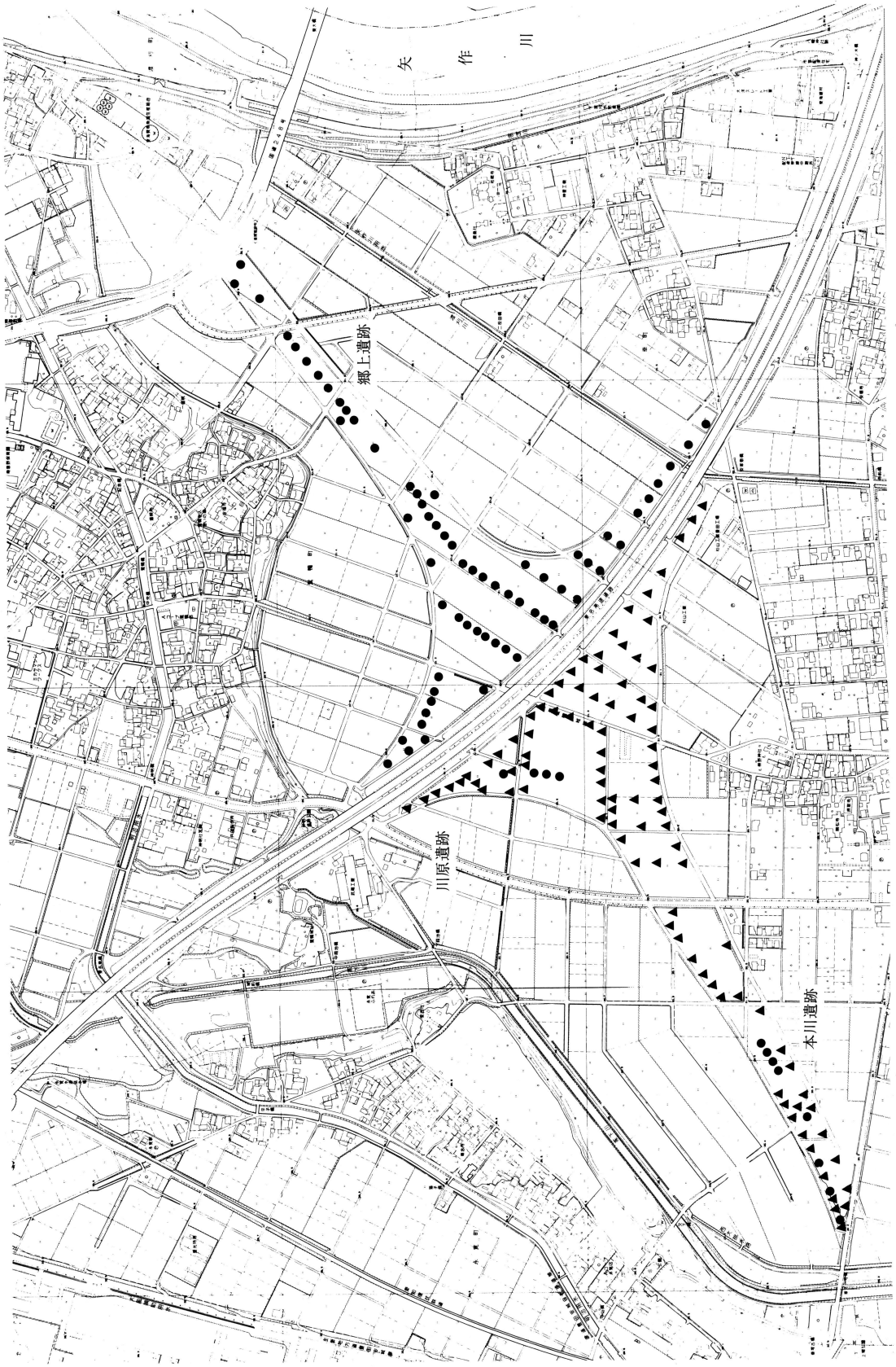
郷上Ｂ地点＜川原遺跡＞

調査結果から、遺跡は弥生時代中期を中心とするもので、集落跡と考えられる。Ｔ13で検出した「小区画水田」はこれにともなう可能性がある。そのほかこれまでに少量の須恵器、灰釉陶器、中世陶器片などが耕作土、包含層の上部から出土しているが遺構はとらえられない。遺跡の範囲は、南西側はＴ11～12間、北東側については、Ｔ13、14およびＴ13、15間に求められる。

＜郷上遺跡＞

調査結果から奈良時代から戦国時代の遺跡で、柱穴様の土坑、区画溝、井戸などの遺構のあり方からみて集落跡と考えられる。遺跡の範囲は、包含層・遺構からみて西限はＴ62、63間、Ｔ58、59間、Ｔ60、61間に求められ東限は今回試掘の対象となった東端すなわち国道２４８号線までが想定される。遺構には時期差がみられるが遺構検出面は一面で、いずれも基盤層である厚い細粒～粗粒砂層に掘り込まれている。なおＴ65、Ｔ70の間の旧河道（もしくは谷状地形）の以西と以東では土層堆積が異なっており、以西では耕作土直下が遺構検出面でほとんど包含層が失われているのに対し、以東は耕作土の下に厚い砂層があり、その下が旧耕作土（近世）となりその直下が包含層ないし遺構検出面となっている。

（坂倉澄夫・北村和宏）

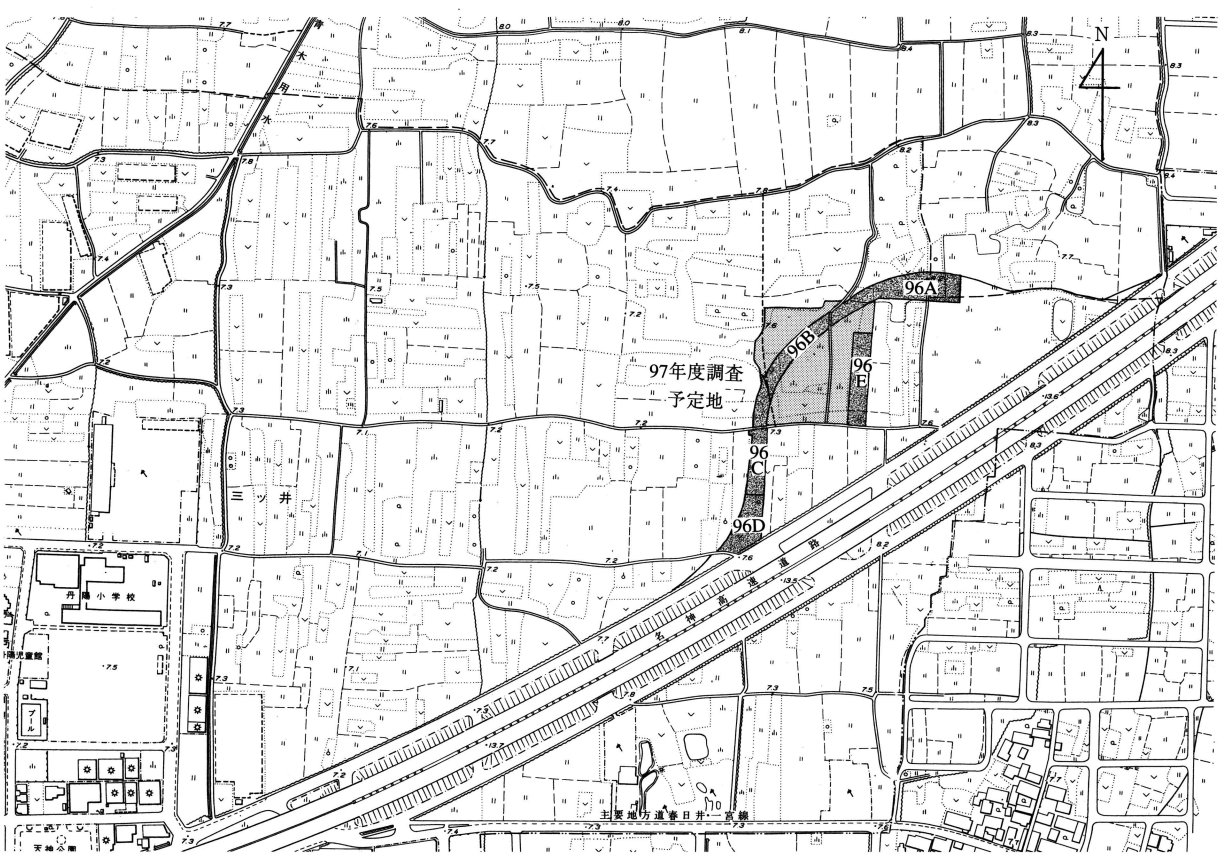


第1図　郷上遺跡試掘トレンチ配置図（●印：本センター実施　▲印：調査センター・豊田市教育委員会による調査地点　1：5000）

三ツ井（みついい）遺跡

調査の経過　三ツ井遺跡の所在する一宮市丹陽町三ツ井地区は、同市の東南部に位置しており五条川と青木川の合流地域にあたっている。この地区は、数多くの埋蔵文化財包蔵地として従来から知られる。しかし、日本道路公団が名神高速道路上りパーキングエリアの建設を予定している地域は未だ開発の手が及ばず中世期以降の島畑景観を良好に留めている事で知られていた。こうした状況下で愛知県教育委員会は遺跡の有無と遺跡範囲の確認調査を平成６年・７年にかけて実施した。その結果、パーキングエリア建設予定地内には古代から中世にかけて遺構・遺物を伴う遺跡であることが明らかとなった。遺跡としての範囲は、予定地の３分の１にあたる約12,000㎡程で、平成８年度は4,000㎡の調査面積計画でスタートしたが、後に調査面積の契約変更があって2,123㎡増の計6,123㎡を実施した。

今年度の調査地は先行事業である側道部にあたり、幅12ｍの狭長な調査区を東からＡ区～Ｄ区の４分割で行い、面積の増加分についてはＡ区の南側にＥ区として設定した。調査の結果、現行水田下１ｍの標高6.3ｍに堆積する黒色有機質粘質シルト層中より上位で遠賀川系土器を下位より縄文晩期の土器を検出した。さらに同土層中から稲のプラントオパールをも確認し、県下における稲作受容期の様相に問題提起することとなった。



第１図　調査区位置図（１：6250）

三ツ井遺跡の立地環境　三ツ井遺跡の所在する一宮市丹陽町三ツ井地区は、五条川と同河川の支流である青木川に挟まれた地域であり、両河川の形成した自然堤防帯と後背湿地に位置する。三ツ井遺跡は、標高が高位である畑地で約7.8m、低地である水田で7.3m、これらが複雑に入り組んで島畑といわれる独自の景観を呈している縄文時代から中世にまたがる複合遺跡である。

この地域には周知の遺跡が多く、三ツ井地区には縄文晩期の土器出土の池之上遺跡、方墳と推定されている稲荷山古墳、その他刻書「下乃」灰釉陶器出土の茂八杁遺跡、六所遺跡、飛所遺跡、五輪ヶ淵遺跡など存在する。また隣接する伝法寺地区には、弥生時代から古墳時代にかけての標識遺跡で著名な元屋敷遺跡、奈良時代の伝法寺廃寺、西大門遺跡など存在する。さらに西北約2.5㎞には縄文時代晩期屈指の集落遺跡である馬見塚遺跡、東北約２㎞には古墳時代初頭の平松遺跡が所在する。

三ツ井遺跡の概要　三ツ井地区はこの地域では良好に島畑景観を残していることで知られており、調査開始当初は島畑に伴う中世、またその下層に存在する古代の遺構の調査を主眼に実施した。そこで、島畑形成過程基礎資料を得るためにパーキングエリア内の全ての島畑にトレンチを設定した。遺跡の基本層序は現状畑地の場合、第１層として耕作土、２層：褐色シルト（中世整地層？）または、黒褐色粘質シルト（古代包含層）、３層：黄褐色砂質シルト、４層：暗灰黄シルト、５層：灰褐色粘質シルト、６層：黒色有機質粘質シルト、７層：にぶい黄シルトまたは灰オリーブ細粒砂である。検出された遺構・遺物は、縄文晩期～弥生前期（Ａ期）、Ａ期～古墳時代初頭（Ｂ期）、古墳時代～平安時代（Ｃ期）、中世（Ｄ期）の４時期に大きく区分できる。また、遺構検出はＣ・Ｄ期は３層上位で、Ｂ期は４層上位、Ａ期は７層上位でおこなった。

調査の進行に伴い、第６層黒色有機質粘質シルトの層位比高差が顕著な地点を確認でき、特に、Ａ区西部からＢ区東部にかけて幅約70m、比高差約1.5mの谷状地形の存在を確認した。この地形境部分西側から縄文後・晩期の土器等が出土、微高地部から遠賀川系土器・削痕系土器等が出土している。



島畑景観（調査区遠景北から）

A期の遺構・遺物　A期の遺構は、基盤層にあたる第7層上位で確認できた。その結果、Ba・Bc区に存在する落ち込みへの傾斜地に不定形の溝状遺構が検出され、縄文時代後晩期の土器などが出土した。また、C～D区に存在する微高地からは遠賀川系土器・削痕土器などが出土し、おもに弥生時代前期の遺構が検出された。

Ba・Bc区の溝状遺構は、おもな埋土がシルト質細粒砂で微高地から落ち込みへの溝のように検出され、深さは10～25㎝、形状は一定していない。おもな出土遺物は、縄文時代後期後葉と考えられる深鉢（8）、同晩期前葉（大洞BC式）と考えられる無文精製壺（4）、深鉢、石錘2点（1・2）、石製装身具1点（3）などである。無文精製壺はこの地方に類似が極めて少なく他の出土遺物から考えて寺津式に該当するものと考えている。

この他特筆する点としてBa区の黒色有機質粘質シルト層から数多くのイネのプラントオパールが検出され、また深鉢に看取できる籾圧痕がイネの可能性もあり、この地域における稲作受容時期が稲作形態も含めて今後の課題となろう。その他の遺構としてBb区のSK54、68、70、77、85、86があげられる。これらは円形または楕円形の小土坑で、径は上位で1m下位で50～60㎝、深さ60～80㎝と規模・埋土ともほぼ同様なものである。出土遺物が無いため時期・性格等不明であるが、弥生時代前期の土器を含む層の下位で埋没している。

D区のSK19は、遺構下層部に堆積する黒色土から数多くのイネのプラントオパールが検出されている。遺構全容は不明であるが土壌分析結果から近くでイネの栽培がおこなわれていたことを示すものである。時期は埋土から推定すると弥生時代前期と考えられる。

島畑Tiの下層では弥生時代前期の良好な遺構・遺物に恵まれ、溝2条、井戸と思われる土坑1基、住居と思われるもの2棟、他小土坑数基が検出された。特にSK01からは遠賀川系土器（壺・蓋・鉢等）が一括して出土、時期は貝殻山（新）に比定できよう。一宮市ではこれまでに遠賀川系土器は、馬見塚・弥勒・元屋敷・北川田・二夕子・河田・山中・八王子遺跡から出土している。三ツ井遺跡は9例目にあたり、この地における縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての様相を理解する際の新たな資料を提供することとなった。

B期の遺構・遺物　B期の遺構は、第4層上位で確認できた。その結果、B区～C区につながる大溝1条と大溝に合流・枝分かれする同時期の溝数条がほぼ調査区全域の地形境界部等で検出された。

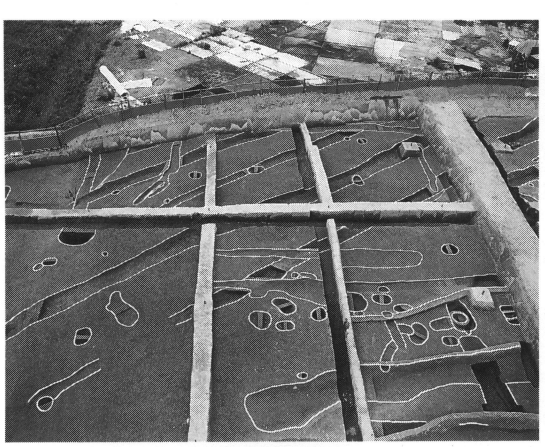
大溝（B区SD17）は幅2.5～3m深さ1m、他の枝溝は幅1m前後深さ50㎝で、これらはB区からC区を経て一部はD区へと続いているものと考えられる。遺構の時期出土遺物が皆無のため層序から推察すると、第3層上位で検出される最古の遺構が古墳時代前期（廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式）であることから、埋没時期はそれ以前ということになろう。また、掘削時期については調査区内外の採集土器片に弥生時代後期のものが存在することからこれを掘削時期と現段階では考えている。

C期の遺構・遺物　C期の遺構は、第3層上位で確認できた。C期の遺構は、現況水田の場合包含層はもちろんのこと遺構自体もほとんど削平されているため、現況畑地でおもに検出をおこなった。ただD期の記述で触れるが、島畑が形成される段階において、当時の地形を大幅に造成しているため現況畑地であっても古代包含層と考えている第2層（黒褐色粘質シルト層）が残存していたのは、A区島畑1東部とBa区島畑6東部とBb区島畑7であった。

A区で検出された遺構は、断面がU字または逆台形を呈し幅80～100cm深さ50～60cm規模の溝6条がほぼ等間隔で東北から西南方向の軸線で調査区全域に検出された。また、この溝群の南側では北辺に竈のある1辺4m程の竪穴建物を検出した。遺物はおもにSB01、SD09、10から出土しており、須恵器の杯・杯蓋・盤・椀・把手付鉢小型横瓶、土師甕、灰釉陶器の椀がある。時期は猿投窯編年によると小型横瓶がK－7、灰釉陶器の椀がK－90、他は全てO－10と考えられ、8世紀後半から9世紀後半に比定できる。

Ba区で検出された遺構は、断面がU字又は逆台形で幅100～120cm深さ30～80cm規模の溝5条が東西方向の軸線で検出された。遺構からの出土遺物は極めて少ないが、SD28からほぼ一個体須恵器の鉄鉢が出土しており、時期はO－10と考えられ、8世紀後半に比定できる。これはA区出土の把手付鉢同様猿投窯の特徴である表面黄土塗布の状況が明瞭にみられる。また2点とも一個体ほぼ完形であり新たな器種資料を得られることができた。その他、畿内産土師器の杯が1点出土しており、内面の暗文がみうけられないことからも8世紀後半代のものと考えられる。その他SK14からはS字甕と柳ヶ坪型壺が共伴し、埋土は古代の遺構とほぼ同じ黒褐色粘質シルトである。これにより第3層の上位で検出される遺構の時期は古墳時代前期まで遡ることが確認された。古墳時代前期のその他の遺構としては島畑Ti下層で井戸と思われる土坑3基と小規模な溝を確認できた。

これらの成果から三ツ井遺跡の古代は8世紀後半代が中心となり、検出遺構の軸線は東北から南西方位にあることから、この地域における本格的な条里の施行は中世に入ってからと推定する。ただし、A区とB区で検出した溝群の切り合い関係が未確認の段階であるので、A区の溝群（古）・B区の溝群（新）と確認されれば条里の施行時期は遡る可能性はある。



A区完掘状況（南から）



Ba区完掘状況（南から）

D期の遺構・遺物　D期の遺構は、C期同様第3層上位で確認できた。遺構は島畑に関わると思われる溝・土坑がおもに現況島畑から検出され、埋土はほぼ第2層と同じ褐色シルトである。遺物は細片でごく少数なため遺構時期の決め手を欠くが、現段階ではA区SK41出土の灰釉系陶器の小皿（北部系）が唯一の出土遺物で大洞東または大畑大洞と考えられ14世紀後半に比定できる。

そこで、ここでは島畑形成過程について金田章裕氏の研究にもとづきながら三ツ井遺跡の島畑について若干の検証を試みる。

三ツ井地区周辺の島畑を実査している金田氏の「条里地割内部における島畑景観の形成」（『条里と村落の歴史地理学研究』1985年）によると、島畑形成の微地形条件について以下の4点の事実が確認されている。

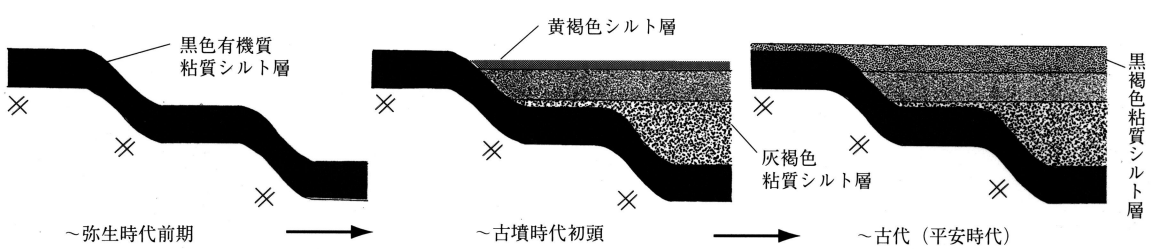
①自然堤防とその後背湿地の基本的配置は弥生時代頃にはほぼ現状に近いものとなっている。

②それ以後においても自然堤防は辺縁部へ部分的に拡大している。

③洪水堆積物と島畑はデリケートに対応している。土層から厳密な島畑の造成時期は知ることはできない。

④島畑はいずれも表土下の第1あるいは第2の層の堆積以後に造成されたものであり、一般的には水田面下30～40㎝ぐらいで、最も深い例でも50㎝ぐらいで、互いに隣接する水田と島畑の土質は同一のものとなる。

第5図にあるように調査区内に存在する島畑へそれぞれ島畑1～島畑8と開発エリア内の島畑をそれぞれ島畑Ta～Tiとし、ほぼ全島畑に1ヶ所以上の断面を調査した。その結果、①②については周辺の他の遺跡とほぼ同様の状況がみられる。また、現況から約1m下層に存在する黒色有機質粘質シルト層上位堆積時期は三ツ井遺跡においては弥生時代前期であることが確認できた。さらに、その後の堆積状況を模式化すると以下の様になる。



第2図

つまり極端な例ではあるが、三ツ井遺跡では弥生時代前期の段階に形成された旧地形はその後の堆積状況により古代（平安時代）には地表面からは判別の難しい景観となっていたと考えられる。次に④について、三ツ井遺跡内島畑はこの状況にあてはまり、第2層黒褐色粘質シルト（古代包含層）を削平して開発行為がおこなわれている。

また金田氏は島畑造成のタイプには次の3様があるとしている。

A水がかりのよくない自然堤防の中核部分で、むしろ水田の「地下」を主目的とするような形で島畑が形成されている場合。

B自然堤防の縁辺から後背湿地部での島畑形成であり、もともと水田として利用していたが、そのうちのやや水がかりの悪い部分、すなわち「低湿水損場であると同時に旱損場である」というような場所であるいは従来の良田の部分が氾濫を被ってそのような条件になった場合に、水田の一部に土を掻き揚げて島畑を造成することによって畠と水田とに分離し、両者共有効に利用できるようにしたケース。

C「島畑は条里制の施行、水田化作業の進行する中で、それ以前に形成された自然堤防があたかも島のように水田中にとり残され、そこが畠地となったもの」（『師勝町史』弥永貞三氏）にあるように、現在なお島畑として確認できるものにはこのタイプが多い。

最後に、この分類を踏まえて調査した島畑について三ツ井遺跡独自の分類を試みる。

微高地利用タイプ（畠→）		開発に伴い上層削平タイプ		
旧地形	古代包含層	畠→	畠→水田→畠	水田→畠
島畑4	島畑1東 島畑6東	島畑1西　島畑7 島畑3　島畑8 島畑5 島畑6西	島畑Tb 島畑Tc 島畑Tg	島畑2　島畑Tf 島畑Td　島畑Th 島畑Te　島畑Tj

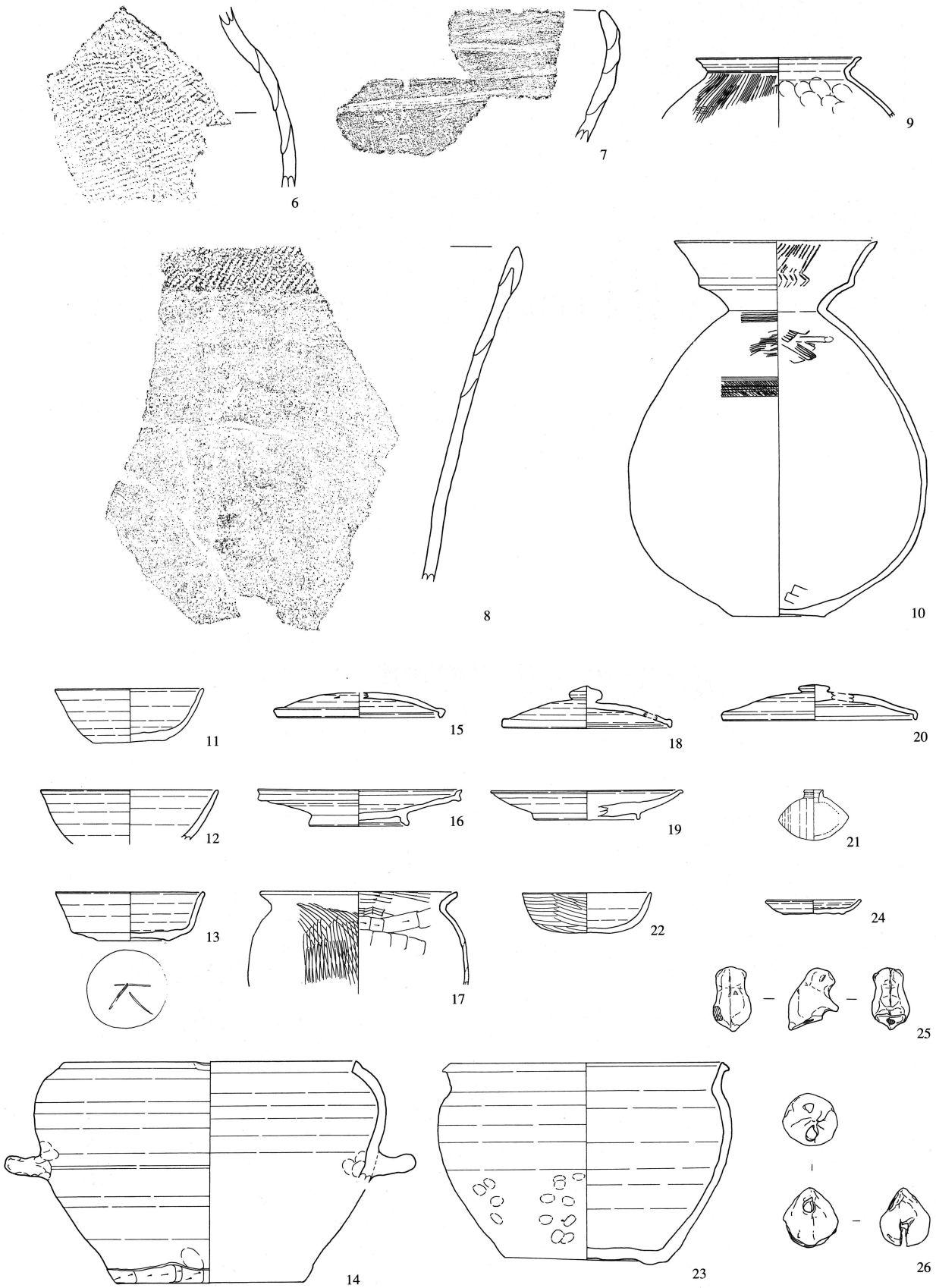
※島畑Taは調査不可能、島畑9・10・11は来年度調査予定のため掲載していない。

今回の調査により、開発に伴い上層削平タイプの島畑は幾度かの拡大・縮小等を繰り返して現在に至るものと確認でき、タイプBに該当する。また、微高地利用タイプはタイプCに該当する。　（小川芳範）



1～3、5（S=1/2.5、4（S=1/5）

第3図　出土遺物

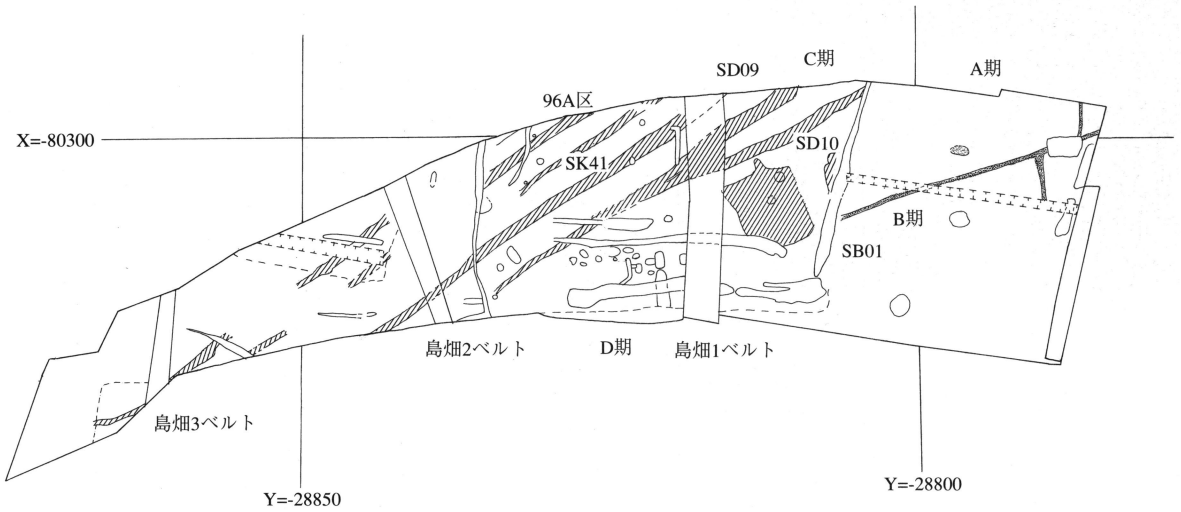


9～24（S=1/5），6～8, 24・25（S=1/2.5）

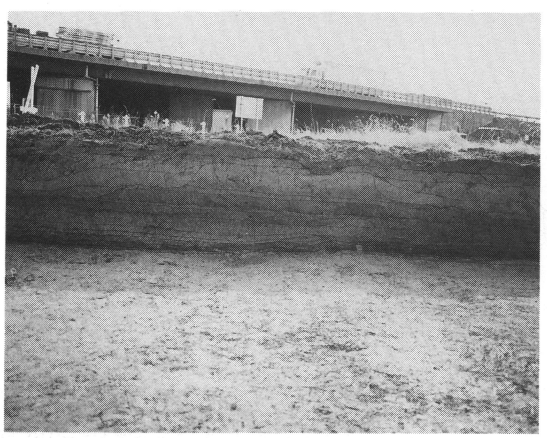
第4図　出土遺物



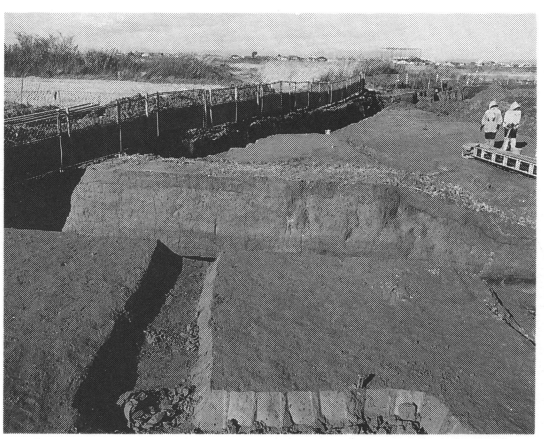
第5図　島畑位置図（1：2500）



第６図　Ａ区上面主要遺構図（１：625）



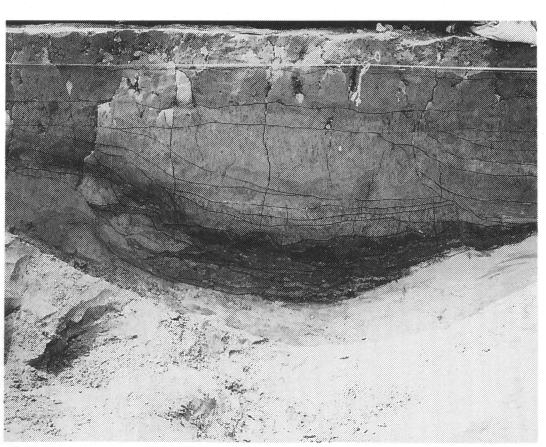
島畑Ｔｉ南壁セクション



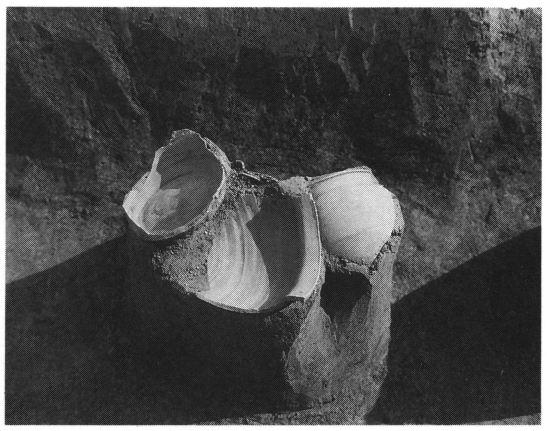
島畑８北壁セクション



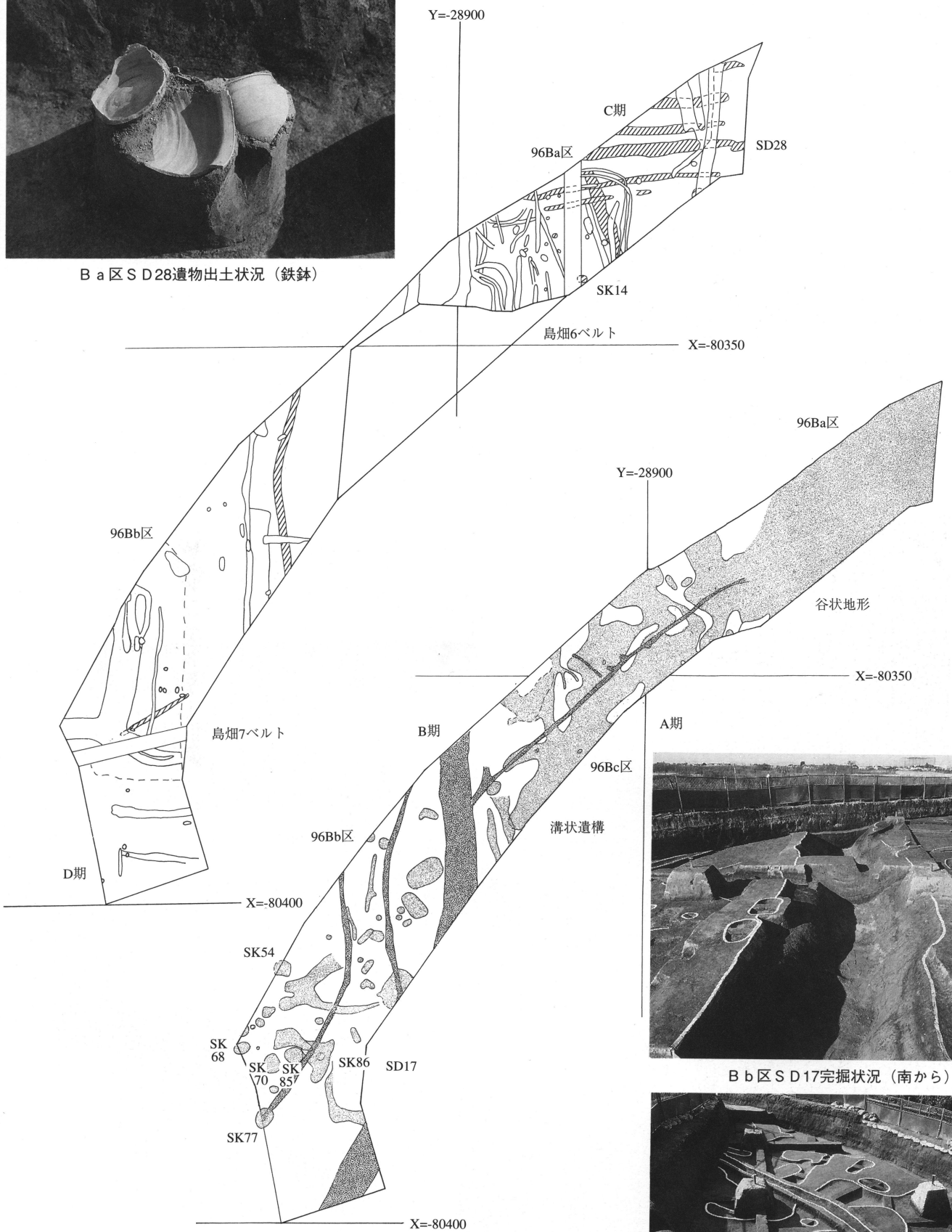
島畑Ｔｉ下層ＳＫ01遺物出土状況（東から）



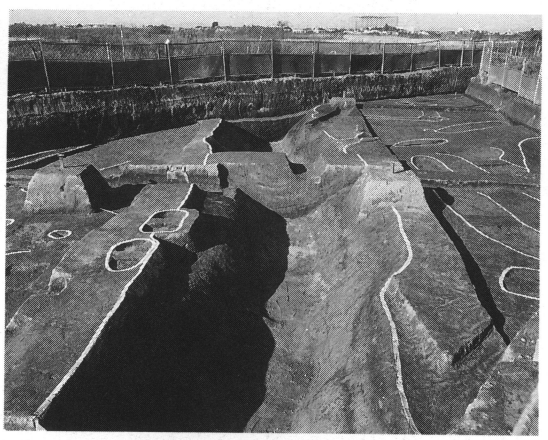
Ｄ区ＳＫ19西壁セクション



Ｂａ区ＳＤ28遺物出土状況（鉄鉢）



第７図　Ｂ区上・下面主要遺構図（１：500）



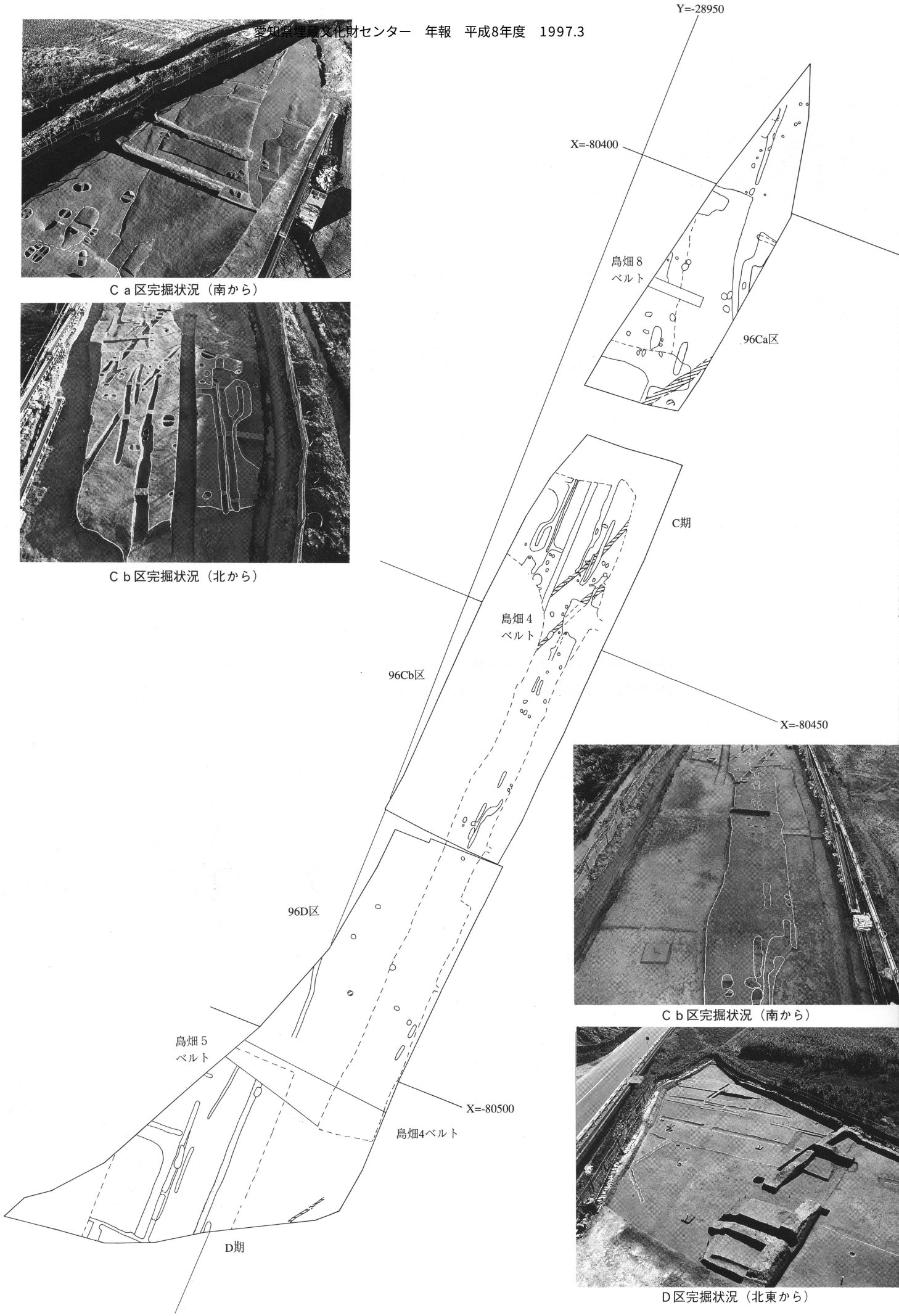
Ｂｂ区ＳＤ17完掘状況（南から）



Ｂａ区溝状遺構（東から）

Ｃａ区完掘状況（南から）

Ｃｂ区完掘状況（北から）



Ｃｂ区完掘状況（南から）

Ｄ区完掘状況（北東から）

第８図　Ｃ・Ｄ区上面主要遺構図（１：500）

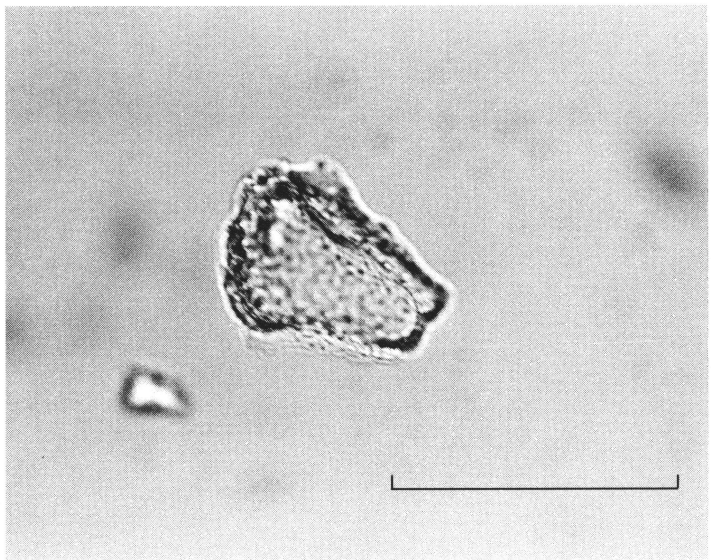
自然科学　三ツ井遺跡において植物珪酸体（プラント・オパール）の定性分析をおこなった。試料はA区、D区、Ba区およびBb区の溝、土坑およびトレンチより水平的または垂直的に採取したものである。植物珪酸体の抽出と分析方法は次の手順で行った。試料の分散と沈底法による微粒子（20μm）の除去後、残渣を乾燥させた。その残渣を封入剤（オイキット）中に分散させ、プレパラートを作成し検鏡をおこなった。同定はイネ科植物の機動細胞珪酸体に由来するものを主な対象として、400倍の光学顕微鏡下でおこなった。植物珪酸体はイネ属・ヨシ属・ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属などが含まれる）・棒状珪酸体・不明種・その他（植物珪酸体とともに検鏡される珪藻など）のものに大きく分類し、検鏡の効率化をはかった。分析した試料は合計151点におよぶが、このうち主要な遺構の分析結果を以下に報告する。

分析結果　A区では、弥生時代前期の遺物がみつかっている黒褐色粘土層から、ヨシ属の植物珪酸体にともなってイネ属の植物珪酸体が確認される。

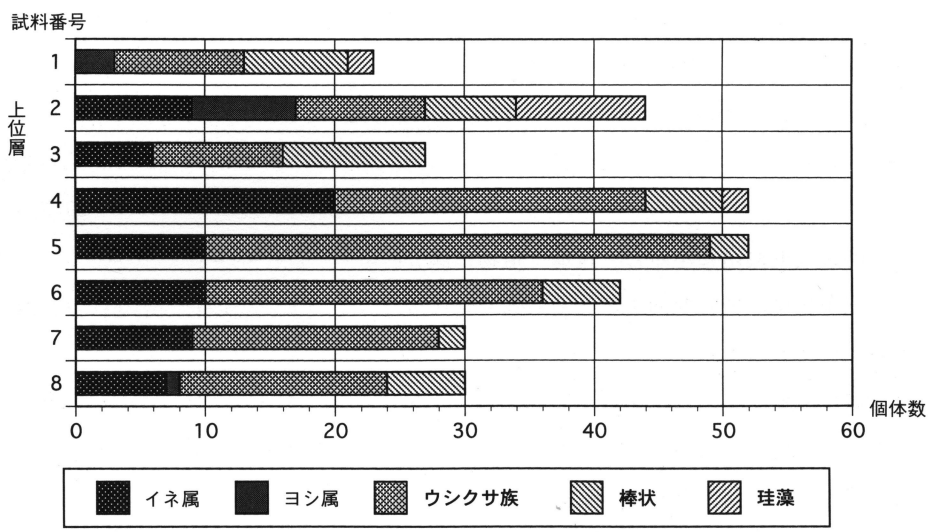
Ba区のトレンチにあらわれる層序断面では、縄文時代晩期と推定される層厚およそ10cmの黒褐色シルト質粘土層（標準土色、10YR2/2の色調を示す）が、側方へ連続性よく確認することができる。本層は調査区西方から東方に向かい徐々に標高を下げる（標高差およそ0.8m）。この粘土層からもイネの植物珪酸体が確認された。また、西方から東方へ標高が低くなるにしたがって、検鏡されるイネの植物珪酸体密度が西方で高く、東方で低くなる傾向がみられる。東方で採取した試料では、イネの植物珪酸体の数が減少していくのとは対照的に、*Pinnularia*属、*Cymbella*属といった湿地性・流水性の珪藻殻の増加がみられた。このことから、黒色粘土層の堆積時には調査区東方において流水的な湿地環境が広がっていたものと推定される。

Bb区では、弥生時代前期の土器を含む層の下位よりみつかる土坑群の試料について分析をおこなった。試料全体を通してウシクサ族（ススキ属などを含む）の植物珪酸体が多くみられる（第9図）。例えば、土坑群のひとつであるSK86の分析結果では、イネ属の植物珪酸体も若干確認されてはいるものの、イネ属の量に比べてその数10倍の量のウシクサ族の植物珪酸体がみつかっている（第10図）。A区・Ba区・D区・の試料と比較して、Bb区ではおのおのの試料中の植物珪酸体含有量が非常に多く、かつ検鏡される植物珪酸体のほとんどをウシクサ族が占める。このような大量の、ススキ属などを含んだウシクサ族の植物珪酸体がみつかる事実は、Bb区がほかの調査区に比べると乾陸地であり地形的に高い場所であったことを示唆する。

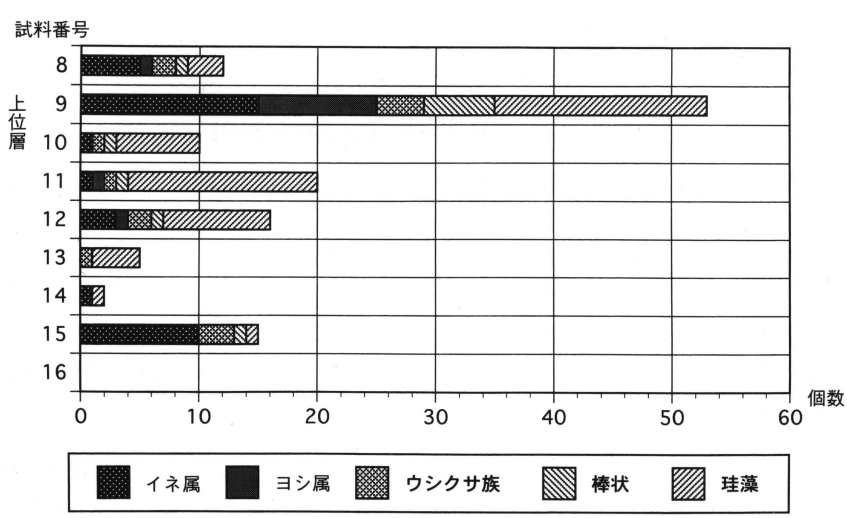
D区の弥生時代前期と推定される土坑、SK19からヨシ属の植物珪酸体にともなって、イネ属の植物珪酸体が確認される。とくに、層厚およそ10cmの黒色粘土からなる9層（試料番号9）では、同じSK19の他の試料に比べてイネ属の植物珪酸体が多くみられる（第11図）。また、全ての試料から植物珪酸体とともに珪藻殻も検鏡され、*Pinnularia*属、*Cymbella*属といった湿地性・流水性の珪藻が多くみられた。このことから、土坑の埋積過程において本調査域は沼沢地的な環境であったことが示唆される。　（鬼頭　剛）



第９図
Ｂｂ区でみつかるウシクサ族植物珪酸体の
顕微鏡写真
スケールは100μｍ



第10図　Ｂｂ区、土坑（ＳＫ86）の植物珪酸体定性分析結果



第11図　Ｄ区、土坑（ＳＫ19）の植物珪酸体定性分析結果

まとめ　三ツ井遺跡の発掘調査は本年度より２ヶ年計画で進めているが、本年度までの調査で明らかになったことについて年代順にまとめると、以下の通りとなる。

①三ツ井遺跡は、縄文時代後期後葉より多少の断続はあるものの中世にまたがる複合遺跡である。

②三ツ井遺跡の初現は、縄文時代後期後葉段階まで遡る。この様相は尾張平野における縄文中期以降の海退現象に伴う住居域拡大による結果であろうが、本遺跡の北３㎞に位置する縄文中期の遺跡である佐野遺跡との関連を考慮する必要性が生じた。この時期では明確な遺構を伴っておらず遺物としても散在的である。

③縄文時代晩期前半になると、若干の遺構の検出と共に遺物量は増加する。粗製深鉢を主体としながらも、大洞ＢＣに比定できる小型精製壺の出土は注目される。更に、この時期の土層中に量的に多い稲のプラントオパールを検出した事や稲の籾殻圧痕の可能性のある土器片が出土している事は、付近での小規模かつ初現的な稲作を考慮する必要がある。

④縄文時代晩期後半のいわゆる突帯文期は、三ツ井遺跡において空白期となる。ウシクサ等のプラントオパールの検出は、高燥化を裏付けており一時的な住居域の移動を示唆している。

⑤弥生時代前期段階に至ると、遺構・遺物は調査区全般に広く見られるようになる。状況は、五条川中流域に共通する在地的弥生時代前期遠賀川系壺（削り出し突帯が主体）に、削痕系深鉢が組成する。

⑥弥生時代中期～後期は、低調で遺構・遺物ともに明確な面を確認できないが、古墳時代になると南北方向にＢ区・Ｃ区を縦断する溝や、Ｃ区の東側では井戸や溝も検出でき、居住域としての土地利用が活発化する。

⑦古代（８世紀後半）の遺構は主には現況島畑上で確認している。Ａ区からＢ区にかけて比較的大規模な北東から南西方向の溝６条が確認された。溝付近から住居跡と想定できる遺構を検出したが、この時期の居住域の中心はより北方にあるのであろう。

⑧視覚的な景観としての島畑の形成は中世後半と言われていたが、これを裏付ける事ができた。これらに伴う遺構群はいずれも東西・南北方向を維持しており、中世条里規制の過程で形成された事を窺わせる。今日に残る島畑は中世の島畑の延長線上にあるが、同一の島畑でも縮小・拡大といった改変を幾度となく受けており当時の社会変化の影響であろう。

⑨三ツ井地区は二つの河川形成による微高地と湿地帯が複雑に展開しているが、大きな地形環境としてＡ区西側からＢ区東側にかけて南北に走る谷地形が認められた。谷地形に沿うように微高地が南北方向に展開するが、古墳時代の早い段階には平坦化が進行し新たな地形環境での土地利用への段階に入る。

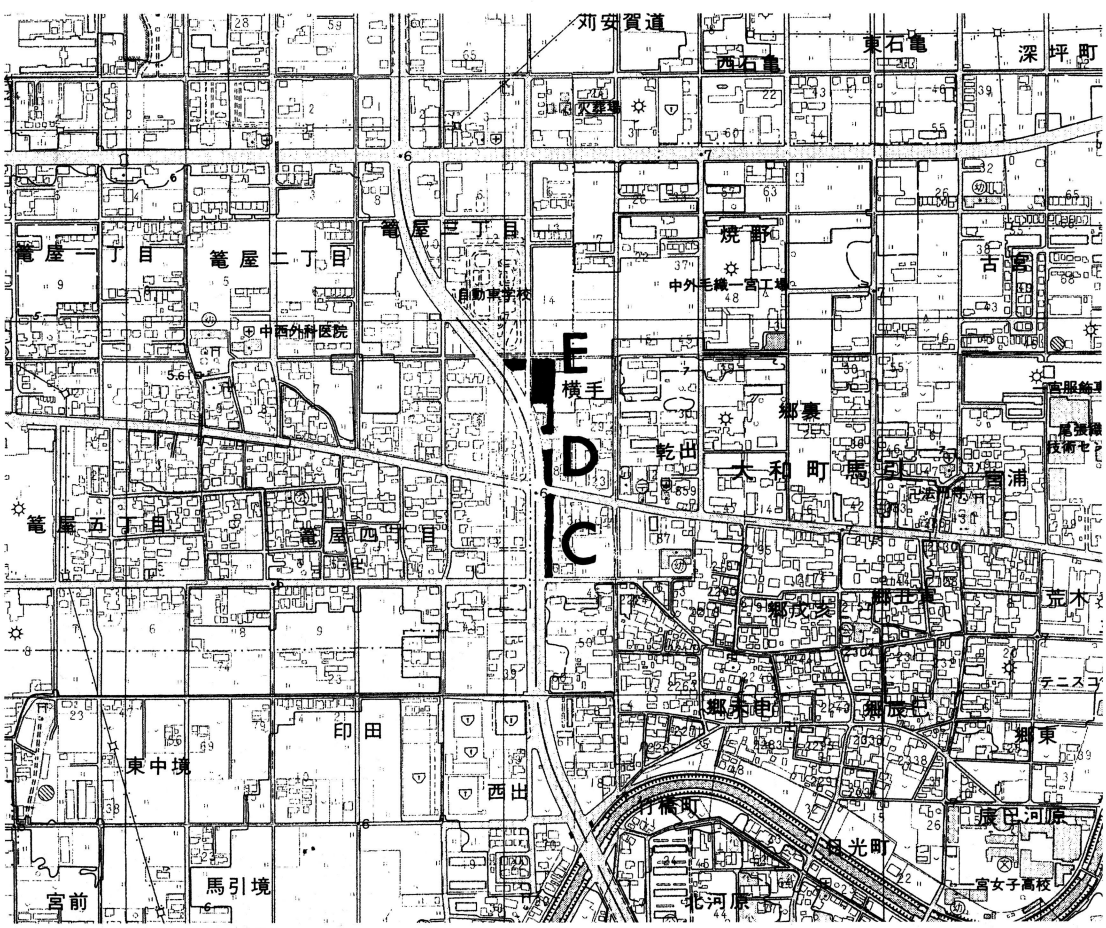
（高橋信明）

馬引横手遺跡（まびきよこて）

調査の経過　馬引横手遺跡は、一宮市大和町馬引字横手から尾西市籠屋にかけて広がる遺跡で、木曽川水系日光川上流域に形成された標高６ｍ前後の自然堤防及び後背湿地上に展開している。

本遺跡は、中世の遺物散布地として県遺跡番号 02097で登録されている。本遺跡の南の日光川左岸には鎌倉時代から室町時代の遺物散布地として知られる毛受遺跡（県遺跡番号02098、一宮市大和町毛受）や、本遺跡の東側、起街道沿いには法圓寺中世墓遺跡（県遺跡番号02077,一宮市大和町馬引）が、また、北には、縄文時代の遺物散布地である東苅安賀道遺跡（県遺跡番号07005、尾西市開明字苅安賀道）が存在する。

今回の調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として昨年度より実施している。本年度は西尾張中央道の東側で4,960㎡を、Ｃ区～Ｅ区の３つの調査区に分割して実施した。調査期間は平成８年４月から平成８年10月である。　（小泉　渡）



第１図　調査区位置図（１：10,000）

C区の概要　まず室町時代の遺構としては、調査区北側（Ｃａ区）では東西方向の溝が規則的に並ぶ様子が確認できた。ただ区画内では堀立柱建物は検出できたものの、井戸は確認できなかった。これは昨年度に比べると調査区の東西幅がかなり狭いことが影響していると思われる。また遺物の出土量も昨年度に比べるとかなり少なかった。他方、調査区南側（Ｃｂ区）では遺構、遺物ともほとんど確認できず、ここがこの時期の遺跡の南限と思われる。

ただ、Ｃａ区では下面の遺構を確認できなかったのに対して、Ｃｂ区では昨年度の調査との関連で興味深い事実を確認することができた。Ｃｂ区の南西端が微高地状に高くなっており、その北側の低い部分に古墳時代の遺物がまとまってみられることである。湿地的な堆積をしており、遺物も周辺から流れ込んできたものと思われるが、昨年度の遺物と同時期のものである。さらにその北側には溝状の落ち込みがあり、遺物は出土しなかったものの、堆積状況から昨年度確認された縄文時代の谷地形との関連が考えられる。

D区の概要　調査区南側（Ｄｂ区）は大部分が攪乱であったが、南側が一部分残っており、そこではＣａ区と同様に溝・土坑が展開している。下面の遺構は確認できなかった。

E区の概要　D区北側（Ｄａ区）およびE区南側では、Ｃａ区と同様に東西方向の溝に区画されて土坑などが展開する様子が確認された。

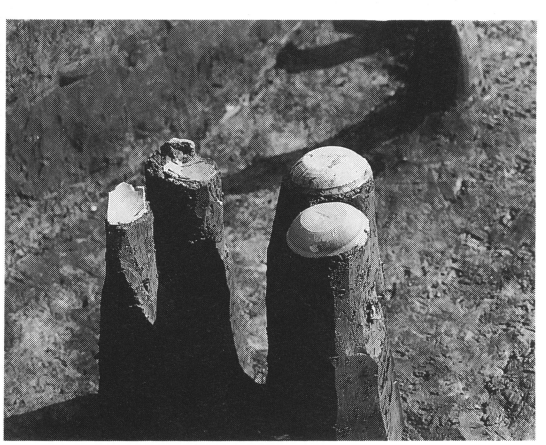
その一方でE区北側では遺構・遺物ともにきわめて希薄で、東西方向の溝も検出されなかった。遺跡の北限ではないかと考えられるが、注目すべき点は、西側で南北方向の溝が検出されていることである。調査区内ではこの南北の溝と東西方向の区画溝とのつながりを確認することはできなかったが、この南北の溝がおそらく道となって、東西の溝とつながって短冊型の地割を形成しているのではないだろうか。

まとめ　馬引横手遺跡において短冊型地割状に室町時代の遺構群が展開する様子が確認できたことは、この地域の中世史を考える上で貴重な資料を提供できたと思われる。また古墳時代、縄文時代に関しても今回の調査でははっきりとした遺構は確認できなかったものの、周囲に集落があったこと可能性を十分考えることができると思われる。

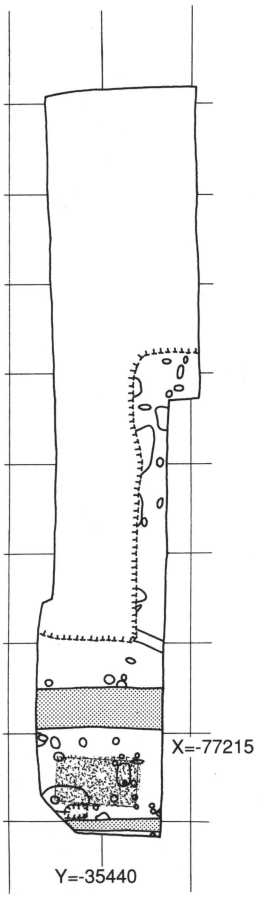
（伊藤太佳彦）



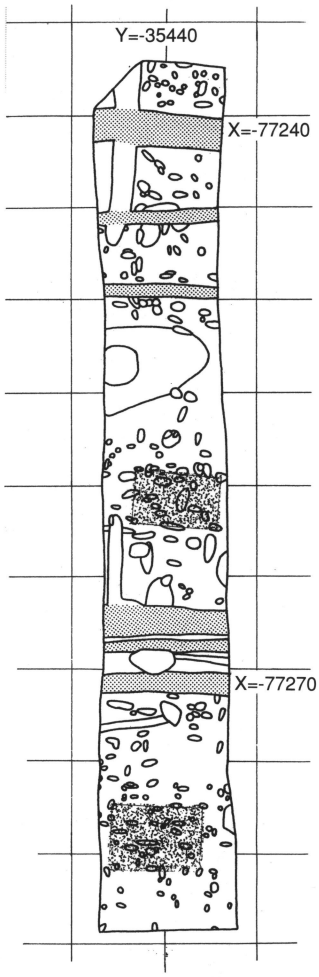
遺物出土状態　Ｃｂ区



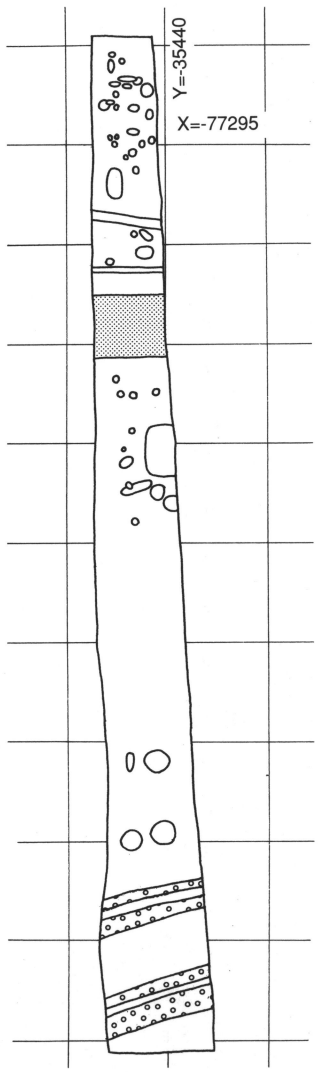
遺物出土状態　Ｃｂ区



第2図　Ｄｂ区



第3図　Ｃａ区



第4図　Ｃｂ区

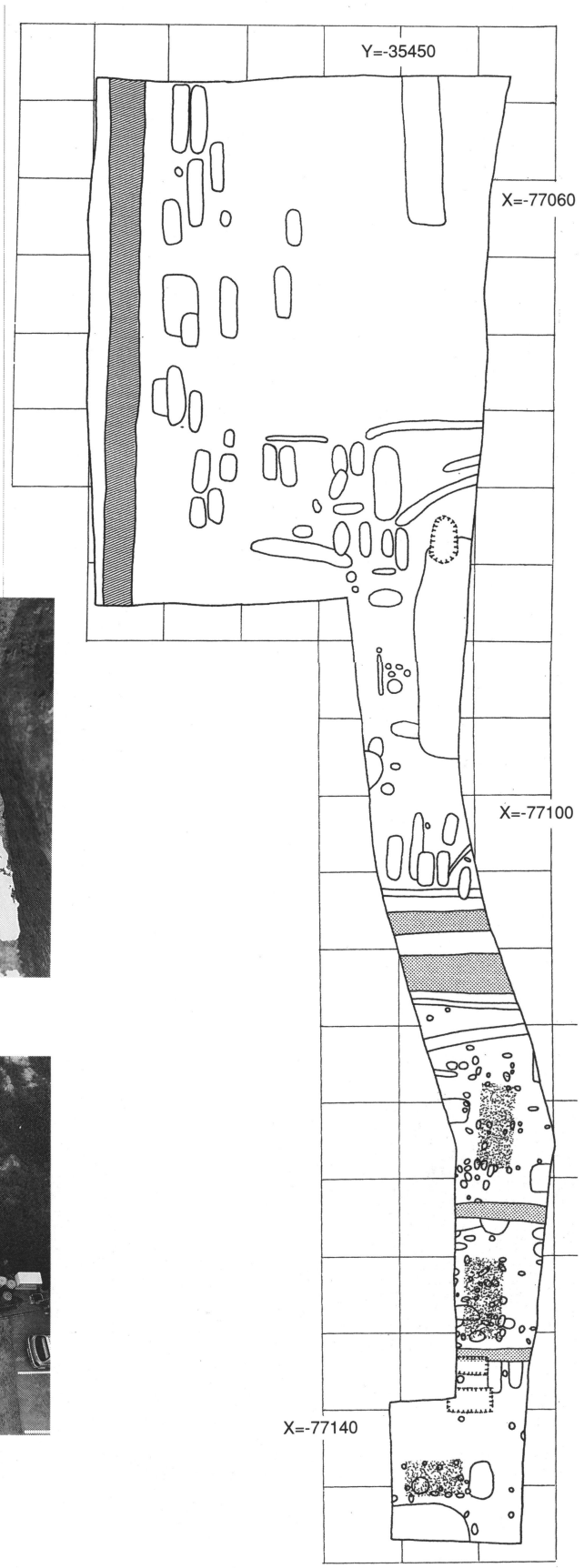


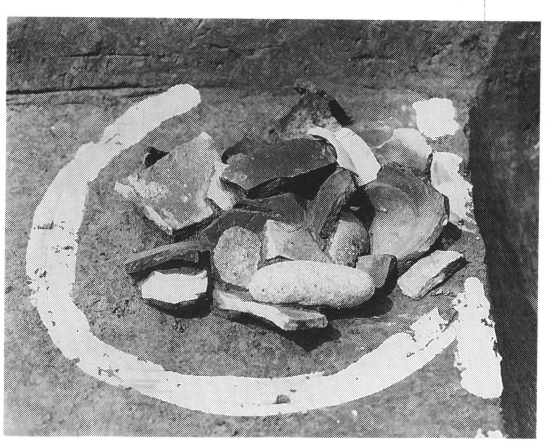
Ｃａ区（北から）



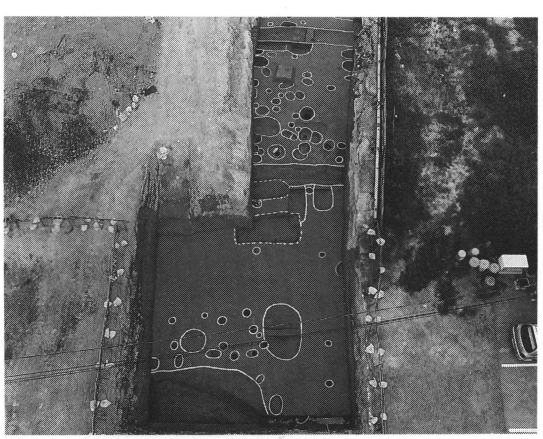
遺物出土状態（Ｅａ区）

第５図　Ｅａ区





遺物出土状態（Ｅａ区）



Ｄａ区全景（南から）

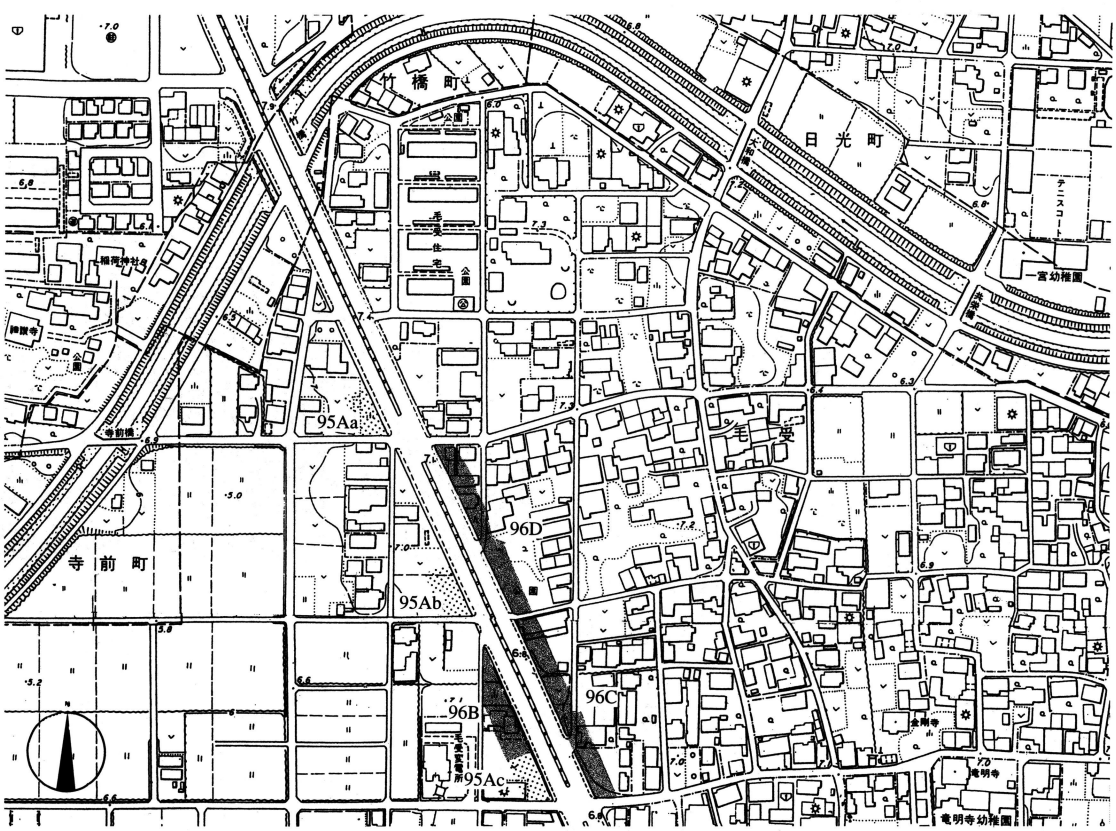
毛受（めんじょう）遺跡

調査の経過　毛受遺跡は、一宮市大和町毛受に所在する。本遺跡は、尾張平野の北部をやや蛇行しながら南に流れる日光川の上流域にあたる標高７ｍ前後の自然堤防帯の上に分布する。

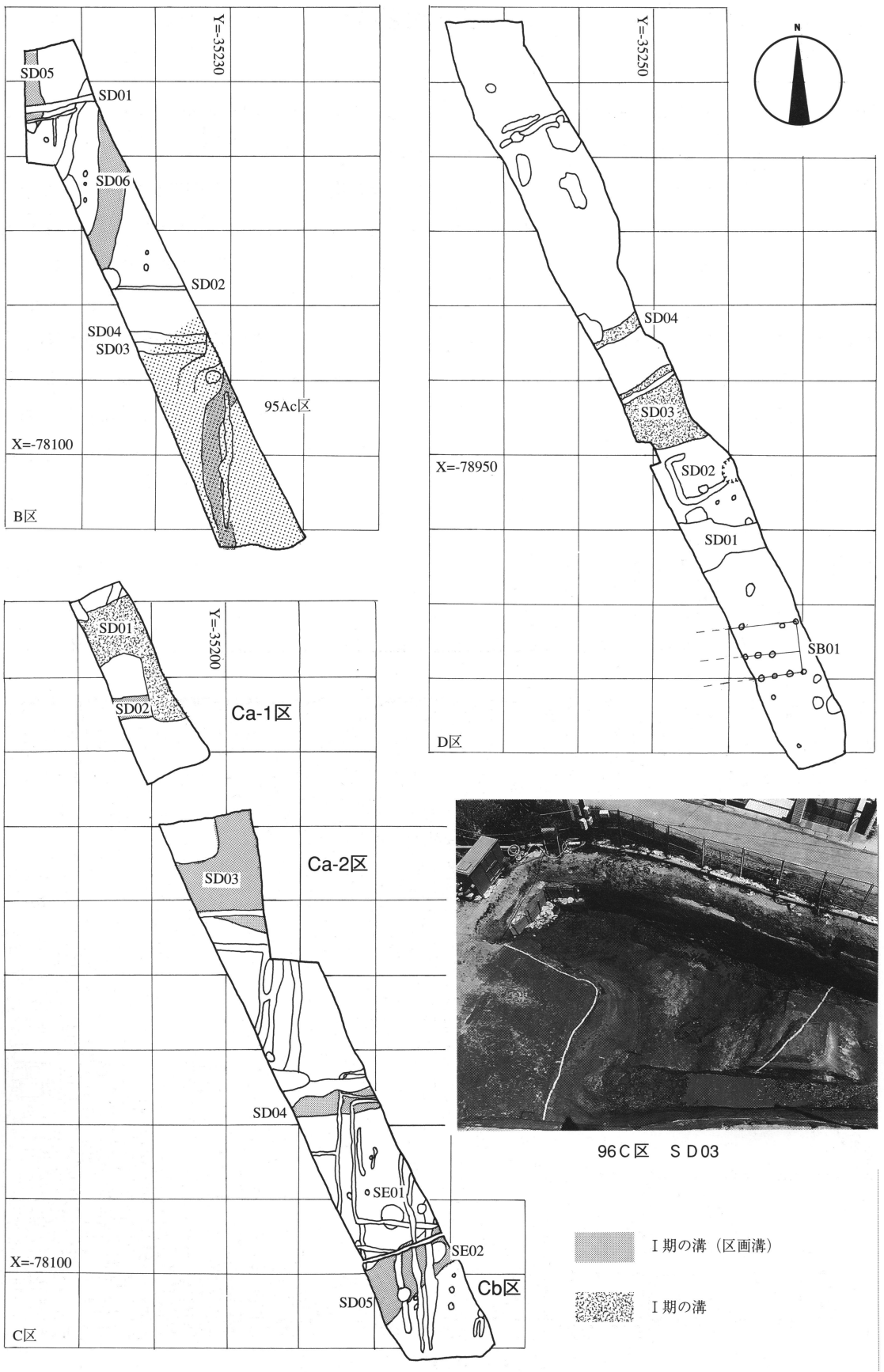
発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として平成７年度より実施しており、本年度は西尾張中央道を挟んで西側にＢ区、東側にＣ区・Ｄ区の３つの調査区、合わせて4,115㎡を発掘調査した。調査期間は４月～10月である。　（浅井　厚視）

調査の概要　毛受遺跡の基本層序は概ね、第１層：盛土（撹乱土）、第２層：黄灰色～黄褐色砂質シルト、第３層：暗灰黄色シルト、第４層：暗灰黄色～黄褐色シルト、第５層以下は基盤層で、黄褐色の粘土質シルトもしくはそれと灰黄色の細粒砂との互層となる。部分的に第２層と第３層との間に洪水性の堆積である細粒砂層が挟まれている。遺構の時期は、第２層で検出したものが江戸時代後期、第３層で検出したものが室町時代後期にほぼ相当すると思われる。ここでは後者の時期をⅠ期、前者の時期をⅡ期とに区分する。

Ｂ　区　95Ａｃ区のすぐ北に位置する。ＳＤ02・03・04は、調査区を東西に横切っており、何らかの方向性をもつと考えられる。ＳＤ05は、方形にめぐる区画溝と考えられる溝で、検出したのはその南東角にあたる。断面箱形に掘削されており、常滑産の甕などが出土した。



第１図　調査区位置図（１：５０００）



96C区　SD03

第2図　96B・C・D区遺構配置図（1：800）

この調査区の北西側周辺に当該期の屋敷地の存在が想定できよう。ＳＤ06は南北方向をＳＤ05にほぼ同じくする溝で、検出した面での幅約２ｍ、深さ約1.2ｍを測り、断面箱形である。この溝の最下層からは漆椀が１点出土した。ＳＤ05・06の双方から出土した遺物の時期や、平面的あるいは層位的な位置関係からＳＤ06は、ＳＤ05の外側をめぐる区画溝の可能性もある。

Ｃ　区　Ｃａ－１区は、現地表から下約2.5ｍくらいまで撹乱をうけていたため、遺構の残存状況は良好ではなかった。調査区内をクランク状に走るＳＤ01は、検出面での幅約７ｍ、深さ約1.5ｍの大溝である。この溝の最下層から室町時代後期の漆椀、土師器皿などが出土した。ＳＤ01に切られるＳＤ02の底面には、太さ約10cmの竹が２列に並べられており、さらに調査区の西側へ延びていく。内側の節は抜かれていたので、水を流す導管のような構造物の一部であると思われる。Ｃａ－２区からＣｂ区にかけて、東西・南北の方向性をもったⅡ期の区画溝が展開する。天保年間に描かれた村絵図によれば、当時この付近まで毛受村の集落が広がっていたことが窺えるので、これらの溝が、集落（町屋？）内を区画していたと考えられる。またＳＥ01・02はいずれもこれらの区画溝に切られていた。ＳＤ03は、検出した面での幅約10ｍ、深さ約1.5ｍを測る、断面箱形に掘削された溝で、その形状や、埋土の堆積状況か居住域（居館のような屋敷地）を囲む「堀」の南東角と思われる。ＳＤ02とＳＤ03とで囲まれた約10ｍ四方程度の規模の屋敷地が想定できよう。ＳＤ04からは、下半分は欠損していたが、木製卒塔婆が１点出土した。このことからこの溝もまた、居住域を区画するしていたと考えられる。

Ｄ　区　ＳＤ01から南側は、Ｃａ－１区同様の撹乱をうけていた。ＳＢ01は２間×４間以上の掘立柱建物で、ほとんどの柱穴に礎板が残存していた。ＳＢ01の方向性は、Ｂ区ＳＤ05・06、Ｃ区ＳＤ02・03・04の方向性とほぼ合致するので、ＳＢ01とこれらの区画溝とが同時期の遺構であると考えられる。ＳＤ03は、検出面での幅約10ｍ、深さ約２ｍの大溝で、Ｃ区ＳＤ01とほぼ同じ方向に延びる。これら２つの溝とＣ区ＳＤ03などの区画溝とは、いくらか時期を異にするようである。ＳＤ04は層位的にＳＤ03に先行していることから、Ⅰ期よりも若干古くなりそうである。

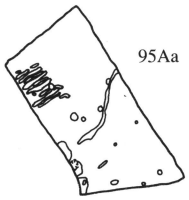
まとめ　昨年度同様に遺物の出土量は、全体的には、さほど多くはなかったが、昨年度の見解を改変すべき成果もいくつか得られた。

①96Ｄ区ＳＤ04から北では、遺構・遺物ともに稀薄になることから、この付近が毛受遺跡の北端になると思われる。このことは95Ａａ区・Ａｂ区の様子からも窺える。

②毛受遺跡の遺構・遺物から、遺跡の時期は、室町時代後期と江戸時代後期との大きく２つに区分される。また前者の時期については、さらに２つに小区分できそうである。

③室町時代後期には、この付近には、いくつかの屋敷地（居館）あるいはそれを囲い込むように区画された居住域が存在していた。それは96Ｂ区の西側へも展開していく。

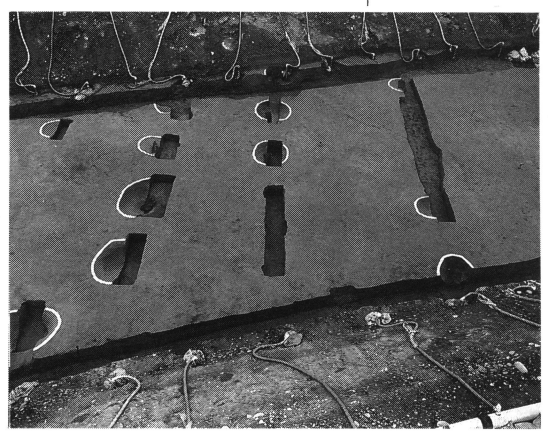
④調査区周辺には、少なくとも天保の村絵図が描かれた江戸時代後期には、企画的にいくつかに区画された地割がなされた毛受村の集落が広がっていた。　（飴谷　一）



Y=-35300

Y=-35200

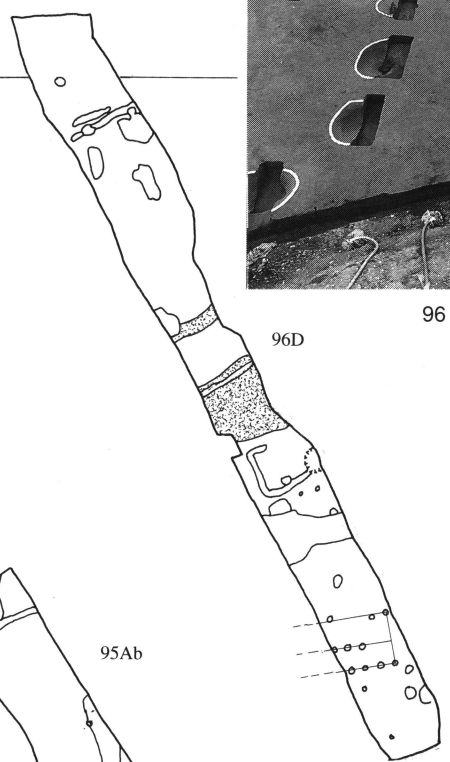
X=-77900

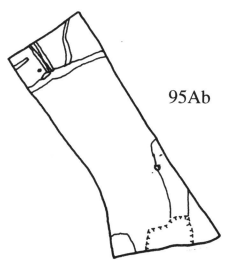


96D区　ＳＢ01



96D区　ＳＤ03

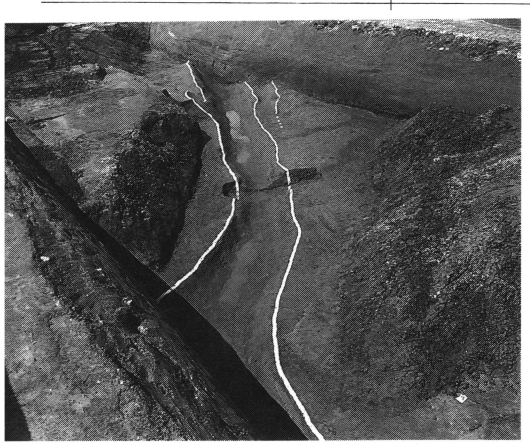




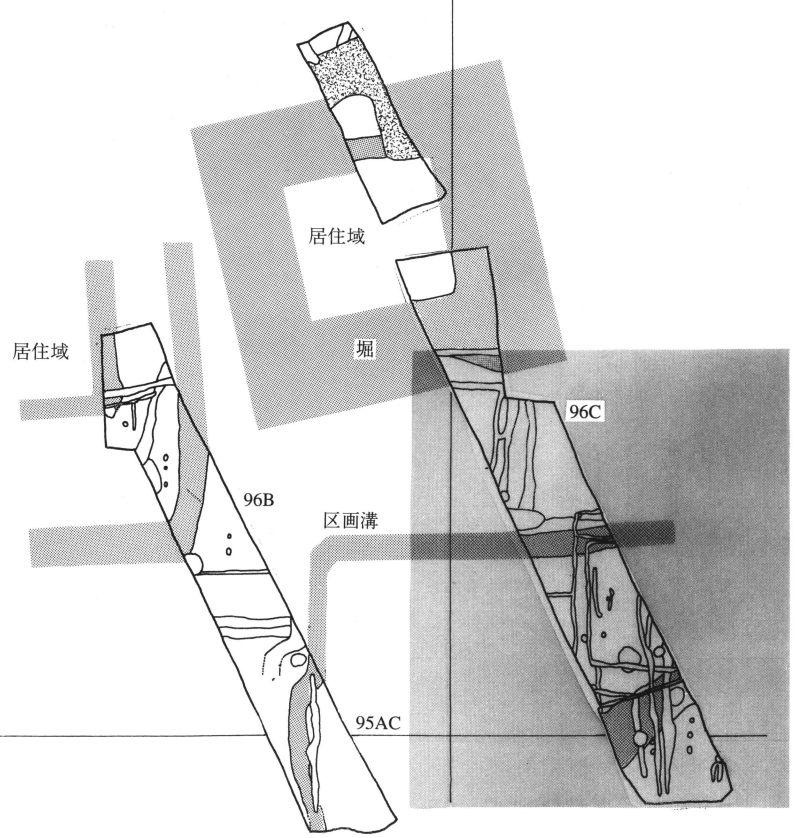


96C区　ＳＤ04卒塔婆出土状況

X=-78000



96B区　ＳＤ06



Ⅰ期の溝（区画溝）

Ⅰ期の溝

Ⅱ期の居住域

X=-78100

第３図　毛受遺跡主要遺構配置図（１：1000）

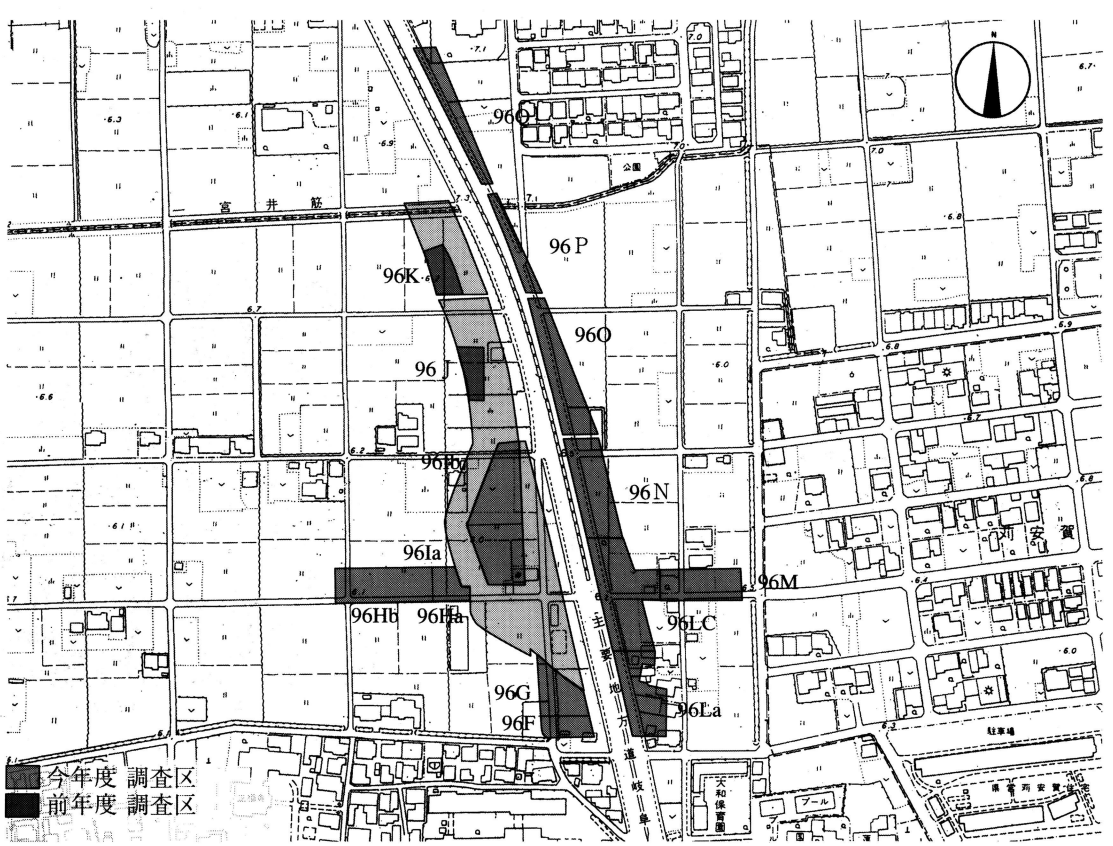
八王子（はちおうじ）遺跡

調査の経過　八王子遺跡は、一宮市大和町苅安賀に所在し、木曽川水系日光川流域に展開する標高5～6mほどの自然堤防および微高地上に立地している。現在遺跡周辺はほとんど水田化されており往時の様子をみることはできないが、近世以降には島畠が点在し、それ以前は比較的起伏のある地形であったと推定される。

発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として昨年度に引き続いて実施されたもので、調査面積は14,759㎡である。

調査の概要　本年度は調査対象地区が尾張中央道の東西に分散したこと、さらに用地買収や建設工事の進捗状況との調整のために小刻みな調査工程となり、A区からQ区までの17調査区がさらに細分されるという事態が生じ、そのために調査進行上若干の支障をきたすことになった。

調査は昨年度の成果を踏まえて進めたが、いくつか新しい成果も得られた。たとえば、弥生前期の環濠の外と考えられていた96O区では弥生前期の遺構群が密集して検出され、昨年度検出された環濠がじつは西限を画すものである可能性が高くなった。また96I区では古代と中世という時期の異なる2条の溝が相対するように円弧をなして掘削されて一見円形の区画を形作るような部分が検出された。とりわけ、96O区で「蛇塚」の周溝と推定される溝や美濃帯チャート製の直方体を呈する大形の角礫が検出され円墳の存在が確実となったことから、それもかつて存在した古墳後期に展開した群集墳の痕跡を示している可能性が高くなった。今後は報告書に向けて資料の詳細な検討が必要になろう。

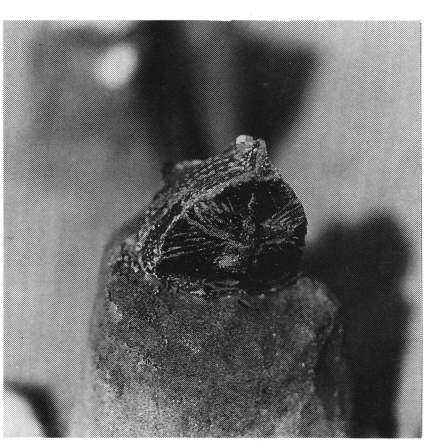


第1図　八王子遺跡調査区位置図（1：5000）

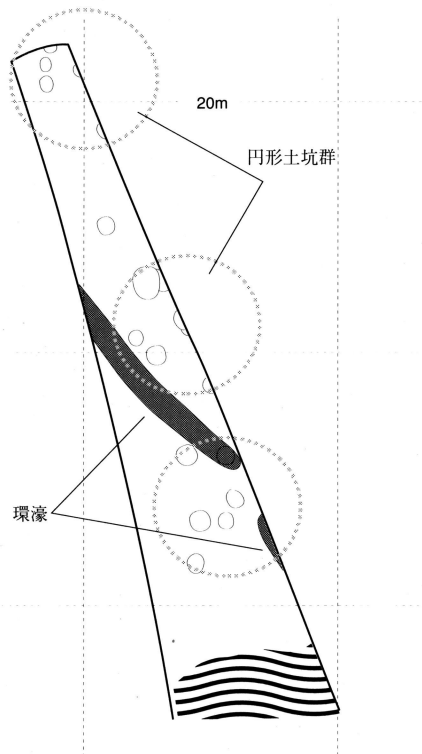
時期区分　八王子遺跡は昨年度の調査によって弥生時代前期から鎌倉・室町時代までほぼ途切れることなく営まれた遺跡であることが明らかとなった。ただし、遺跡の性格の変化や自然環境等の外的要因による居住区の変遷など、時期によっていくつかの画期が設定される。ここでは、昨年度の調査成果を踏まえてA期：弥生前期～中期、B期：弥生後期～古墳前期、C期：古墳中期～後期、D期：奈良・平安時代、E期：鎌倉・室町時代に分け、昨年度の年報には調査工程上、掲載が間に合わなかった部分を含めて記述を進めて行くことにする。

各期の解説　**A期**　弥生前期は95Ｂａ区の調査で、95Ａｂ区で確認した環濠のさらに西側でもう１条の環濠を検出し、これら２条の環濠の途切れる部分を確認した。西側の環濠では南から延びる溝がこの部分でさらに二又に分かれているなど複雑な様相を呈している。本年度は95Ｂａ区の西にあたる96Ｊ区で西側の環濠がさらに北へのびることを確認した。また、96Ｏ区でも幅約２ｍ、深さ約0.7ｍの北西から南東にのびる溝を検出しており、主としてこの溝より東側に弥生前期の遺構が集中している。そのため、昨年度の調査で想定したように95Ａｂ区から95Ｂａ区の西側に弥生前期の居住域が展開し、これを拡張して弥生中期の環濠を築いたとするより、96Ｏ区の溝を弥生前期の内環濠として居住域はこれより東に展開しており、95Ｂａ区および96Ｊ区の環濠は外環濠にあたると考えたほうが自然ではないかとする結論に至った。そして、95Ａｂ区から95Ｂａ区にかけての環濠は上層から大量に出土した弥生中期中葉の土器をもって、弥生中期にまで下げるべきであるとの認識をもつこととなった。なお、今回新たに確認した内環濠にも溝が途切れる部分があり、その切れ目の位置には土器棺墓や埋設土器などが見つかっている。また、内環濠からは土偶の頭部が出土している。昨年度の調査でも、95Ｂａ区の弥生前期の環濠（今年度の調査で外環濠と認識した溝）から土偶の頭部が出土しており、これで本遺跡では２例目になる。この時期、95Ｂａ・95Ｃ・96Ｉｂ・96Ｏ区の南半部から苅安賀遺跡にかけての調査区では北東から南西に流れる幅数百ｍにおよぶ河道を確認しており、この北岸が弥生前期から中期中葉にかけての集落の南限と考えられる。

弥生中期前半～中葉には弥生前期の居住域の西側に新たに居住域が設けられている。前述のように昨年度弥生前期の外環濠と考えていた溝がこの時期に下がることが判明したことにより95Ａａ区で２条の環濠と合わせて３条の環濠が集落を巡ることが明らかとなった。95Ａａ区で見つかった２条は本年度は西接する96Ｋ区のほぼ中央を南東から北西に横切っており、西尾張中央道を隔てた東の96Ｏ区では外環濠の続きを確認した。規模はいずれも幅約５ｍ、深さは約1.5ｍで、断面はＶ字形である。95Ｂａ区と96Ｊ区はこの時期の居住域にあたる。



96Ｏ区　環濠出土土偶頭部片

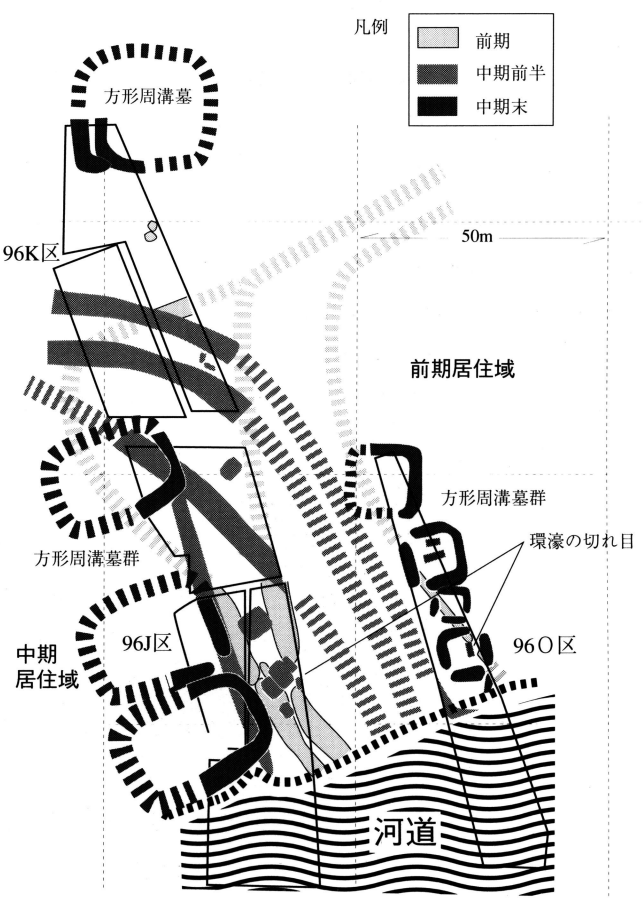


第２図　96Ｏ区　弥生前期の遺構群
（１：600）

に較べてマウンドの遺存状況が極めて良好である。埋葬施設は北から２番目の墳丘墓で２基、最も南の墳丘墓で１基検出した。埋葬施設は長軸が北の墳丘墓で東西方向、南の墳丘墓は南北方向で、組み合わせ式木棺の痕跡が比較的明瞭に認められたが、副葬品は無かった。西尾張中央道の西に展開する４基の墳丘墓がいずれも一辺１０ｍを超える大型のものと想定され、しかも散発的に配置されているのに対し、９６Ｏ区の墳丘墓は１基を除くといずれも規模が小型で比較的密集して築かれている。しかも、９６Ｏ区の４基の墳丘墓は周溝の幅が狭く、遺物の出土量は西尾張中央道西側の一群に較べて各段に少ないなど、東西で格差が認められる。

９５Ｂａ区では弥生中期中葉の竪穴住居を６棟検出した。うち、調査区北端近くで検出した竪穴住居は多くの土器とともに炭化した建築材が比較的良好に残る焼失家屋である。

弥生中期末には環濠が埋め立てられ、それまでの居住域墓域に変わる。この時期の遺構としては、９５Ｂａ区で墳丘墓の東・南側の周溝を検出し、本年度は９６Ｊ区で東溝の続きと北溝、そしてその間の陸橋部を確認した。その結果、この墳丘墓は短辺が約１３ｍ、長辺は西溝が調査区外であるために未確定だが２０ｍ以上の規模になることはほぼ間違いなく、この時期としては全国的にも有数のきわめて大型の墳丘墓といえる。この墳丘墓に北接してもう一基、墳丘墓を確認している。また、西尾張中央道をはさんだ東側の９６Ｏ区では４基の墳丘墓を検出した。うち、北側の２基は検出面で一辺が約１０ｍの長方形で、その南に接する２基は一辺が５ｍ前後である。いずれも西尾張中央道西側の墳丘墓



第３図　弥生時代遺構配置図（１：1500）

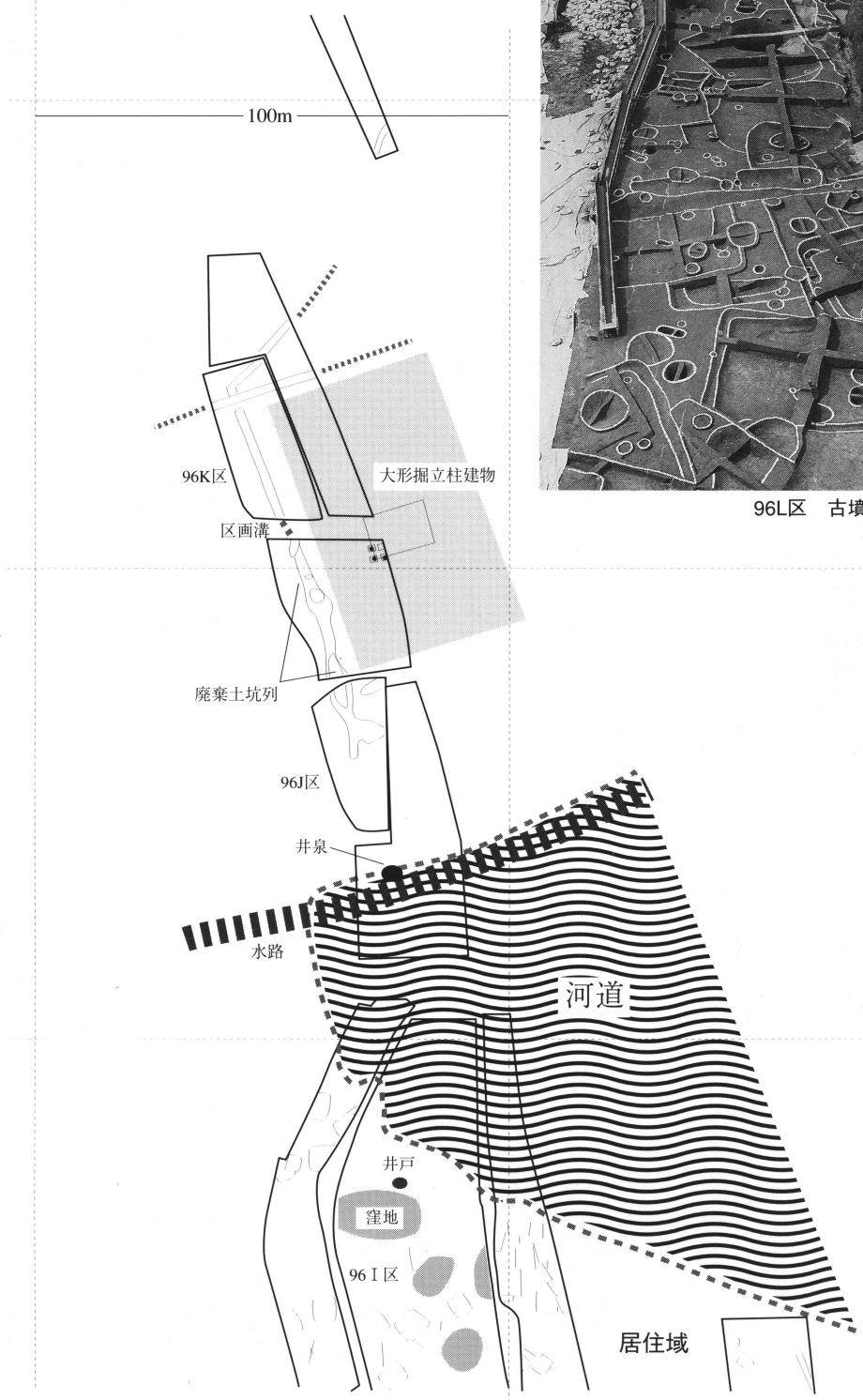
この時期の居住域は現在のところ不明だが、地形的に西の方が高く、９６Ｊ区の墳丘墓の溝からは多量の土器片とともに厚い炭化物層を確認していることから、調査区のさらに西に展開している可能性が高い。

Ｂ期　尾張平野では弥生中期終末から後期前半にかけて河川の活動が活発化する。八王子遺跡でも、山中期には河道の堆積が進んで微高地化し、そこに新たに居住域が営まれるようになる。逆に中期中葉までの居住域や中期末の墓域周辺は湿地化して放棄されたようである。後期の居住域は95Ｄ・Ｅ区を中心とし、北は96Ｉａ区の南端、東は96Ｌｃ区の南半部、西は96Ｈａ区の北半部を範囲とする東西に長い島状の微高地に形成されている。96Ｉａ・Ｉｂ区の大半と96Ｇ区全域、96Ｈａ区の東端部、96Ｌｃ区の南端部ではそれぞれこの時期の自然流路が確認されている。居住域の周囲には環濠はもたないが、95Ｄ区では居住域内を区画する溝が検出されている。

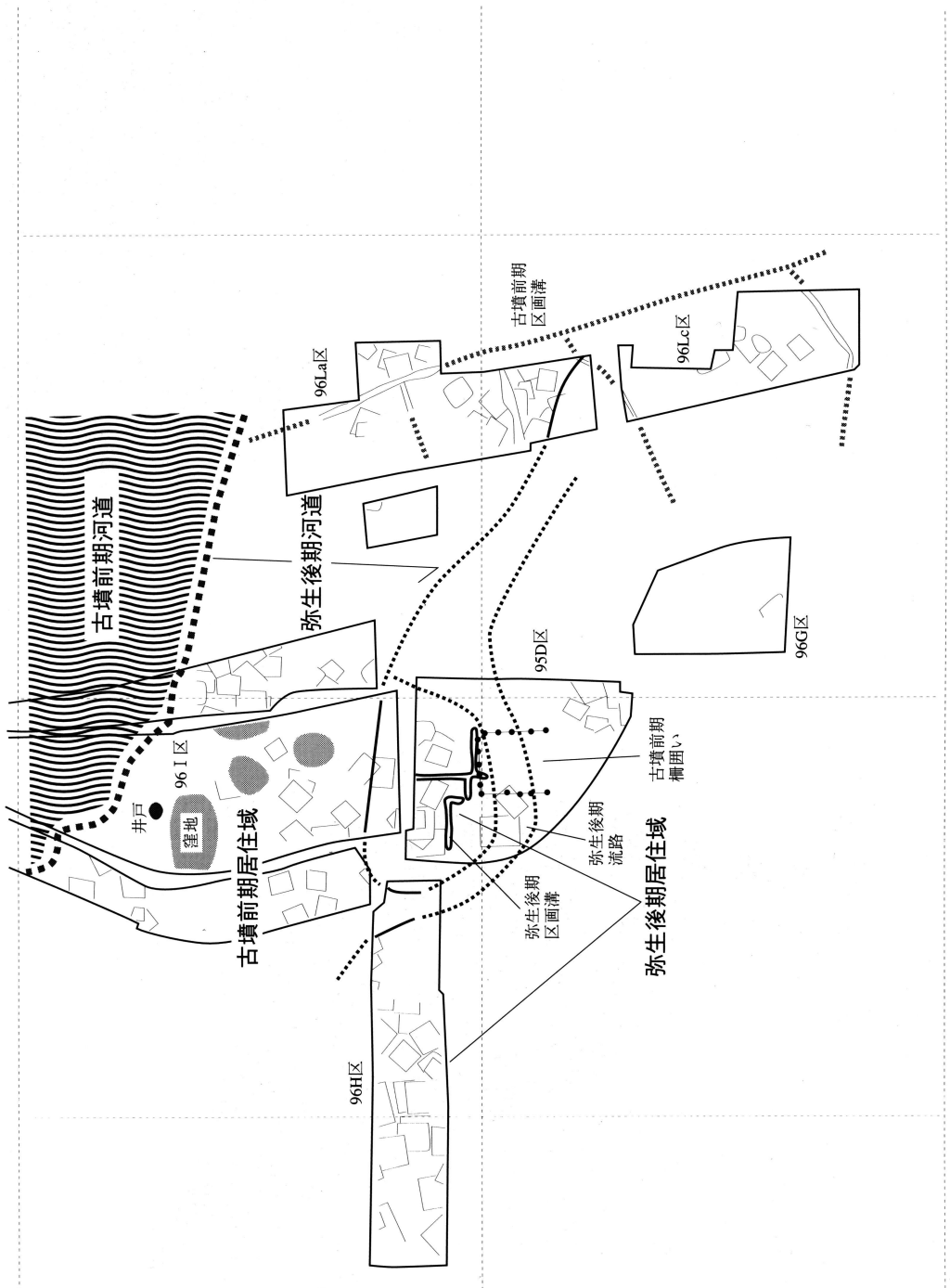
古墳前期初頭（廻間Ｉ期）には居住域がさらに拡大する。95Ｂｂ～Ｅ区および96Ｉａ・Ｉｂ区に新たに居住域が展開し、検出した竪穴住居は７０棟を超える。河道本体は東へ後退し、かろうじて右岸が「く」の字状に東から西へ張り出している。新たに掘削された水路を挟んだ北の地区（弥生中期までの居住域の上層）には、大型掘立柱建物や井泉などの祭祀的な空間が設けられている。大型掘立柱建物は95Ａｂ区の北東隅に位置し、一辺が１ｍを超える柱掘形を４箇所検出しているが、北・東とも調査区外に広がっているため、東西・南北とも規模は不明である。この建物は昨年度の調査では柱掘形の規模などから古代に属する可能性を想定したが、今年度の調査でこの建物を囲むように北と西でそれぞれ弥生後期後半から古墳前期初頭に属する溝を検出したために、掘立柱建物も同時期であると考えた。北辺の溝は95Ａａ区と96Ｋ区において、建物の南辺の柱列から北へ約45ｍの位置に東北東から西南西の方向に伸びているのを確認している。西辺の溝は先の溝にほぼ直交して、95Ａｂ区とその両隣にあたる96Ｊ・Ｋ区で建物の西辺柱列から西へ約14ｍの位置を、北北西から南南東の方向に約８０ｍにわたって検出した。南端は96Ｊ区のほぼ中央で「ト」の字状に東へ若干突出する形で終わっている。95Ｂａ区では南辺の溝を検出していないため、建物を中心とする区画の南側は河道に面してオープンであった可能性が高い。これらの溝からは山中式後期後半から廻間Ｉ式期初頭の土器が多数出土している。調査区の東側を西尾張中央道が南北に分断しているため、大型掘立柱建物を中心とする区画の東西幅は確認できない。この西辺の溝を南に延長した95Ｂａ区の河道の北肩に大規模な木組みをともなう井戸を１基検出した。直径約５ｍのすり鉢状の掘形を掘削し、中央に直径約１ｍの水溜めを掘っている。掘形の内側には河道側に面して馬蹄形に乱杭を打ち込み、その杭にかかるように加工を施した巨大な丸太材や板材・槽の破片などを横材として用いた木組みで囲っている。この井泉の内側および河道内に掘削された幅8m、深さ2mの水路からは銅鏃・ガラス小玉各５点、コハク玉・ヒスイ勾玉各１点、剣形・刀形木器などの祭祀にかかわる遺物のほか、廻間Ｉ期初頭に属する大量の土器群が出土した。土器は小型精製の壺・鉢・高杯・器台や手づくねによるミニチュア土器がほとんどで、わずかにみられる甕類も大半が使用の痕跡をとどめていないのが特徴である。このほか水路内からは使用痕の



96L区　古墳前期居住域



第4図　弥生時代後期～古墳時代遺構配置図（1：1500）



第５図　弥生時代後期～古墳時代遺構配置図（１：1500）

ある木製農耕具類も若干出土している。この水路の続きは96Q区でも検出しており、95Ba区同様、多くの土器・木器が出土した。居住域は廻間Ⅲ期頃になると、95D区のほぼ中央に北・東・西の三方に柵列をめぐらす一辺約12mの方形広場が設けられ、その周りを囲むように95D・E区で11棟の掘立柱建物を配置している。掘立柱建物の規模は3×2間の総柱建物1棟、3×2間の建物1棟、独立棟持ち柱のある1×1間の建物2棟、1×1間の建物7棟である。

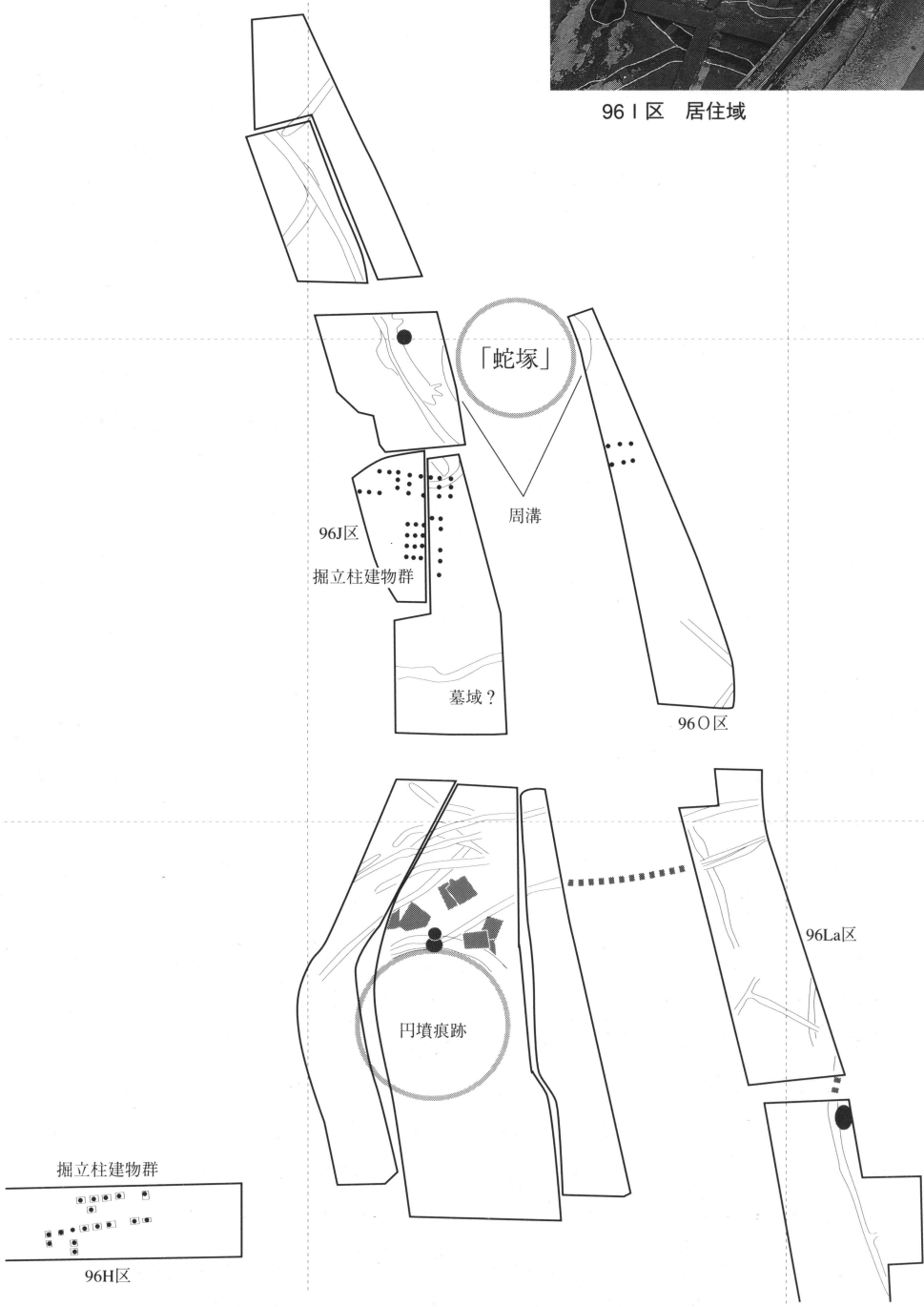
古墳前期末（松河戸期）には木曽川流域を中心とする大規模な洪水により、浅谷は完全に埋没する。この時期、95Bb・C・D・E区では明確な遺構が確認されておらず、居住域の中心はさらに東へ移動したと考えられる。96Lc区では幅約1.5m、深さ約0.5mの溝が北北西から南南東にかけて貫いている。この溝に直交して南北20m前後の幅になるように東西の溝を掘削して方形の区画をつくり、そのなかに竪穴住居を2、3棟配置する形をとっている。

C期　古墳後期の遺構としては95Ab・96O区と96Ia・Ib区でそれぞれ円墳の周溝およびその痕跡を検出した。95Ab・96O区の円墳は周溝の外側で直径約30mをはかる。墳丘部分はすべて西尾張中央道の下にあたるため、墳丘そのものの直径は不明だが20m前後と考えられる。地元では「蛇塚」と呼ばれていた塚がほぼこの位置にあったことが明治14年の地籍図にも記録されている。96O区ではこの古墳の周溝に近接する戦国期の大溝から面取りを施した巨石（美濃産のチャート）が出土していることから、蛇塚古墳の内部主体は横穴式石室であった可能性が高い。96Ia・Ib区の円墳は墳丘が完全に削平されており、周溝は北側が古代、南側が中世に再掘削されたようだ。墳丘基底部の直径は約20mである。

D期　古代の遺構はまず96J区において、95Ba区で検出した掘立柱建物の続きを確認し、3×2間の東西棟建物であることが確定した。その西に南辺の柱筋をほぼ揃えて3間以上×3間の東西棟建物、そして3×2間の建物の南に西側の柱筋をほぼ揃えてやはり3×2間の南北棟建物を検出した。南北棟建物には床束とみられる小柱穴が伴っている。いずれも桁行の柱間が2.1m（7間）から2.4m（8間）ある比較的大型の建物だが、庇はない。95Ba区では建物の東側に小型の柱列が2条並ぶことから、東辺は塀で区画されており、西の方へはさらに続くものと思われる。これら掘立柱建物群の南にあたる95Ba区の旧浅谷内には奈良時代後半の墨書土器・円面硯を含む多量の土器が出土した東西溝があることから、この一画は通常の集落とはやや性格を異にしている可能性が高い。また、96Hb区でも5×1間の東西棟建物と3間以上×2間の南北棟建物の2棟の掘立柱建物が柱筋を揃えてL字形に建い、東西棟建物の東西に2基の井戸を確認している。そのほか、96O区では前記の区画とは方位が異なる3×1間の東西棟掘立柱建物と2条の区画溝があり、96N区から96Lc区にかけて、北北西から南南東に伸びる溝を検出した。この溝の上層は中世に再掘削されているが、下層からは奈良時代後半から平安時代前期の遺物が多く出土している。特に96N区では9世紀後半に属する鳥形硯の破片が出土した。猿投窯の製品で、県内では尾張国府跡で類例がみられる。



96Ⅰ区　居住域

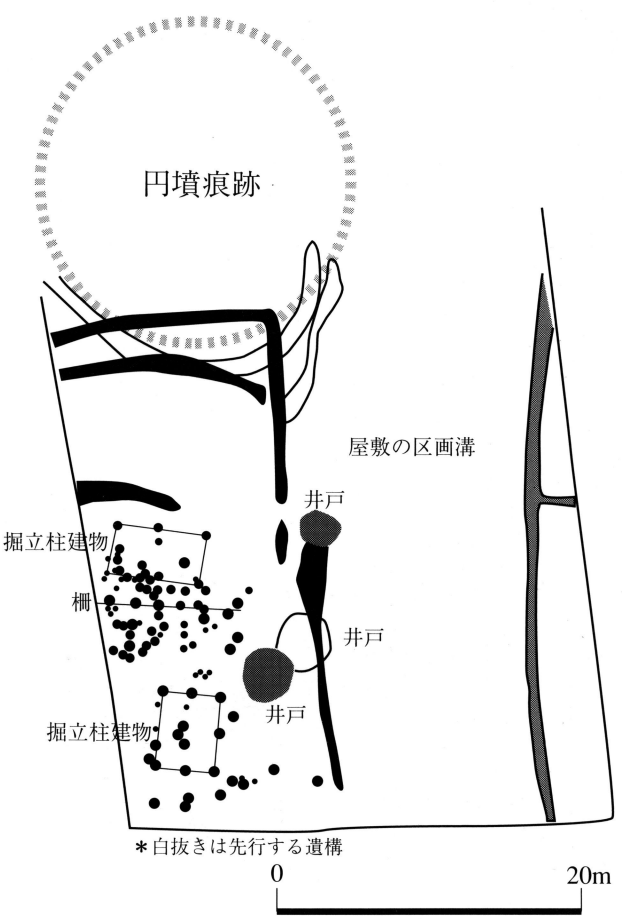


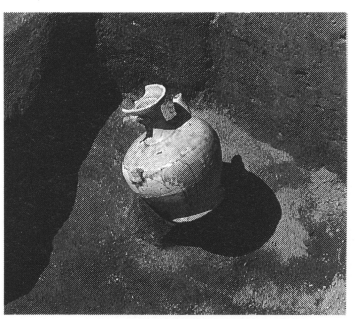
第6図　古代遺構配置図（1：1500）

E期　中世には調査区のほぼ全域で東西南北に走る溝が検出されている。多数の井戸・土坑・柱穴がこれに伴っていることから、屋敷地の区画溝と考えられる。時期は13世紀から15世紀頃におよび、一辺が40～60m程度の方形区画が6区画以上、ほぼ規則的に並んでいる。その中央にあたる96N区北半部から96O区南半部には、一辺約70mを測る大型の方形区画がある。内部にはさらに一辺約40mの方形に巡らせた溝と2基の集石墓、方形土壙群、大型の井戸が位置しており、他の屋敷地とは異なる特殊な区画である。ただし、旧浅谷内は以前として居住には適さない低湿地であったためか、墓域として利用されている。

戦国期の遺構は主として96La区から南の苅安賀遺跡にかけて、および96Q区から北の毛受遺跡にかけて展開しており、八王子遺跡に限っては希薄になる。

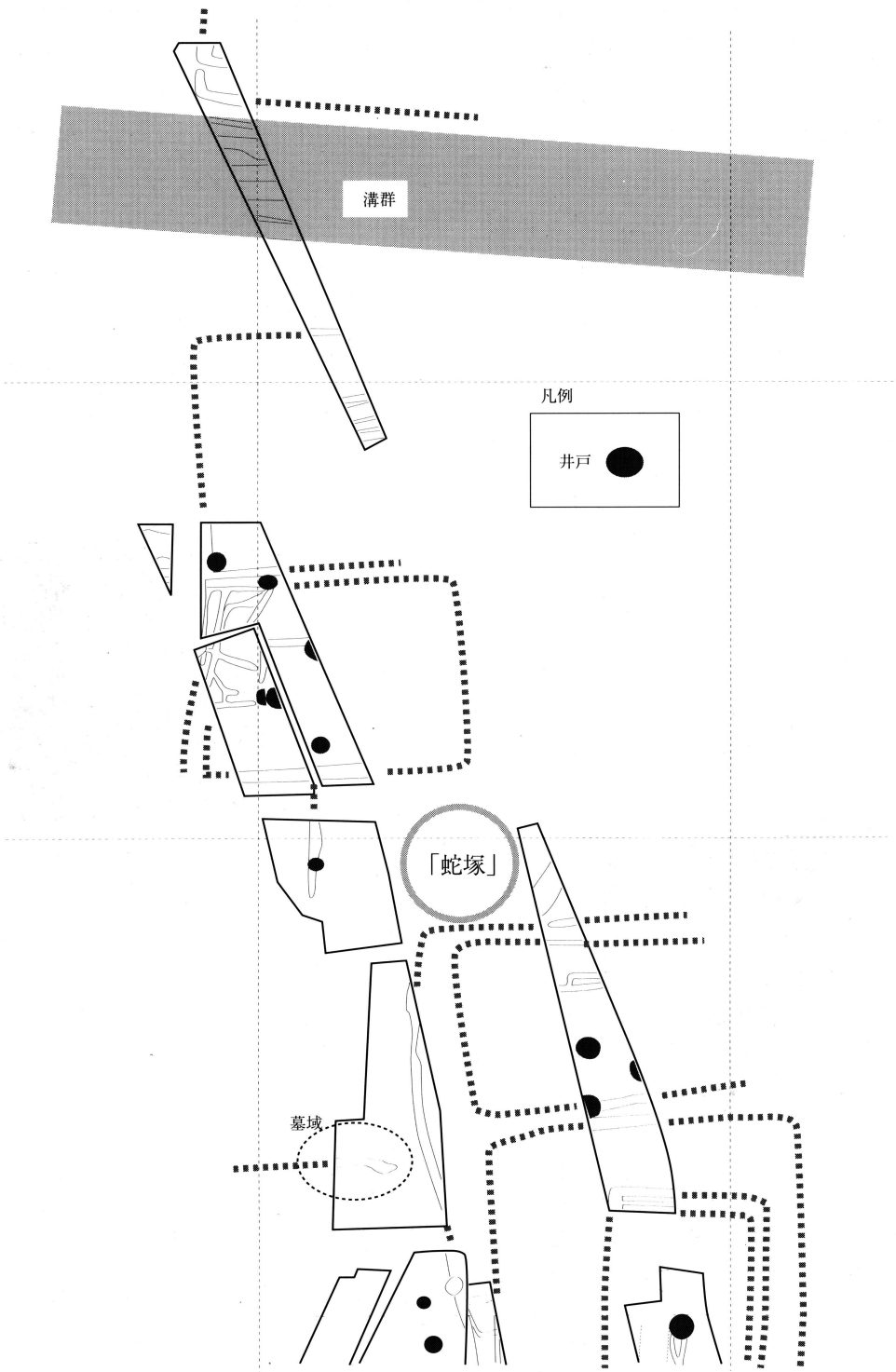
近世の八王子一体は、島畑が点在する水田地帯であったことが明治14年の地籍図からも明らかである。　（樋上　昇）



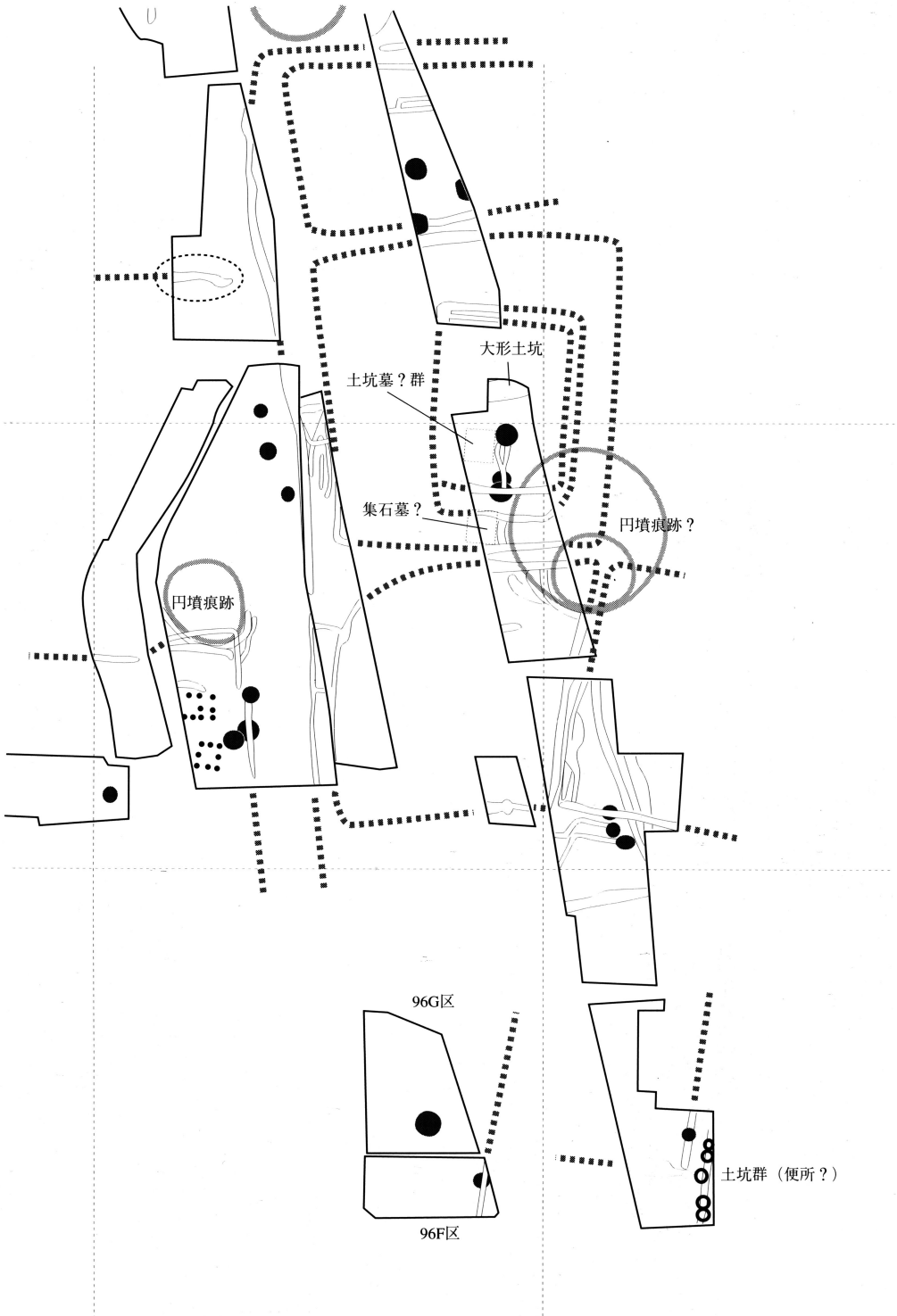


96I区出土 水注

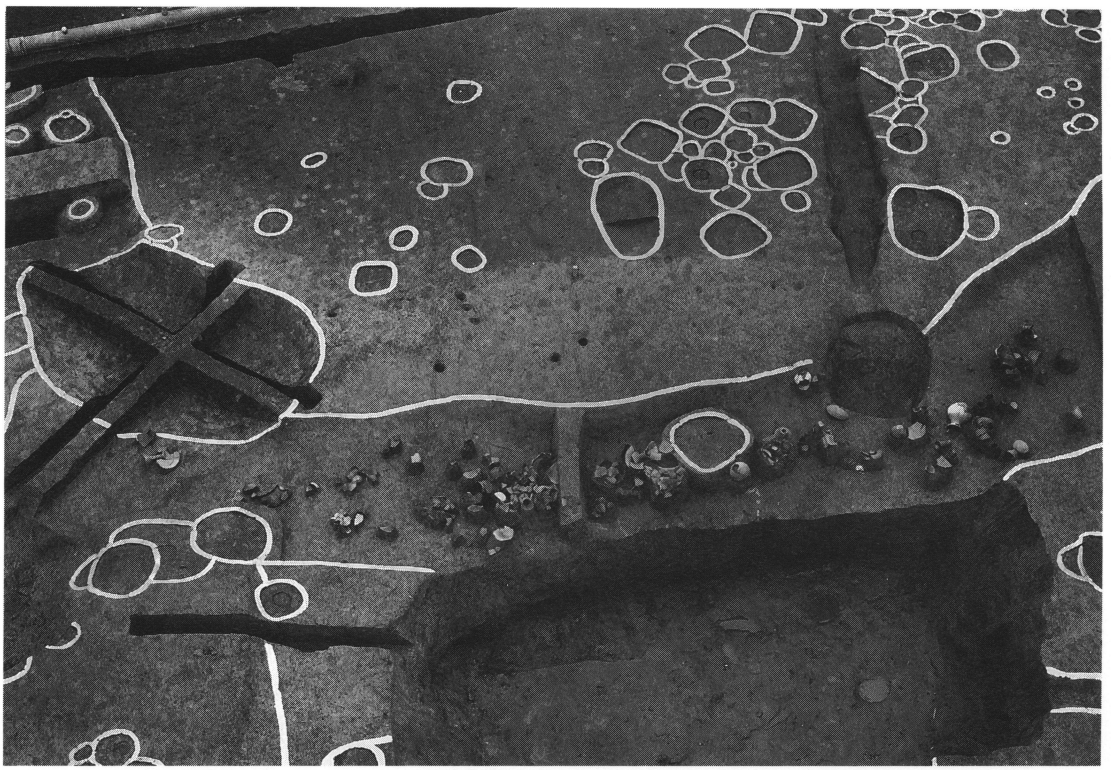
第7図　96I区中世屋敷地（1：500）



第8図　中世遺構配置図（1：1500）



第９図　中世遺構配置図（１：1500）



96J区　古墳前期区画溝



96Ⅰ区　中世屋敷地

苅安賀（かりやすが）遺跡

調査の経過　苅安賀遺跡は一宮市大和町苅安賀に所在し、北には八王子遺跡がある。遺跡周辺は八王子遺跡とは異なり民家が密集する集落地域となっている。

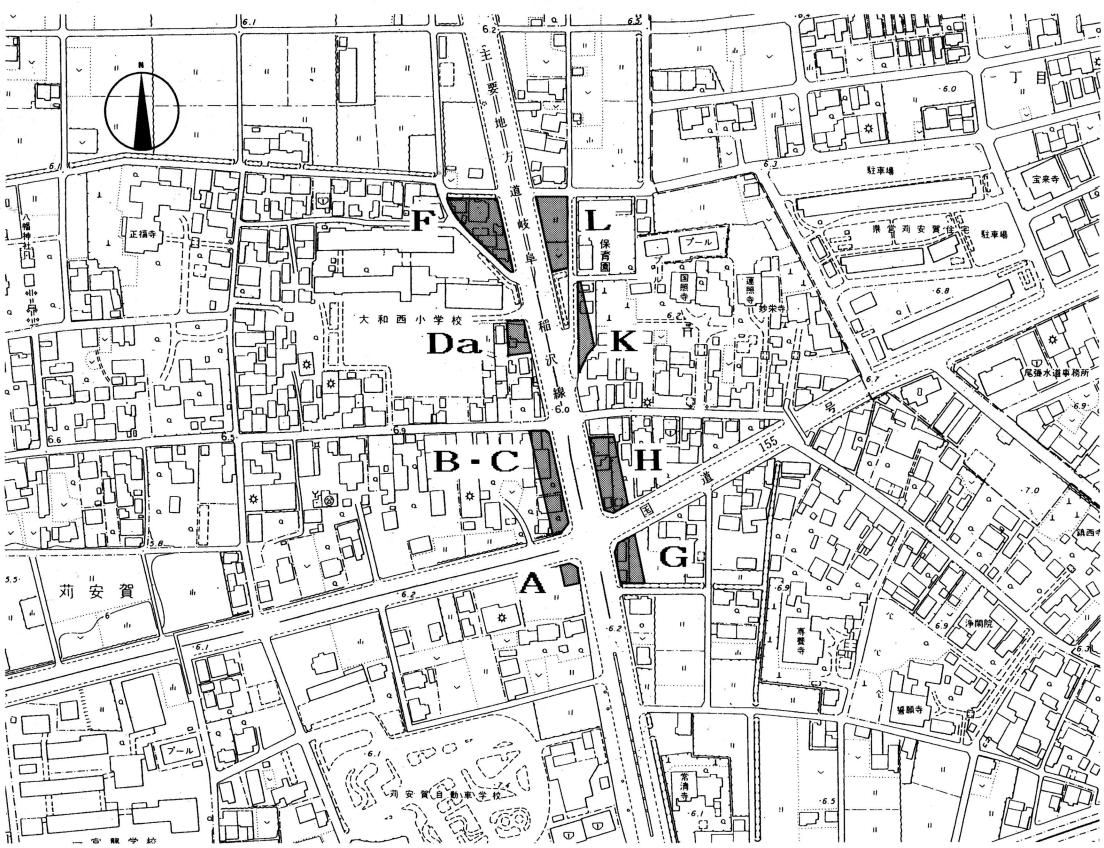
発掘調査は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として実施されたものであり、調査面積は4,989㎡である。

調査の概要　調査は尾張中央道に沿って南北に並ぶＡ区からＬ区までの９調査区について実施した。

検出された遺構・遺物は、大きくＡ期：弥生時代、Ｂ期：古墳時代、Ｃ期：中世（戦国）、Ｄ期：近世から近代、の４期に区分でき、このうち中心をなすのがＤ期である。Ｃ期については、苅安賀城本丸推定地が南西に存在することから城館関連遺構・遺物の出土が期待されたが、遺構に関しては明確ではない。

Ａ期　96Ｂ・Ｃ区で検出された大溝の下部から弥生中期細頚壺が出土し、周辺からもほぼ完全に近い甕が出土した。他に同時期の遺構は認められなかったが、Ｂ・Ｃ区では基盤砂層の上昇が確認でき、比較的古くに形成された自然堤防であることが推定された。八王子遺跡の弥生集落南縁を画す河岸の対岸である可能性がある。

Ｂ期　八王子遺跡と接する96Ｆ区で井戸状遺構を、同じく96Ｌ区で井戸状遺構と区画溝を検出した。削平が著しいのか建物などは未検出である。



第１図　苅安賀遺跡調査区位置図（１：5000）

C期　確実にC期に属す遺構は96C区・96D区・96G区・96H区南部、で検出した。このうち96 G区では旧河道から土師皿（灯明皿）・塔婆・漆椀がまとまって出土したほか、隣接する近世の溝からは花崗岩製の五輪塔の空輪が出土した。また、国道155号を挟んで北に位置する96H区では幅1mほどの陸橋部をもって東西に走る溝（塀の基礎：布掘り）が検出され、溝上部から炭化物や灯明皿などが出土した。これらは特定の空間に伴うものであった可能性が高い。

96D区では東西に走る幅5～7mほどの大溝を検出した。最近まで水路として利用されていたもので、幾度となく改修が加えられている。地元では「外堀」と呼ばれていたとのことであり、苅安賀城関連の可能性もある。

D期　遺物・遺構ともにもっとも充実している。96C区・96H区の北を東西に旧街道が通っていることから、宿場町の展開に関係するのであろう。96C区では建物は明確に把握できなかったが、井戸の集中する地点が認められた。井戸は桶組みが通例であり、ほとんどが砂の噴き出しによって廃棄されていた。地震によるのであろうか。

以上の成果はいずれも断片的であり面的に考えるための手掛かりは極めて少ないが、八王子遺跡、苅安賀城、苅安賀宿などとの関連を明らかにしなければならないと考えている。

（石黒立人・大崎正敬）



96B・C区　南半部



96D a区大溝



96F区　全景



96L区　全景

志賀公園（しがこうえん）遺跡

調査の経緯　発掘調査は住宅建設に伴う事前調査で、住宅・都市整備公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として本年度から実施している。本年度の調査は試掘調査を含めて5,000㎡行っている。

隣接する遺跡としては、南側に志賀公園遺跡と志賀城跡（いずれも志賀公園内）そして南西側に西志賀遺跡がある。志賀公園遺跡は今回の調査までに志賀公園造成時（昭和５年愛知県）と名古屋市教育委員会により３回行われている。今回の調査は本調査を住宅建設部分の４ヶ所をＡ～Ｄ区とし、試掘調査は来年度調査予定地を中心に行った。なお標高は現況で５ｍ前後を測る。

調査の概要　遺跡は工場跡地のため、構造物の基礎で破壊を受けている箇所もいくつか認められるが概ね良好な状態で確認できた。遺構は大きく古墳時代、古代、中世～戦国、近世に分けられる。以下、Ａ区とＤ区を中心に記す。

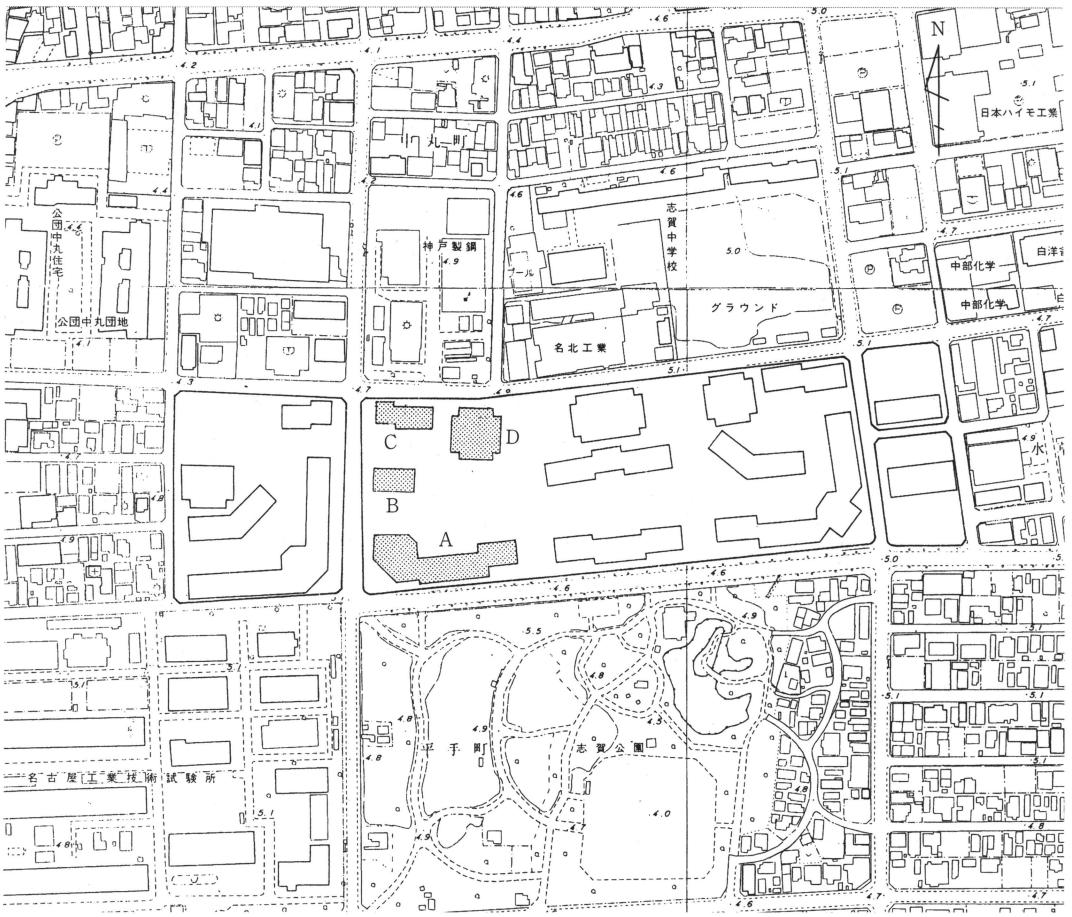
Ａ　区　工場造成時および近現代の水田土を取り除いた時点で調査区を東西方向に縦断する２条の溝が確認された。これら２条の溝は『明治17年地籍図』にもみられる村境と一致する。北側が光音寺村、南側が西志賀村となる。２条の溝は切り合い関係があり同時期ではないものの、少量ながら出土した遺物から近世と考えられる。

これら境溝を含め近世の耕作土を取り払うと南に隣接する志賀城跡に関連する遺構群が確認できる。その範囲は調査区を東西に縦断する大溝（ＳＤ06）を北限とし、志賀城側（南）に認められる。この大溝は幅約10m深さ約１ｍで、志賀城とその周りを取り囲む居住域などの北端に相当すると考えられる。遺物は15世紀～16世紀にかけての陶器・土師器を中心に、大溝掘削以前の13世紀前後の灰釉系陶器・土師器、７世紀前後の須恵器・土師器が溝の基底部付近に集中して確認された。

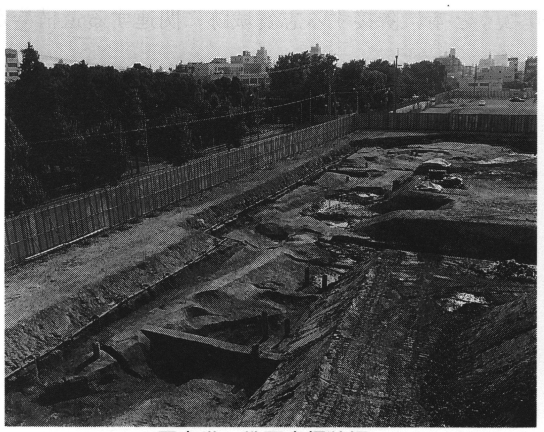
大溝以外の遺構としては、溝３条、井戸２基を確認した。大溝と規模の近いＳＤ09は大溝に接して南側に続く。このＳＤ09の東側には東西方向を基本とし、クランク状に連続するＳＤ07・08がある。さらにＳＤ08の南接して導水路をもつ井戸（ＳＫ02・06）を確認した。ＳＫ02はタガが遺存することから井筒部分に桶が使用されていたと考えられる。いずれも15～16世紀にかけての陶器・土師器を中心とする遺物が出土しており、大溝とほぼ同時期の遺構群といえる。

Ｄ　区　Ｄ区では古墳時代から中世まで、都合４面にわたり遺構を確認した。

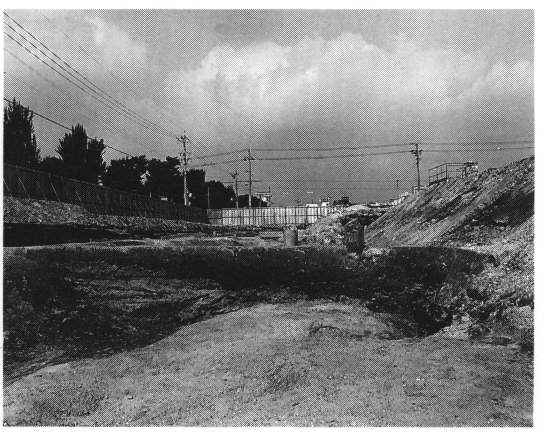
第１面は古代と中世が同一面となったのは近世以降の水田（蓮田？）により削平されていたためで、井戸など比較的深度のある遺構のみが残存している。中世については、遺構・遺物ともに量的には少なく、井戸２基と堀立柱建物を確認したのみ。遺物は14世紀前後のものが出土した。古代については、遺構として確認できたのは土坑１基のみ。その他は完形品に近い遺物が所々集中する程度でほとんどが削平され遺構として確認できない。遺物は８世紀代が中心となる。



第１図　調査区位置図（１：5000）



Ａ区中世・戦国完掘状況



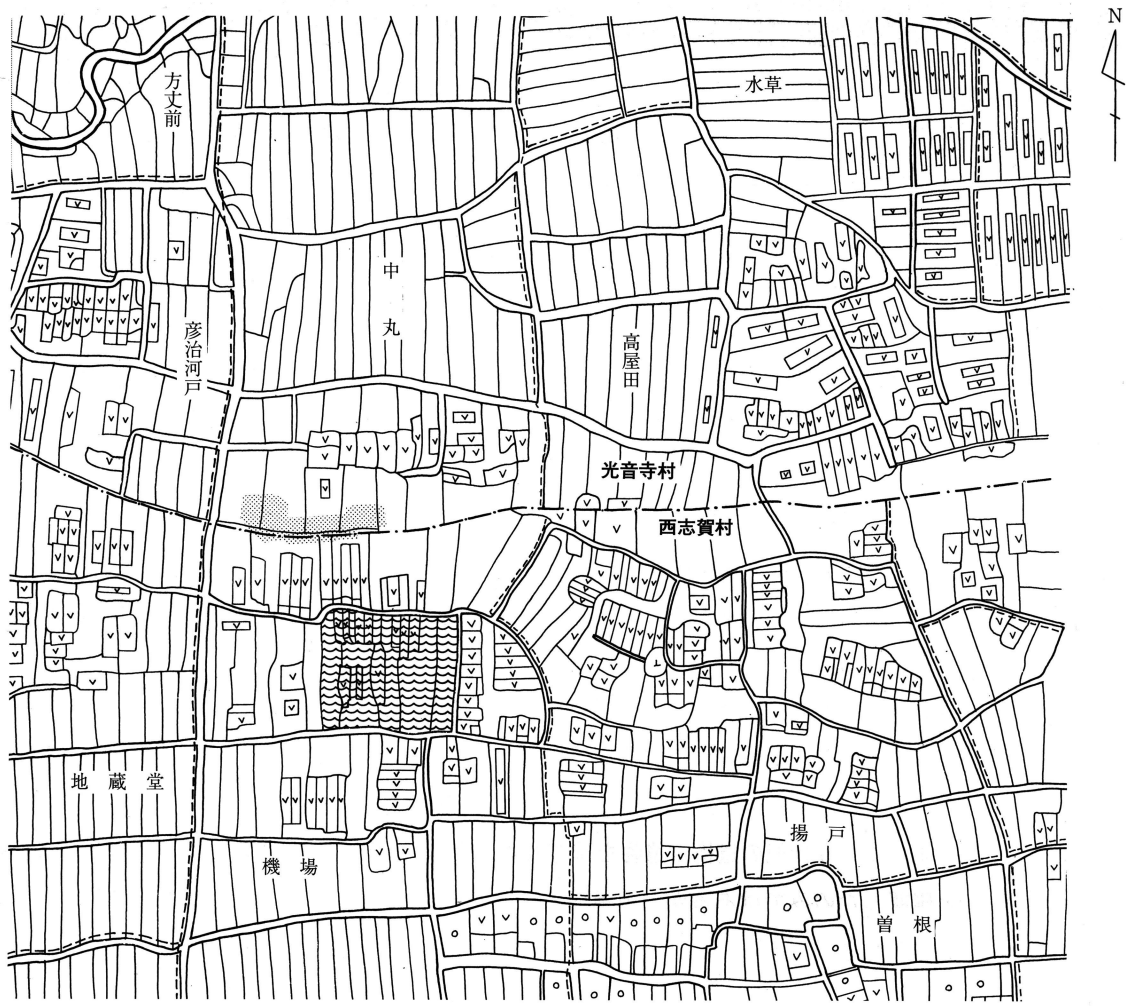
Ａ区ＳＤ06セクション



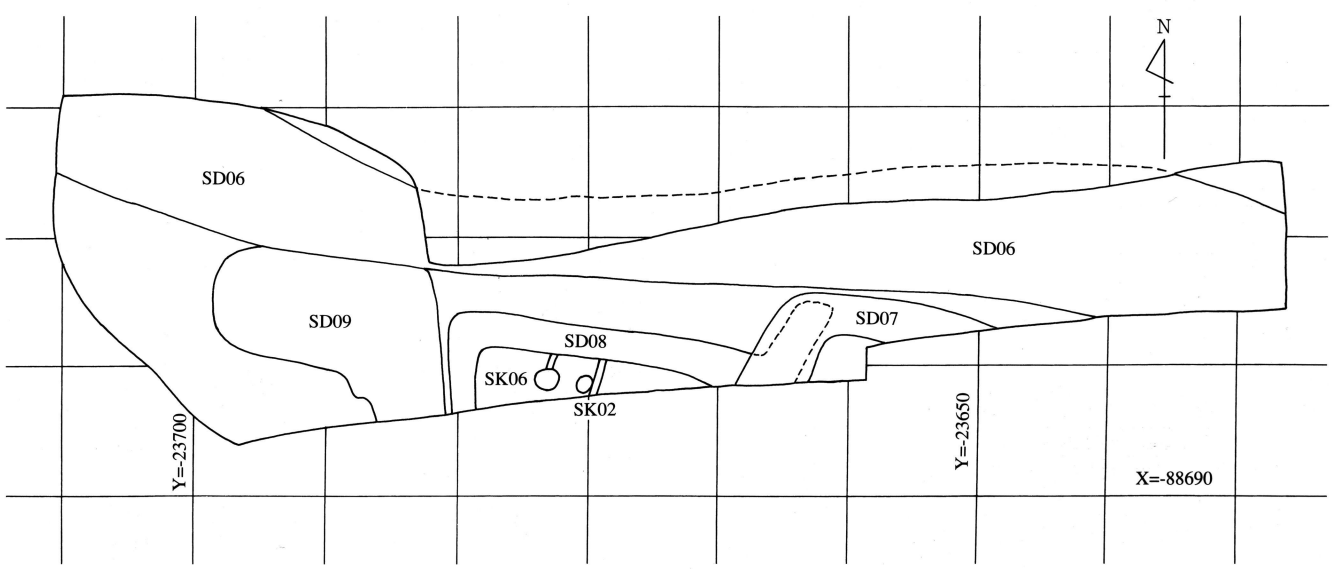
Ｄ区古代上層遺構完掘状況



Ｄ区旧流路完掘状況



第２図　光音寺村・西志賀村地籍図（１：5000）
点トーンはＡ区を、波トーンは天保年間に作製された村絵図に「字城土井」として描かれた範囲を示す。



第３図　Ａ区中世・戦国期遺構図（１：600）

第２・３面は７世紀代の遺構が１０㎝前後の堆積で分かれる。第２面では遺構の配置から２時期が想定できる。竪穴住居群とこれらの南側を弧状にめぐる溝、調査区の北側をＬ字にめぐる溝とこれに規制された堀立柱建物や土坑群。第３面では第２面のＬ字溝とほぼ重複しながらめぐる溝群と堀立柱建物などを検出した。遺物の詳細な検討は今後となるが、おおよそ第２面が７世紀後半、第３面が７世紀前半となる。

第４面は調査区の南側から北東に向かって蛇行する古墳時代の旧流路を検出した。流路の堆積は基本的に砂層、上位の粗粒砂層に遺物が比較的まとまっていた。遺物の時期は松河戸様式を中心に廻間様式から宇田様式までのものを含む。また、調査区北東、旧流路左岸に焼土と完形品の遺物が集中する地点を確認した。遺物は松河戸様式に相当し、「水辺の祭祀」を想起させる。

まとめ

今回の調査で以下の成果が明らかになった。

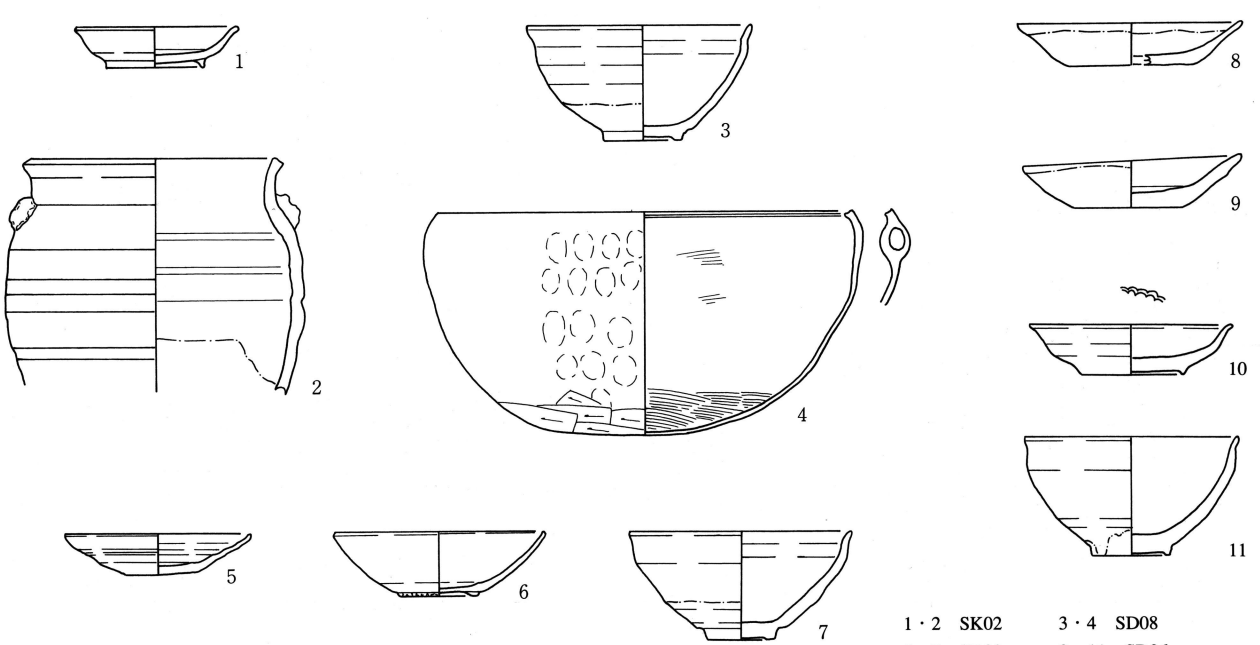
（１）Ａ区で近世の村境に関する溝を確認した。

（２）志賀城に関わる遺構・遺物を確認した。特にＡ区を東西に縦断する大溝は志賀城関連遺構の北端となる。

（３）７～８世紀の遺構・遺物を確認した。遺物に須恵器大甕の出土頻度が高いことや瓦も認められることから今後の調査により、官衙・寺院あるいは矢田川と庄内川の合流点に近いことから津港など集落遺跡とは異なる遺構群が期待できる。

（４）４～５世紀の遺構・遺物を確認した。今回はＤ区より旧流路とその岸辺の土器集積を確認したのみではあるが、遺構面として安定した層位は存在する。今後の調査で集落域・古墳などが期待できる。

（福岡晃彦・伊藤秀紀・永井宏幸）



第４図　Ａ区出土遺物実測図（１：４）

下津北山遺跡（おりづきたやま）

調査の経過　下津北山遺跡は、稲沢市下津町地内に所在し、青木川右岸の自然堤防帯と三宅川左岸の自然堤防帯に挟まれた後背湿地に位置している。

周辺には、縄文時代から近世にいたる遺跡が散在する。本遺跡の所在する下津は、平安時代末から鎌倉時代初めに開かれた鎌倉街道の宿場として栄え、源平合戦のころ(1181年)に源行家、承久の変のころ（1221年）に北条時房、中先代の乱のころ（1335年）に足利尊氏が宿泊し、また、南北朝時代には、定期市が開設されたことが文献にも記載されており、室町時代に守護所が設置された下津城跡のような中世遺跡も多い地区である。本調査地も中世を中心とする遺跡であると推定されていた。

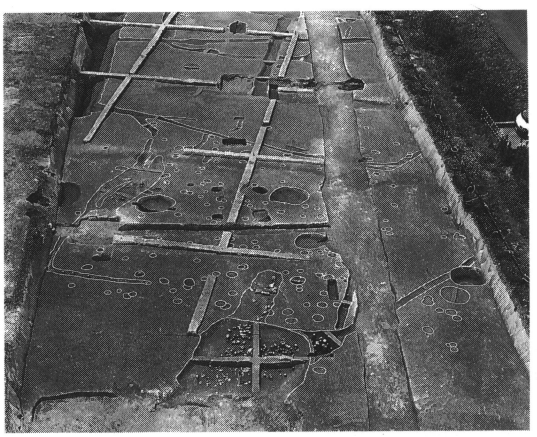
旧国鉄稲沢操車場周辺の再開発に先立ち、平成２年に稲沢市教育委員会によって試掘調査が行われた。その結果、中世の遺構が旧操車場にかかると確認され、従来確認されていた下津北山遺跡が西に広がると推定された。そして今回の調査は、尾張西部都市拠点地区開発に伴う事前調査として、住宅・都市整備公団により愛知県教育委員会を通じて委託を受け、2,000㎡を平成８年５月から９月にかけて実施した。　（加藤博紀）



第１図　調査区位置図（１：5000）

調査の概要　今年度の調査区は遺跡が立地する自然堤防の東端部付近にあたるものと推定される。本調査区の基本層序はバラス、旧耕作土、黄褐色細粒砂層、黄褐色シルト層、暗褐色シルト層（中世の遺物包含層）、黄褐色シルト層の順となり、黄褐色シルト層上面で中世Ⅰ期（12世紀後半）、暗褐色シルト層上位で中世Ⅱ期（14～15世紀）の遺構を検出することができた。また、包含層中などから７～８世紀の遺物が若干出土しているものの、遺構としては確認できていない。操車場の建設に伴い、遺構面が一部分破壊されていたものの、そのほかは比較的良好に遺構が遺存していた。

中世Ⅰ期　中世Ⅰ期（12世紀後半）の遺構は溝（ＳＤ07、ＳＤ21）によって方形に区画された内部にそのほとんどが集約される。ＳＤ07は東西方向に走り、南へと屈曲するがその方位は西にやや振れる。ＳＤ07とＳＤ21を拠り所として区画の一辺を復原すると、その規模は約60ｍ（約方半町）になり、本調査区において区画の西半部を検出したかたちとなる。溝の幅は約３ｍを測り、溝の深さはＳＤ07の屈曲部付近で最も深くなり、約１ｍを測る。溝は一部を除いて掘り直された形跡は認められず、比較的短期間のうちにその機能を失ったものと推定される。また、ＳＤ21の溝の底面ではピット列が検出される部分があり、橋が架けられ、出入口の一つとして利用されていたことも考えられる。


掘立柱建物周辺

ＳＤ21から大量に出土した灰釉系陶器のなかには墨書も多く見られ、なかには「僧」と墨書されたものや、花押風の墨書が記されたものもある。これらの遺物に混じり、緑釉を施した土製の円塔（緑釉円塔）が１点出土している。さらに、灰釉系陶器の底部などを利用した加工円盤も大量に出土しており、その使用方法の一端を知るうえでの有効な事例となろう。また、区画の北西隅にあたるＳＤ07の屈曲部付近から出土した人形木製品と常滑産の小瓶は、地鎮の祭儀に用いられた可能性が考えられる。

方形区画の内部では、数条の溝と柵によってさらに小さい区画が設けられている。そのなかには多数のピットが集中する部分が存在し、掘立柱建物４棟が確認された。掘立柱建物は棟方向をほぼ東西あるいは南北の方位に揃えた状態で配されており、そのなかで中心となる建物（ＳＢ01）は桁行４間梁行２間で東と北側の２面に庇がとりつくものである。ＳＢ02は桁行２間以上梁行２間の総柱建物（倉庫か？）となる。ＳＢ01に重複する土坑（ＳＫ30）や、隣接する土坑（ＳＫ18）には大量の遺物の廃棄が認められ、特筆すべき遺物としてＳＫ18から出土した陶硯（風字硯２点、長方硯１点）、「僧」と墨書のある灰釉系陶器椀、ＳＫ30から出土した三筋壷、広口瓶、常滑大甕などが挙げられる。

井戸は区画内部に３基認められたが、いずれも掘り方は浅く、構造物は遺存していな

かった。ＳＥ０４では掘り方の底面に灰釉系陶器椀３点・小皿２点と柄を抜き取った状態の柄杓、箸、獣骨が並べられた状態で廃絶されていた。

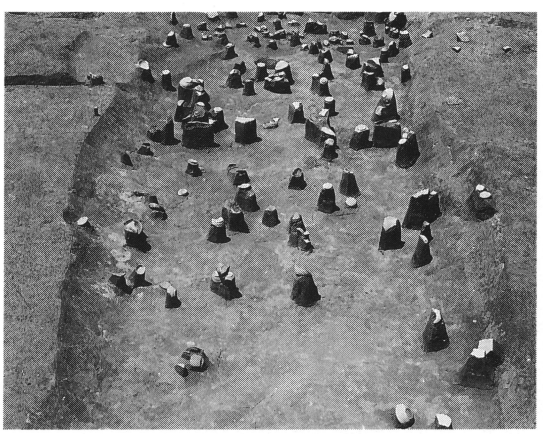
中世Ⅱ期

中世Ⅱ期（14～15世紀）の遺構は、その多くが調査区の北側と南側に集中し、幅約10ｍを測る大溝、東西方向に並行して走る３条の溝、井戸３基などがある。大溝はＳＤ07・21とは対照的に幾度となく掘削された形跡がうかがわれる。井戸はＳＤ０７に重複して１基（ＳＥ01）、調査区の南側に２基（ＳＥ05・06）検出され、ＳＥ05では井筒として利用された曲物が遺存し、ＳＥ06はその痕跡を残していた。ＳＥ05とＳＥ06の周辺にはピットが集中し、14～15世紀代の居住域を調査区の南側付近を中心に想定することが可能である。

まとめ

中世Ⅰ期の方形の区画は、その規模や出土する遺物の組成からみて当時の有力農民の屋敷地に伴うものとしては相応しくない。仏教的色彩の濃い遺物や「僧」の墨書を重要視するならば、比較的簡単な仏堂を備えた集落内の寺院とする見方もできよう。あるいは消極的ながら、特定の寺院など固定した場所にとどまらない僧侶が、幅広く活動した一つの場所として捉えておくべきであろうか。中世Ⅱ期の遺構のほとんどが、方形区画外に展開していることも、この方形区画の性格を考えるうえで参考になる。いずれにせよ、中世初頭における地方仏教行政との関連をも視野に入れつつ、遺構・遺物の考察をすすめる必要があろう。

（早野浩二）



ＳＤ21　遺物出土状況



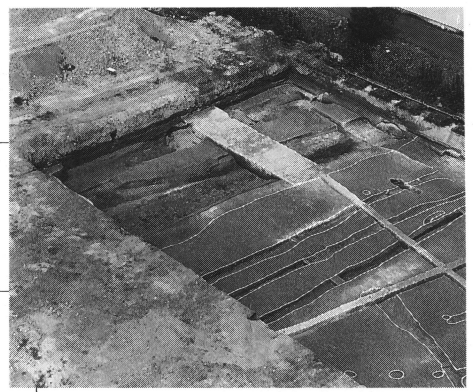
ＳＤ21　墨書土器出土状況



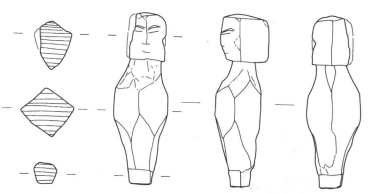
ＳＤ17　小瓶出土状況



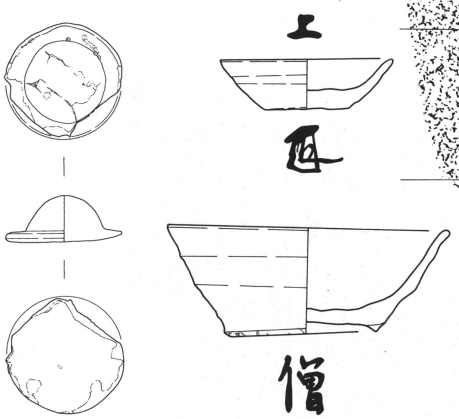
ＳＥ04　遺物出土状況



中世Ⅱ期大溝



人形木製品
（ＳＤ07出土　Ｓ＝1/4）



ＳＤ21出土遺物　（Ｓ＝1/4）

第２図　主要遺構配置図（１：500）

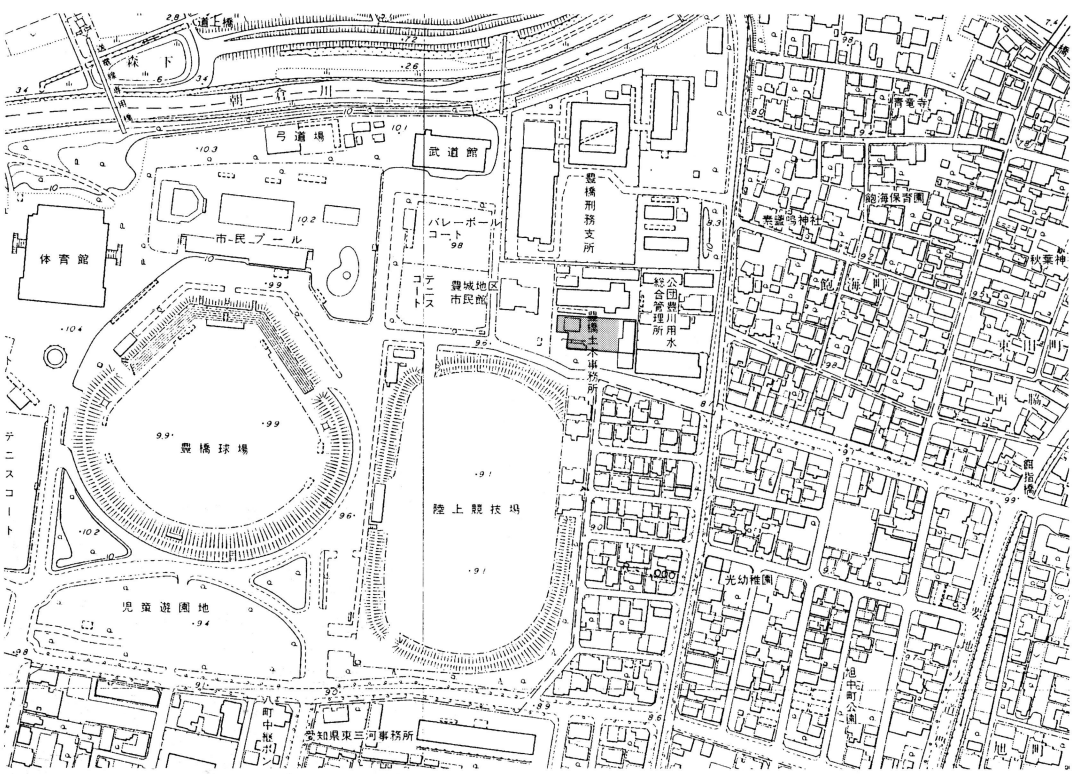
吉田城遺跡（よしだじょう）

調査の経過　吉田城遺跡は、豊橋市を流れる豊川の左岸、朝倉川と合流する段丘上に位置している。今年度の調査区は豊橋市今橋町に所在し、江戸時代の吉田城々下町の東端部にあたる。調査は豊橋土木事務所の新庁舎建設に伴うもので、平成8年4月から7月にかけて、約800㎡について実施した。

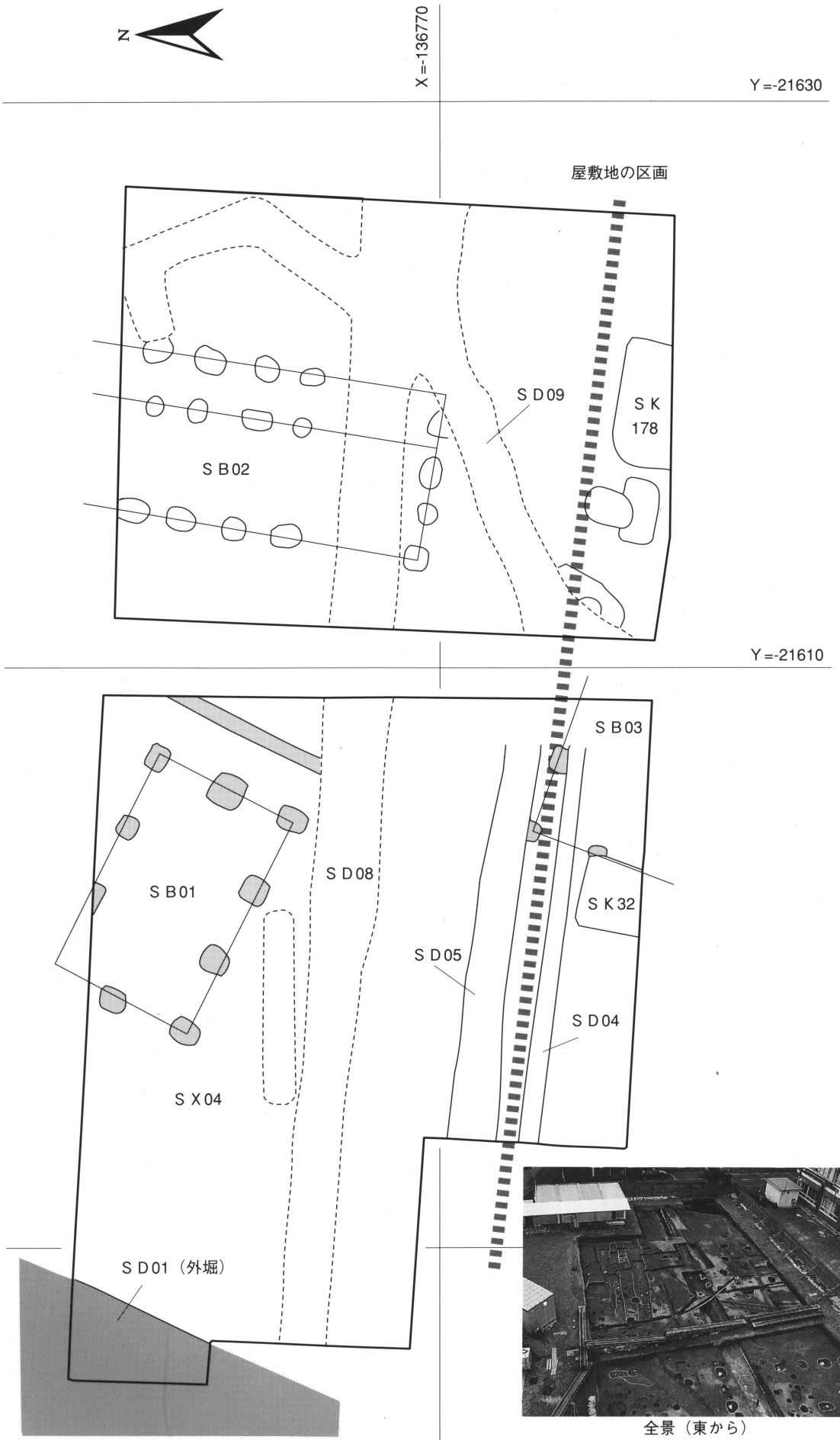
調査の概要　発掘調査では、平安時代の建物跡2棟(ＳＢ01・03)、江戸時代の溝3条、建物跡1棟、廃棄土坑等の遺構が検出された。

江戸時代の吉田城々下町に関係する遺構として特筆されるのは、調査区西端で検出された南北に走る溝ＳＤ01で、位置・規模等から城下町の外堀と推定される。ＳＤ01の東には東西に平行して走る2条の溝（ＳＤ04・05）がある。東側では削平され遺存していなかったが、ＳＤ01との位置関係から屋敷地の区画溝と推定される。これら3条の溝により、調査区内には2つの屋敷地が想定され、北側の屋敷地では建物跡1棟（ＳＢ02）、南側の屋敷地では廃棄土坑（ＳＫ178）等の遺構が検出されている。

本調査区ではこの他にも、明治以後に設置された陸軍に関係する遺構として塹壕（ＳＤ08・09）、防空壕（ＳＸ04）などが検出されている。　（原田　幹）



第1図　調査区位置図（1：5000）



第２図　主要遺構位置図（１：200）



全景（東から）

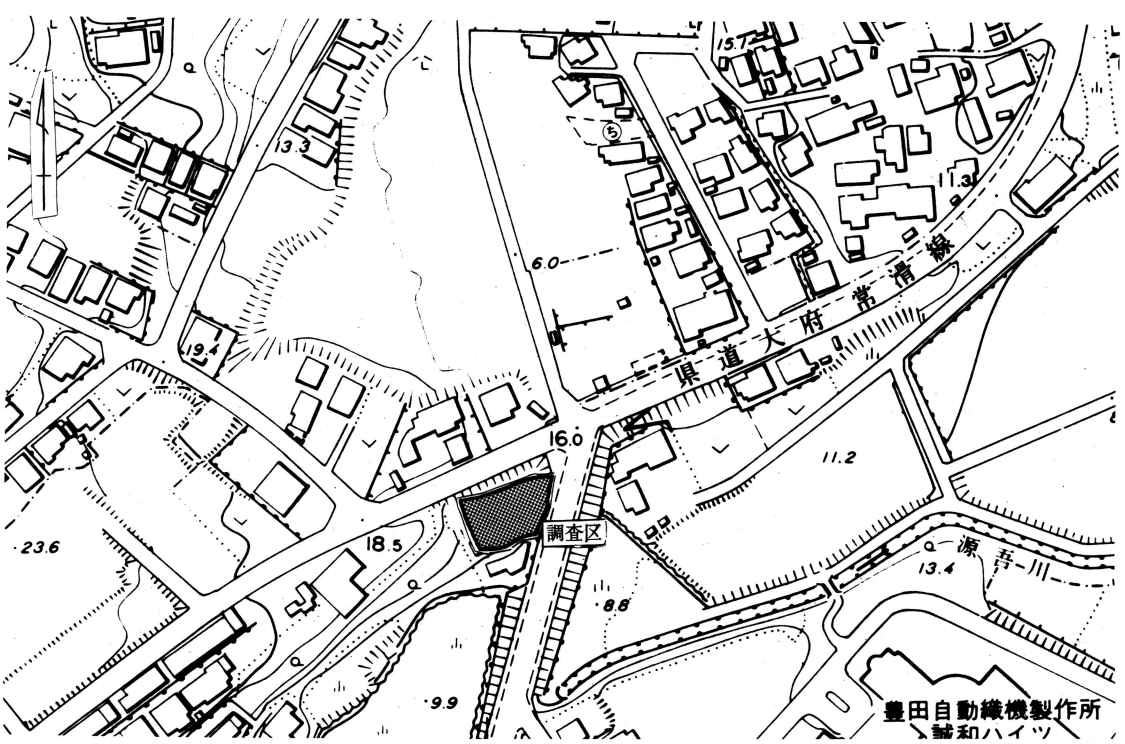
森岡（もりおか）古窯跡群

調査の経過　本遺跡は、大府市森岡町上ノ山西地内に所在し、知多半島の脊梁をなす丘陵の北東部分に位置する。ここは「知多古窯跡群」と「猿投山西南麓古窯跡群」の接点でもあり、近辺には多くの中世古窯跡が確認されている。発掘調査は、県道健康の森線建設に伴うものとして、350㎡を96年４月から６月にかけて実施した。

調査の概要　調査開始当初は、崖面に灰層の断面が露呈しており、客土も厚く堆積しているため、残存状態は良好とは思えなかった。しかし、調査を進めていくと、東西に隣接して２基（仮称Ａ窯・Ｂ窯）分の前庭部（築窯時排出土盛土）及び灰原が確認された。灰原もほぼ東西に二分されることが判明した。Ａ窯に伴うものは、Ａ窯前庭部より西方部分、Ｂ窯に伴うものは、Ａ窯前庭部直下より東方部分に展開する。この灰原の検出状況から、Ｂ窯が先行して築窯され、廃絶後にＡ窯が形成されたことになる。

出土遺物の大半は灰釉系無釉碗・皿類であるが、これ以外の遺物として、肩部に篦描き文様を施した壺、三筋壺、各種鉢類がある。いずれも12世紀中葉のものと考えられる。

今回の調査では窯体は確認されなかったが、特殊な遺物が出土したことにより、本遺跡の性格を考えるうえで、さらに、この地域の窯業生産体制及び歴史性を考えるうえで重要となるであろう。　（中野良法）



第１図　調査区位置図（１：2500）



灰原検出状況



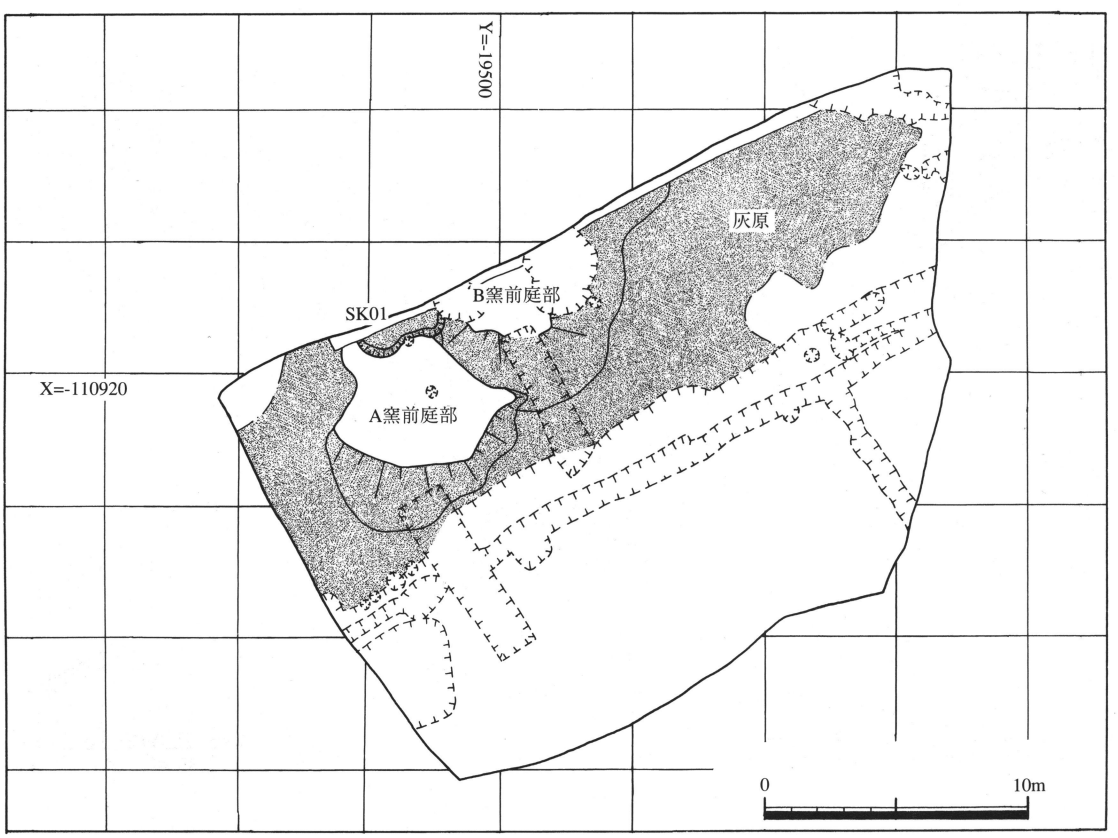
A窯・B窯前庭部



A窯・B窯前庭部土層断面



遺物出土状況



第2図　遺構配置図

大毛池田（おおけいけだ）遺跡

調査の経過　大毛池田遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曽川町北東部にかけて所在し、木曽川により形成された標高９ｍ前後の自然堤防及び後背湿地上に展開している。東海北陸自動車道建設に先立ち、平成５年～７年にかけて発掘調査が行われ、古墳時代から戦国期に及ぶ複合遺跡であることが確認されている。今年度は県道萩原三条北方線の建設に伴う事前調査であり、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、400㎡の発掘調査を行った。（浅井　厚視）

調査の概要　今年度調査で確認された遺構・遺物についての時期区分については、昨年度までの調査成果を踏襲し、Ａ期（古墳時代）、Ｂ期（飛鳥～平安時代）、Ｃ期（鎌倉時代～室町時代）、Ｄ期（戦国期）とする。

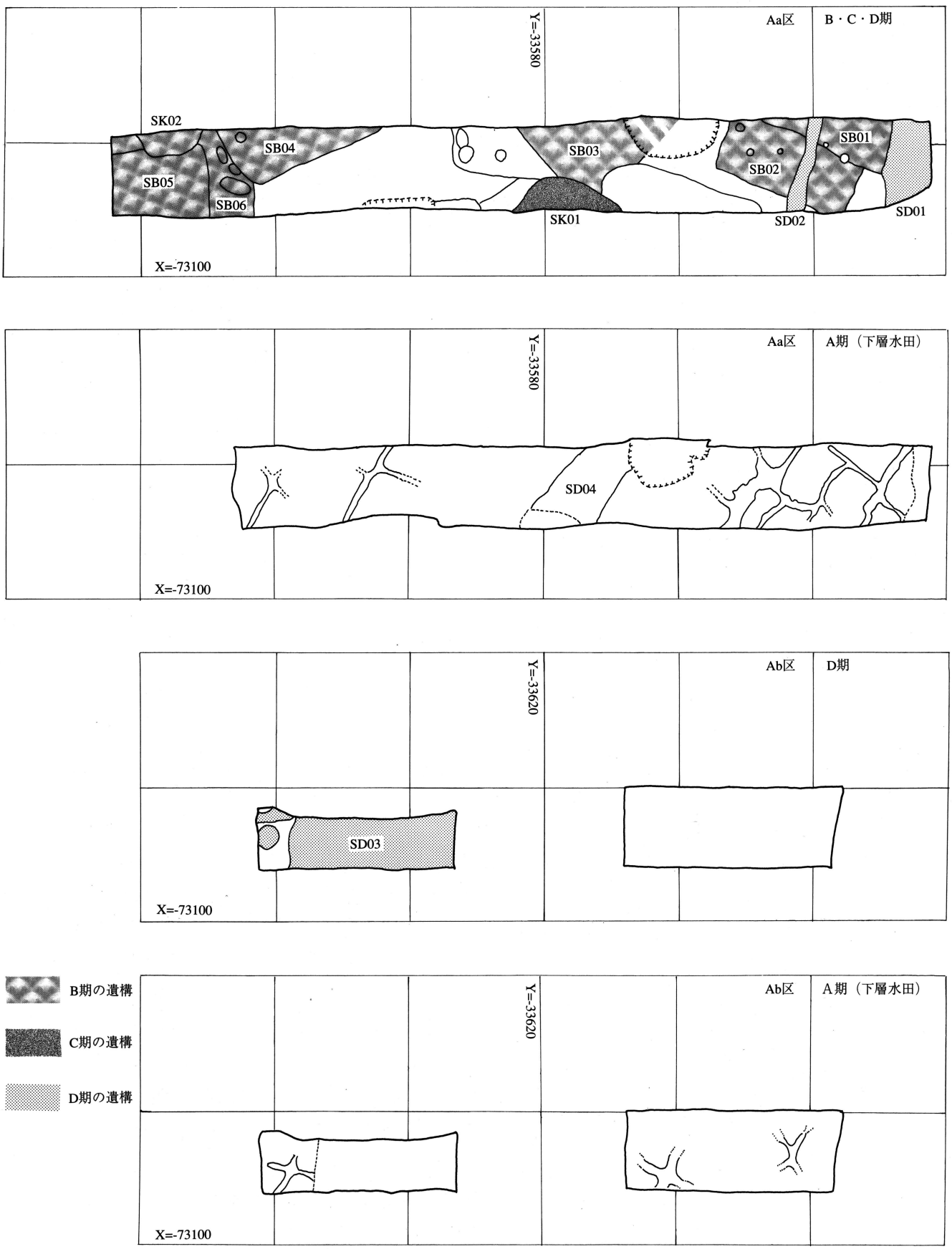
Ａ　期　古墳時代前期水田跡は、黒色粘土層を基盤とする「下層水田」と、この層の上層の灰色粘土層に形成された「上層水田」の２つの水田が、調査区全体に展開していた。しかしこれらの水田の畦畔による区画は部分的に検出できたにとどまった。またＡａ区では、ＳＤ04の下層からさらに溝１条を検出した。この溝からは弥生時代中期末頃に属すると思われる甕などが出土した。大毛池田遺跡で弥生時代まで遡る遺構が検出されたのは、本年度の調査が始めてである。なお「ＳＤ04下層」溝と下層水田基盤層との間には、洪水性の堆積によるとみられる粗粒砂層があることが観察できた。このことから、この付近に水田が造営される直前に比較的大規模な土地環境の変化（洪水か？）があったと思われる。

Ｂ　期　ＳＢ01～06は、いずれも平安時代前期の竪穴住居である。このことにより９３Ａ区でみられた平安時代の居住域が、さらに西へと展開していたと考えられる。またＳＫ02もこれらとほぼ同時期の土坑である。検出した竪穴住居には、２つの方向性が見られるが、それが位置関係による違いなのか時期による違いなのかは、今後考えていかねばならない。やや不整形なプランを呈したＳＫ02は、埋土中に焼土や炭化物が濃密にみられたことや、土師器甕も出土していることから竈の可能性もある。

Ｃ　期　Ａａ区のＳＫ01のみである。検出した規模から、室町時代後期（14Ｃ後期）の井戸と思われる。

Ｄ　期　Ａｂ－１区で95Ｅ区から延びるＳＤ03を検出した。この溝は、少なくとも16世紀代にさかのぼり、この付近の地境を示していたと考えられる溝である。Ａａ区で検出したＳＤ01・02は、ほぼ南北に並行していることから、何らかの企画性が考えられる。

まとめ　様相は不明であるが、大毛池田遺跡で遺構が展開し始めるのは、弥生時代中期末頃からのようである。そして弥生時代後期から古墳時代前期初頭の間に、土地環境が変化したことにより水田耕作地へと移り変わっていったと考えられる。平安時代には、この付近にある程度の規模をもった集落が展開していたと考えられる。戦国時代の頃には、ＳＤ03のような地境の役割を担っていたと思われる大溝が掘られていた。（飴谷　一）



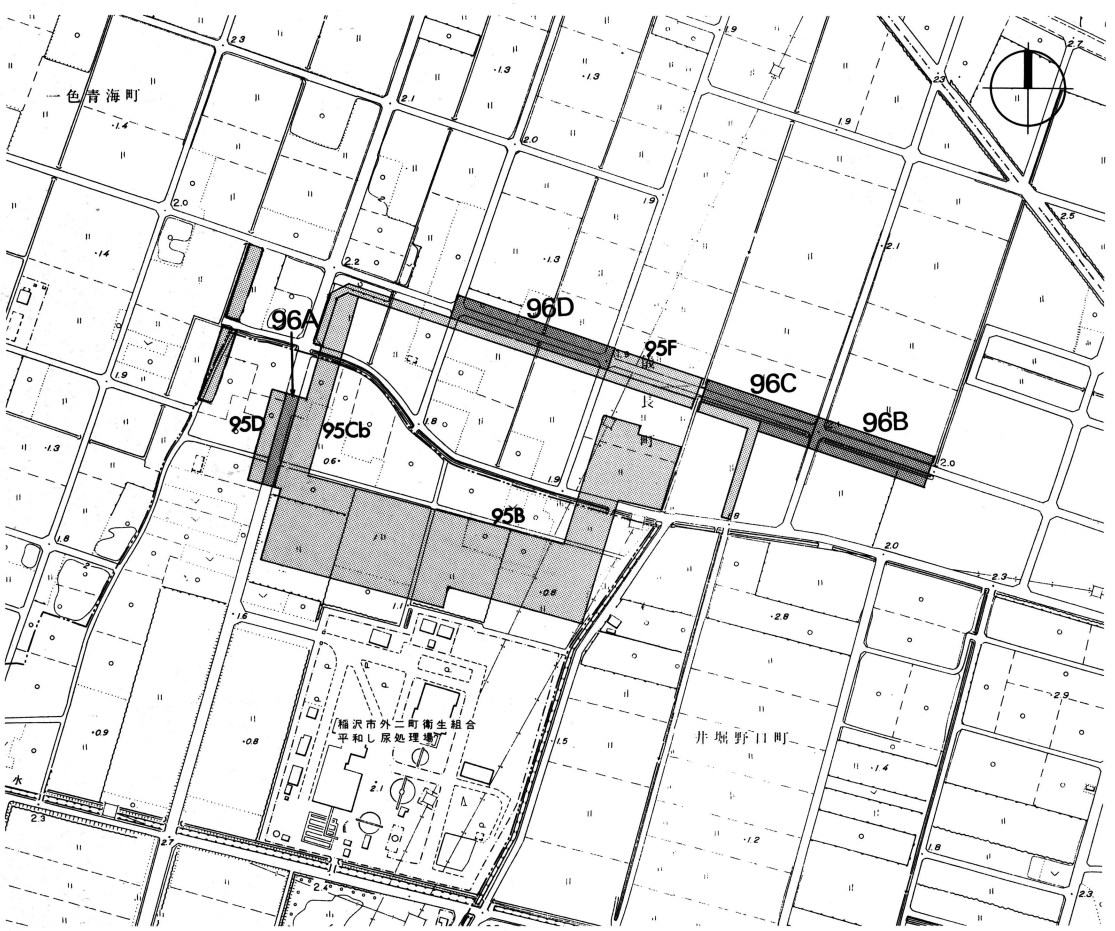
第１図　96Ａ区遺構配置図（１：200）

一色青海遺跡（いっしきあおかい）

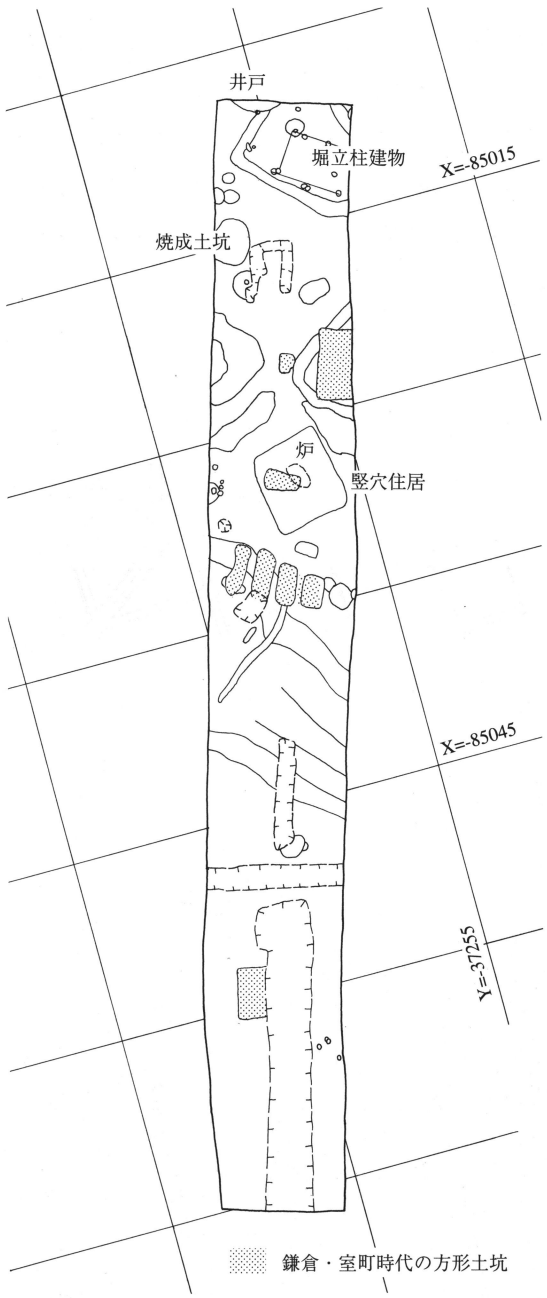
調査の経過　一色青海遺跡は、中島郡平和町須ケ谷および稲沢市儀長町地内に所在する。本遺跡およびその周辺は、三宅川により形成された標高１ｍ前後の自然堤防とその後背地上の荒蕪地に位置している。

遺跡の周辺には、南東に尾張国分寺跡や堀之内花ノ木遺跡、儀長正楽寺遺跡などがあり、７世紀から８世紀にかけては、尾張の中心的存在であった地域でもある。

今回の調査は、日光川上流流域下水道浄化センター建設および県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査であり、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託事業として平成５年度から継続調査している。最終年度となる本年度の調査面積は5,000㎡で、平成８年４月より５月にかけて日光川上流流域下水道浄化センター建設分として600㎡（Ａ区）を、11月より平成９年３月にかけて県道馬飼井堀線建設分として4,400㎡（Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区）を実施した。



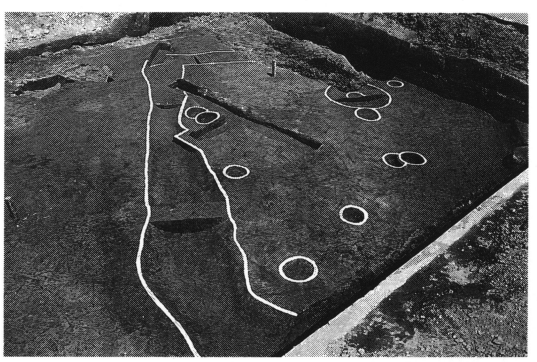
第１図　調査区位置図（１：5000）



第２図　Ａ区遺構図（１：400）



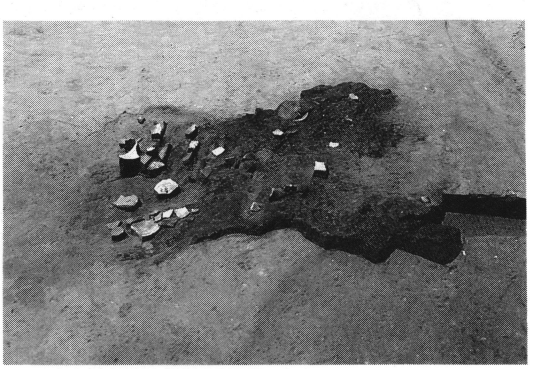
Ａ区全景



掘立柱建物検出状況



竪穴住居完掘状況



炉検出状況

調査の概要　遺構は、主に弥生時代中期後葉と鎌倉・室町時代のものを確認することができた。

Ａ　区　Ａ区は、95Ｃｂ区と95Ｄ区に挟まれた調査区である。後世の削平により包含層の残存状況は良好でなかった。まず弥生時代中期後葉の遺構は、掘立柱建物１棟、竪穴住居１棟、井戸１基、焼成土坑や溝などが検出された。これらは主に調査区北側に集中している。掘立柱建物は２間×１間以上で、柱穴の配置、規模などから高床倉庫と考えられる。竪穴住居では中央に炉をみつけることができたが、主柱穴は明瞭な状態で検出できなかった。井戸では、下層から建物の廃材と考えられる木製品が出土している。焼成土坑は、灰ブロックを伴う炭化物層と粘土層が互層となっており、幾度かの焼成の結果と推測される。また、溝は95Ｃｂ区中央部と95Ｄ区と同様に微高地の縁辺に沿うかたちで方向性をもって検出されたが、出土遺物は希薄である。次に鎌倉・室町時代の遺構は、方形土坑が９基検出された。

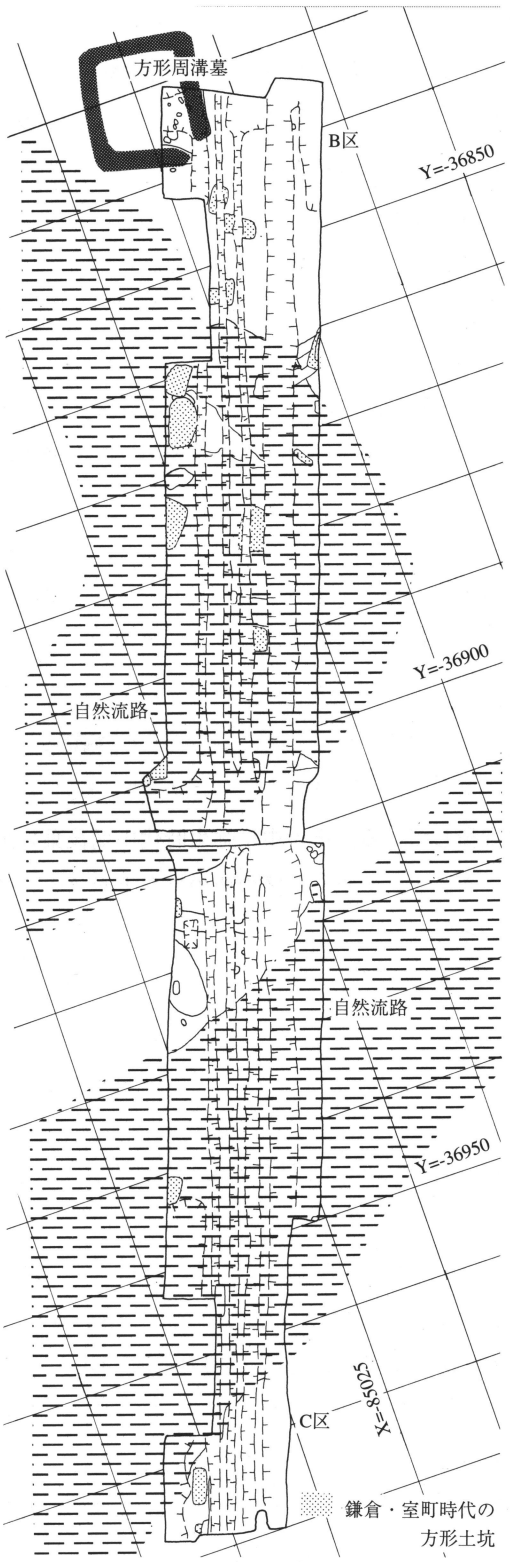
Ｂ区・Ｃ区　Ｂ区・Ｃ区　Ｂ区およびＣ区は、95Ｆ区の東側に位置する。調査区の約半分が後世の撹乱を受けている。まず弥生時代中期後葉の遺構は、Ｂ区北東に方形周溝墓の一部と推定される溝、小土坑数基、自然流路が検出された。自然流路は、Ｂ区を北東から南西に、Ｃ区を北西から南東にむかうかたちで検出された。幅は、40mにおよび、深さは深いところで検出面より1.8m～９mにあよぶ。上層では止水性の堆積が見られ、７世紀代の須恵器などが出土した。下層になるとほとんどが激しい水流のあとをうかがわせるような砂とシルトの堆積で、植物の遺体が層となって大量に堆積している。その中に弥生時代中期後葉の土器や鳥形、木製農具、塊状の木製品などが出土した。また、Ｃ区の西の立ち上がりの部分では、炭化物の落ち込みが確認され、その炭化層からも弥生時代中期後葉の土器が出土した。また、鎌倉・室町時代の遺構として方形土坑がＢ区で14基検出された一方、Ｃ区では６基しか検出できなかった。

まとめ　今回の調査成果をまとめると以下のようになる。

１．北西に隣接する一色長畑遺跡から南東の95Ｂ区の方向に細長くのびる弥生時代中期後葉の居住域はＡ区の北側まで広がっていたと想定される。

２．昨年度までの成果で明らかにされた北西から南東に蛇行しながら流れる自然流路は、Ｂ区・Ｃ区を横切るように流れ、弥生時代中期では激しい水流から度々流路を変えており、時期が下るとともに湿地化し、遺物から見て７世紀以降最終的に埋没すると考えられる。されにＣ区自然流路の炭化層の落ち込みから、この自然流路が一色青海遺跡の東端にあたると推測される。また出土する須恵器から、東方に位置する儀長正楽寺遺跡との関連も考えられる。Ｂ区東端に方形周溝墓の一部がかかると考えるならば、自然流路のさらに東に別の弥生時代の集落が存在したことも考えられよう。

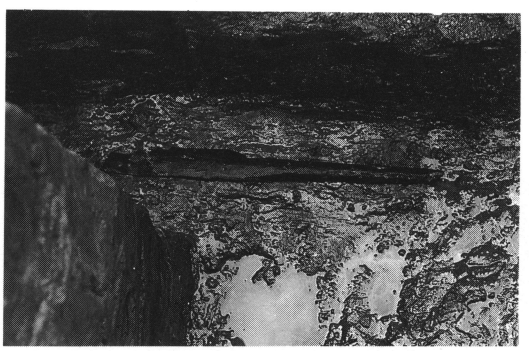
３．鎌倉・室町時代の方形土坑は、昨年度までの調査成果同様、主軸方向の類似性を認めることができた。Ａ区では、微高地の縁辺に集中する傾向があった。Ｂ区で集中する一方、Ｃ区と95Ｆ区では希薄である。　（加藤博紀・早野浩二）



第３図　Ｂ区・Ｃ区遺構図（１：800）



Ｂ区　自然流路全景



Ｂ区　自然流路出土木製品



Ｃ区　自然流路全景



Ｃ区　自然流路出土木製品及び壺

権現山（ごんげんやま）遺跡

調査の経過　権現山遺跡は、五条川右岸にあたる一宮市と接する岩倉市でも南西部の野寄町及び北島町にかけて形成された微高地上に分布している。発掘調査は広範囲に及ぶ五条川右岸流域下水道事業に伴うもので、本年度の調査は本調査と開発区域内の遺跡範囲確認調査の計500㎡を実施した。

本遺跡の周辺環境は中世期形成の島畑景観を今だに残しつつも市街地化に伴う土地区画整理事業の波が押し寄せているのが現状であるが、従前より北島白山遺跡（岩倉市）や元屋敷遺跡・三ツ井遺跡など弥生時代を中心に縄文時代にまで遡る遺跡が知られている。本遺跡も一連の遺跡と同様な状況を想定していたが、古墳時代を中心とする遺跡であることが本年度の調査により明らかとなった。（高橋信明）

調査の概要　遺跡の基本層序は上位から耕作土、茶褐色シルト（中・近世）、黒褐色粘質土（古墳時代）の順に堆積し、ベースは黄褐色砂質土である。

調査区の遺構としては古墳時代前期のものが中心で、北東から南西に走るＳＤ05、それと平行に走るＳＤ06・ＳＤ07、幅3～4m・深さ30～50㎝のＳＤ08、東西方向に走るＳＤ12、調査区南西端のＳＫ07、Ｐ1～Ｐ5などを検出した。注目すべき遺構はＳＤ08で加飾の施された二重口縁壺・パレス壺など極めて祭祀性の強い土器が出土したこと、溝の北側は緩やかに落ち南側は急な立ち上がりを呈することなどから古墳の周溝である可能性が高い。

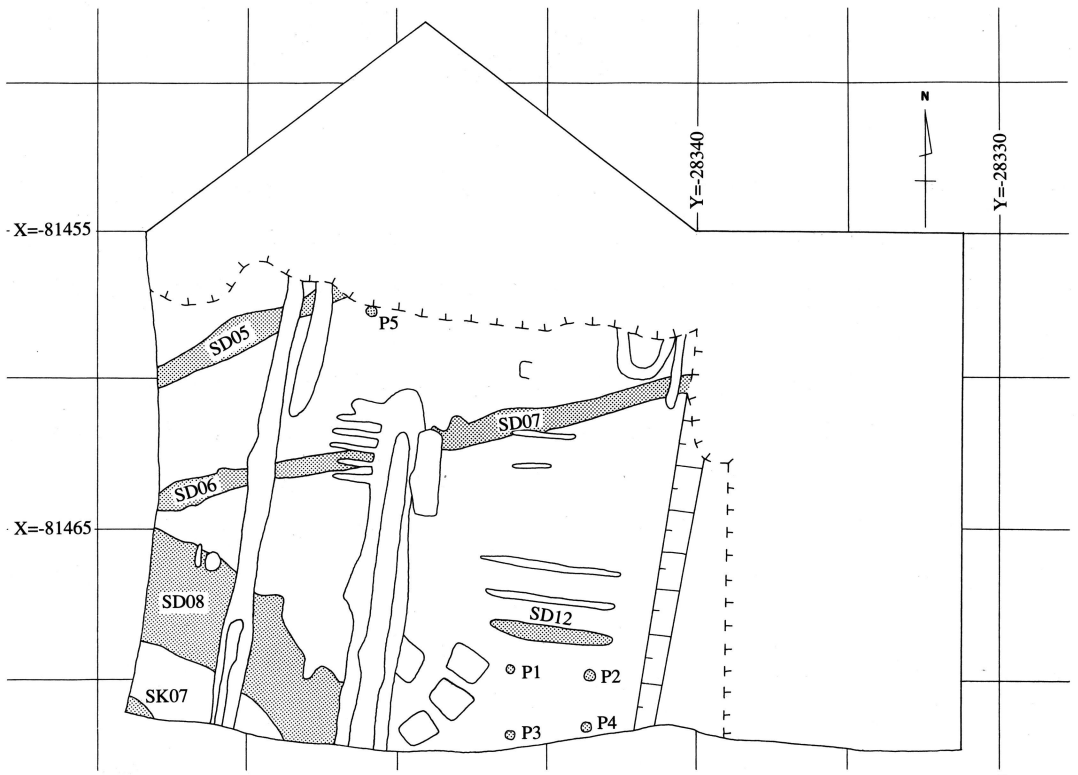
それ以外の遺構はいずれも中・近世以降のもので、南北方向の区画溝、東西方向の生産に関連する畝状の溝、土坑などを検出した。

特筆すべき遺物としては、口縁の外反部に櫛描による波状文が加飾されている二重口縁壺（1）、調整方向の異なるＢ類のＳ字状口縁台付甕（2）、広口壺（3）などがあるが、これらはいずれもＳＤ08から出土したものである。

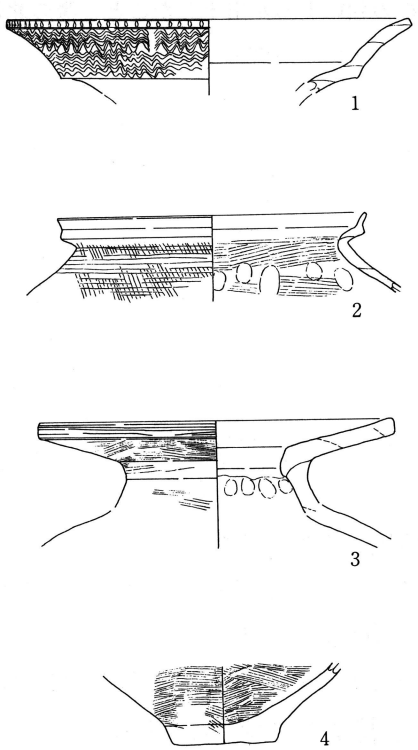
試掘調査　試掘位置図の中央に北西から南東に走るのが用水路で、この用水路が野寄町と北島町とを分けており五条川に注いでいる。

試掘は全部で20箇所実施したが、用水路より北はごく最近の撹乱でＴ5とＴ6北半分以外は2m　以上の削平を受けていた。用水路より南は工場の敷地内以外遺構の残りが良くＴ8では南北方向に走る幅2～4m・深さ50～70㎝の溝を3条確認した。神社跡の高まりとその周辺にも試掘（Ｔ11～Ｔ14）を実施し、Ｔ11とＴ13で南北方向に走る幅3～5mの溝を数条確認した。また、その堆積状況から神社跡は古墳の可能性が考えられる。

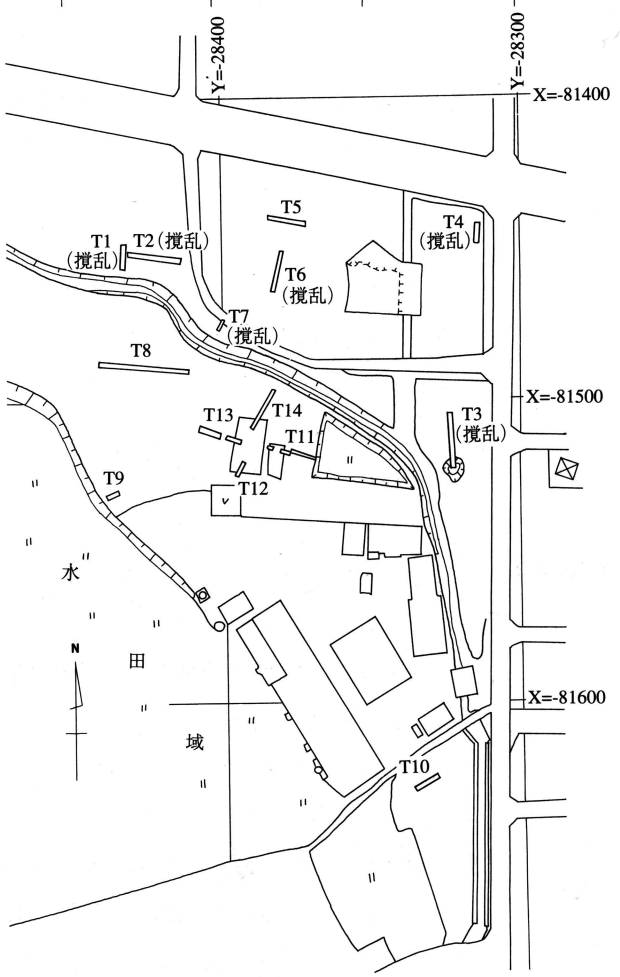
以上の結果から遺跡の範囲は、後背湿地部の水田域より北東の微高地上に広がることが想定される。但し、残念なことに用水路より北は、ごく最近の撹乱により調査区周辺にわずかに遺構が残存するという状況である。（山本寿徳）



第１図　調査区遺構図（１：250）



第２図　出土遺物実測図（１：４）



第３図　試掘位置図（１：2500）

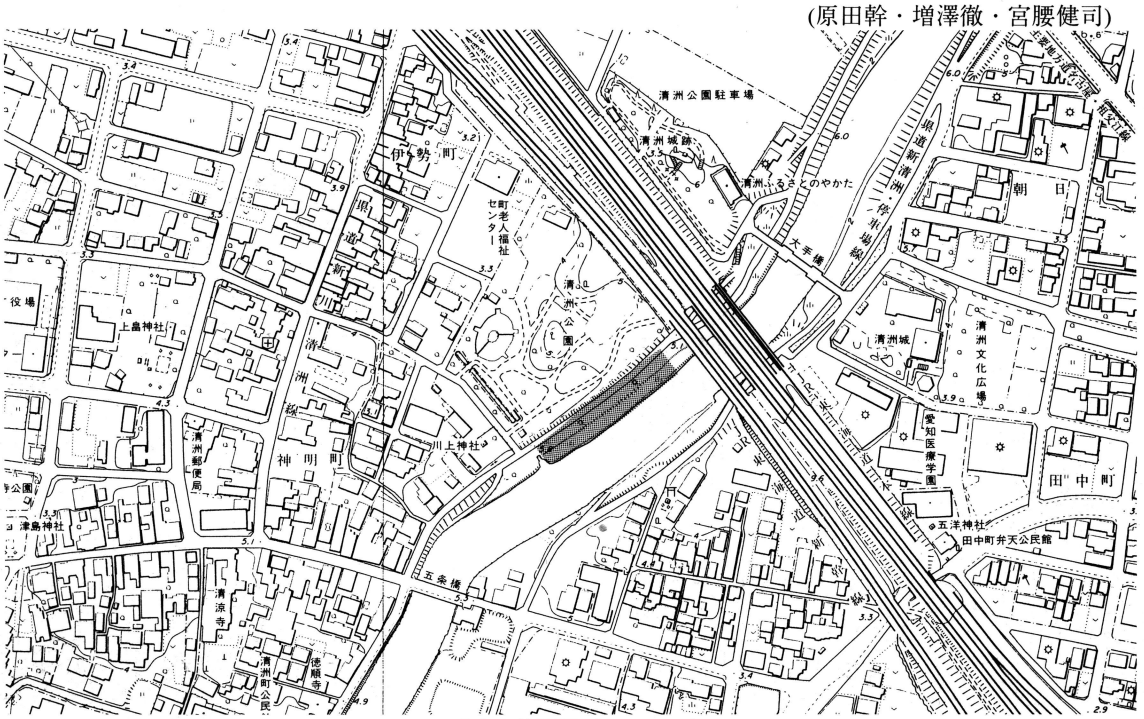
清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）

調査の経緯　清洲城下町遺跡は、西春日井郡清洲町に所在する。本遺跡は濃尾平野の中央部を南流する五条川中流域に形成された自然堤防とその後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は昭和59年から継続して行われており、今年度は五条川の河川改修に伴う事前調査として、平成8年12月から平成9年3月にかけて実施した。調査面積は、約2000㎡である。

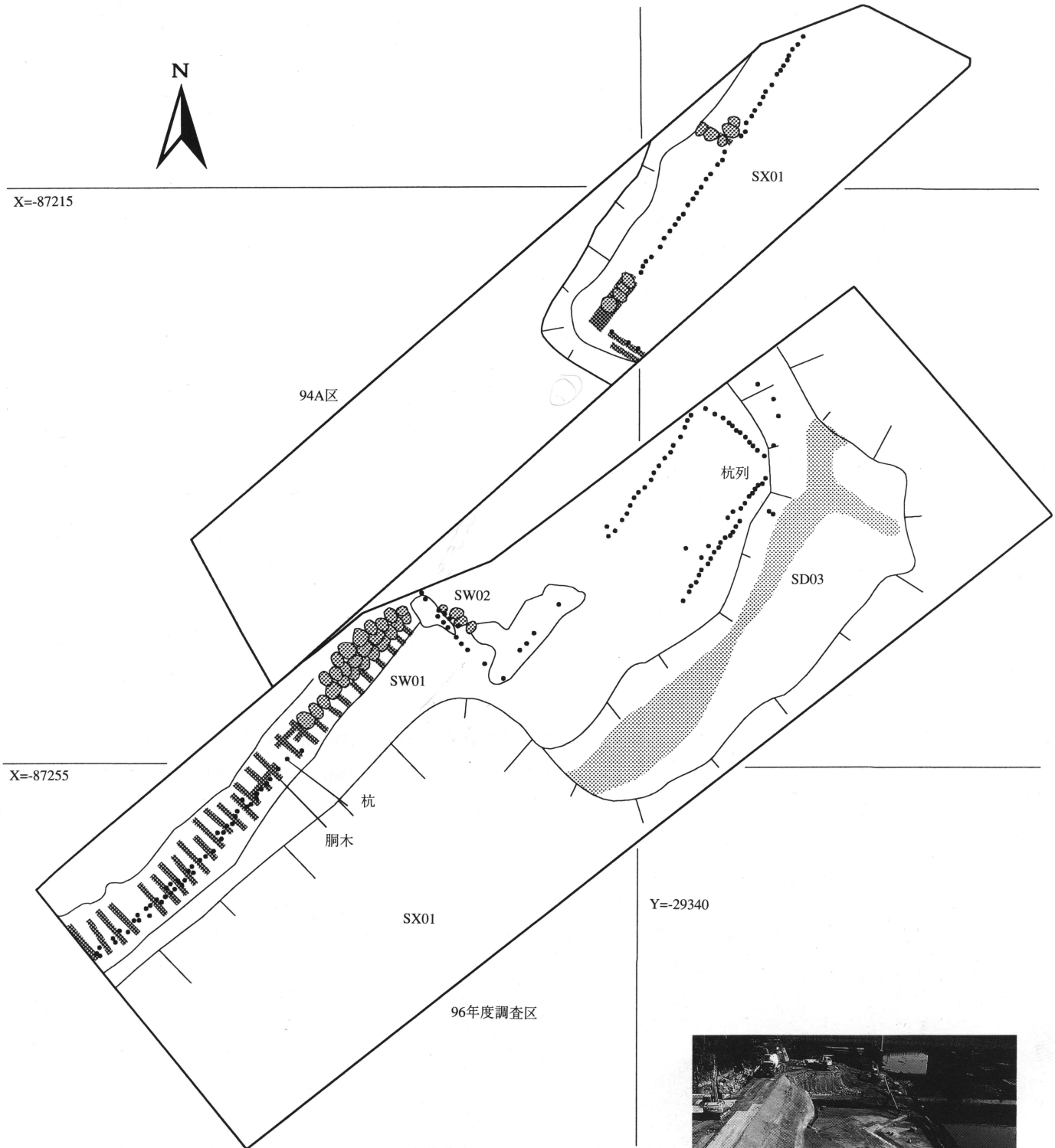
調査の概要　今年度調査区は、五条川右岸の清洲公園に隣接する堤防道路及び河川敷に位置する。この地点は清須城本丸推定地に当たり、堀と石垣を検出した94Ａ区に南接する。本調査区では、本丸東側に築かれた石垣やテラス状遺構、杭列等の遺構が検出された。石垣は北東から南西に走るＳW01とこれに直行するＳW02がある。ＳW01は長さ約11ｍ、高さ約1.8ｍ（基底石を含む）で石組が残存し、長さ約20ｍの範囲で胴木・杭列等の下部施設を検出した。ＳW02は石組の残存状況は良くないが基底石の抜き取り痕とみられる溝状の掘り込みを検出しており、ＳW01に対しＬ状に張り出す形状で巡っていたと推定される。ＳW02の東及び南側は比較的広いテラスになっている。出土遺物の大半は堀内から出土した大量の瓦で、軒瓦、平瓦、丸瓦、飾瓦、鯱瓦等種類も豊富である。軒瓦、飾瓦、鯱瓦には金箔瓦もみられる。

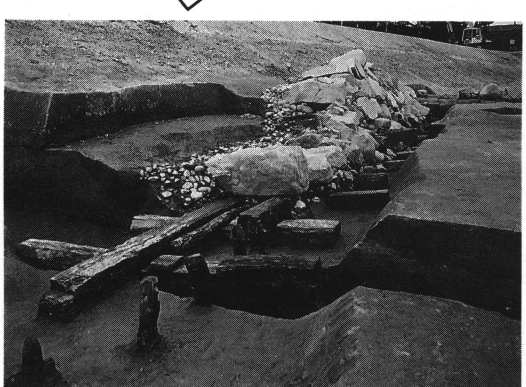
本調査区で検出した遺構は堀及びその関連施設で、石垣を良好な形で検出できたのは大きな成果である。この石垣は94Ａ区の調査成果から天正14年(1586)に入場した織田信雄の時期に築造されたと推定されており、当期の石垣築造技術を知る上でも興味深い資料である。堀の形状も張り出し部状の石垣やテラス状遺構の存在など決して単純なものではなく、94Ａ区で検出された堀との関連を含め、城郭構造の復元が検討課題となる。

(原田幹・増澤徹・宮腰健司)

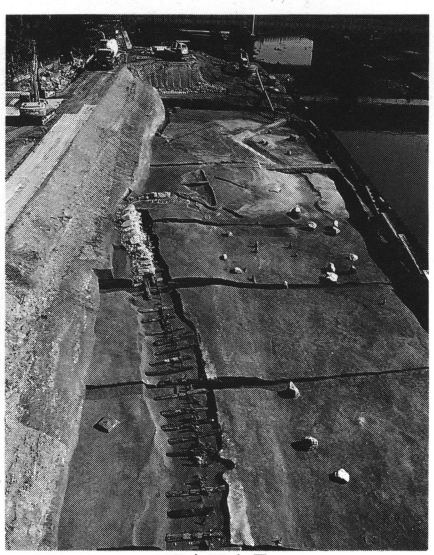


調査区位置図（１：5000）





石垣（SW01）



調査区全景

主要遺構配置図（1：400）

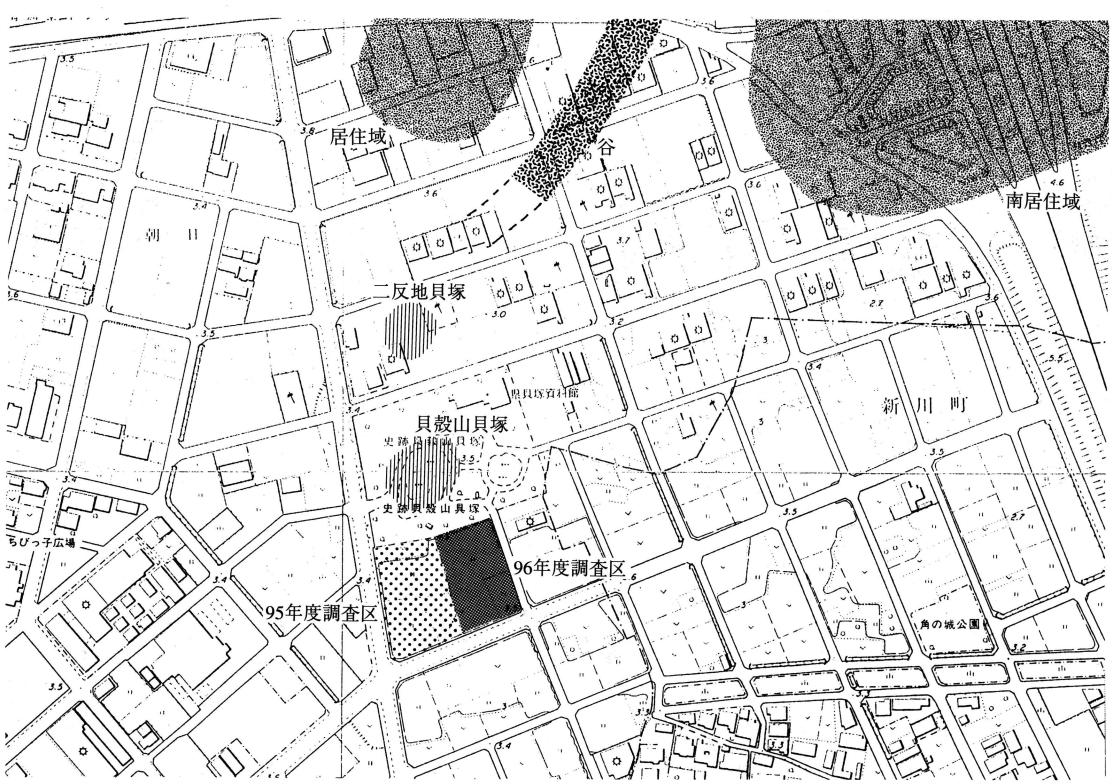
朝日（あさひ）遺跡

調査の経過　朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に、南北約1.1㎞、東西約800ｍにわったて広がる東海地方屈指の弥生時代集落である。昭和44年から平成元年にかけて愛知県教育委員会、財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、財団法人愛知県埋蔵文化財センターによって約90,000㎡が発掘調査されており、平成７年度も隣接部分（2,774㎡）を本センターが調査している。

今回の調査も昨年度と同様新資料館建設に伴うもので、調査面積2,773㎡を愛知県教育委員会の委託事業として実施した。調査区は、弥生時代中期～後期の環濠集落から500ｍ程南西に位置し、前期の著名な貝塚である貝殻山貝塚の南にあたる地点となる。

調査の概要　平成７年度の調査では、鎌倉・室町時代～江戸時代にかけての方形土坑群・溝、古墳時代の古墳群、弥生時代前期の溝・貝層・竪穴住居、中期～後期の溝・貝層・方形周溝墓・土器棺・埋葬人骨・竪穴住居が検出されたが、今年度の調査区においてもほぼ同様の状況で遺構が展開している。ただ昨年度の調査区では、幅３ｍ前後の大型の溝は東西方向に走るもののみであったが今回新たに南北に延びる溝が検出され、人骨も土坑に埋葬されたもの以外に、溝内に埋葬された事例も確認された。

本文では、『朝日遺跡Ⅴ』（1994 愛知県埋蔵文化財センター）の時期区分にのっとり、Ⅰ期→弥生時代前期、Ⅱ・Ⅲ期→中期前葉、Ⅳ・Ⅴ期→中期中葉、Ⅵ期→中期後葉、Ⅶ・Ⅷ期→中期末～後期で報告している。



第１図　調査区位置図（１：5000）

弥生時代Ⅰ期　ＳＤ101は昨年度の調査区で、ほぼ東西に延び、北西隅で北方向にゆるやかな弧を描いて屈曲するが、今年度の調査区ではそれとは対称になるように北東隅においてゆるやかに北に曲がっており、貝殻山貝塚を囲むように走ることが判明した。この溝は幅３～４ｍ、深さ１～1.5ｍを測り、昨年度の調査区の北西隅の屈曲部分にあたる地点には、最大幅1.4ｍの純貝層を含む貝層（ハマグリが主体で、次にカキが多い）がみられたが、今年度の調査では確認できなかった。ただ埋土上層には粗いザラザラとした橙褐色砂層があり、溝がある程度埋没した段階に溝全体に貝の廃棄が行われていたものと考えられる。ＳＤ101はⅠ期後半に掘削され、Ⅱ期初頭にはほぼ埋没してしまっていたようである。またＳＤ101と平行する、深さ30～50㎝の溝ＳＤ56からは多量のⅠ期土器が出土した。

弥生時代Ⅱ期・Ⅲ期　ほぼ東西に走るＳＤ102と、やや弧状に南北に走るＳＤ14・68がある。ＳＤ102は幅３～3.5ｍ、深さ1.2～1.5ｍで、Ⅰ期末～Ⅱ期に掘削され、Ⅲ期には埋没しているようである。ＳＤ14は幅3.5～４ｍ、深さ1.2～1.5ｍを測り、南側では最大幅90㎝のハマグリ主体の貝層が１０ｍ以上にわたって続いており、灰褐色砂層とその上層である貝層の境界部分にまとまった土器の廃棄がみられた。ＳＤ１４と平行して走るＳＤ６８は、１４に比べひとまわり小規模で、遺物の出土は少ない。

弥生時代Ⅳ期・Ⅴ期　ＳＤ103とＳＤ104はＳＤ102とほぼ同規模の溝で、102の南側を平行して走り、ＳＤ68の南にはＳＤ18がある。また、さらに南東には方形周溝墓ＳＺ101～104が作られている。ＳＤ103と104は同時に掘削されたわけではなく、103→104の順で作られているようで、方形周溝墓群は103と、ＳＤ18は104と同時期であると考えられる。方形周溝墓のうちＳＺ104の南溝と西溝の溝底より19・22号人骨が出土した。これらの人骨は溝底に穿たれた楕円形の土坑に埋葬されており、22号は屈葬で、19号は後世の影響を受け一部の部位が移動しているためはっきりしないが、屈葬である可能性が高い。また２２号とした位置より脚部が出土しているが、これもＳＺ101に伴うものであると考えられる。Ⅳ期後半にはＳＤ104・18は埋没しつつあり、部分的に貝を中心とした集中的な廃棄がみられた。また、ＳＤ１７（第２図）ように埋没途中の溝の窪地を利用して溝や土坑を掘削したり、新たに別の場所に廃棄溝・土坑を設けたりすることが顕著になる。

弥生時代Ⅵ期　Ⅵ期には調査区北西及び昨年度の調査区北半が居住域となる。今年度の調査区では一部しか出土していないが、居住域の南に多量の土器を出土する溝・土坑が一定の方向性をもって配置され、さらにその南にⅢ・Ⅳ期の方形周溝墓を再利用した方形周溝墓群が存在し、マウンド上に土器棺が置かれる。居住域中の黒色砂層内からは多量の当該期の遺物が出土し、一部竪穴住居も確認されたが、詳細な遺構の検出は困難であった。

埋葬人骨　埋葬されたと考えられる人骨が10体出土し、うち３体はⅢ・Ⅳ期のものとなる。それ以外の７体と昨年度調査で出土した10体は、ＳＤ104及びその同時期の遺構が埋没してしまった後に埋葬され、上部には古墳時代中期の包含層が覆っていた。これら17体の人骨の埋葬されていた土坑からは、確実に時期を決定できる遺物が出土しておらず、前述の遺構の検出状況からすると、Ⅵ期～古墳時代前期のものとなる。ただもう少し時間幅をしぼって考

えると、屈葬であることや、遺跡の展開からみて、Ⅵまたは Ⅶ期～Ⅷ期初頭のものと推定される。人骨は方形または隅丸方形の土坑に、手脚を折り曲げた屈葬姿勢をとって埋葬されている。土坑には、13・14・16・18・20号人骨にみられるように、埋葬土坑の外側に堀肩があり二重の土坑となっているものがあることや、昨年度調査の３号人骨では仰向けのまま脚を折り曲げて埋葬され、その後腐敗して大腿骨と脛骨・腓骨が交差した状態で出土していることから、木棺が使用されていた可能性が考えられる。

弥生時代

Ⅶ期・Ⅷ期

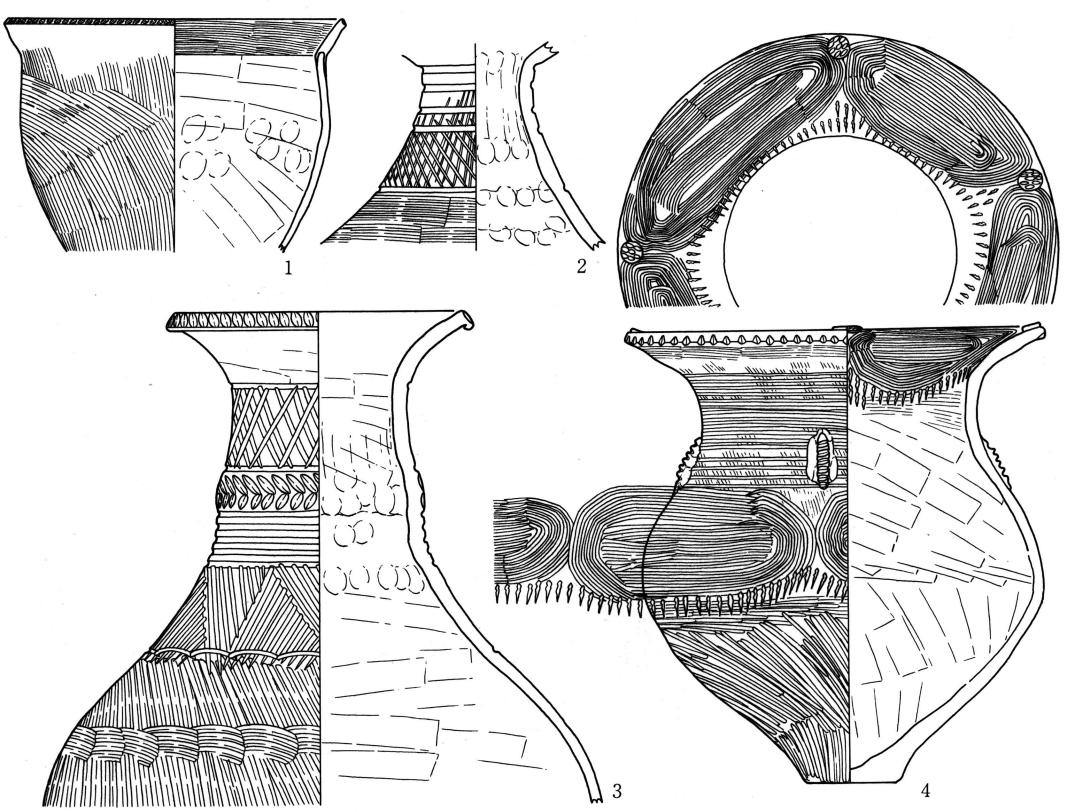
Ⅶ期～Ⅷ期初頭にかけての方形周溝墓が５基、調査区中央から北にかけて検出され、これで昨年度調査のものと合わせると12基になった。これらは径10～12ｍの大きさで、周溝を接するように作られている。周溝は１～３ヶ所途切れるタイプで、溝隅では上部が途切れていないが、非常に浅くなっているものがみられた。また、方形周溝墓のみられない北側には、土坑や溝があり、供献土器のような状態で太頸壺・高杯・器台が出土している。ＳＺ09からは合子形土器、10からは線刻太頸壺、12からは記号紋太頸壺が出土した。

古墳時代

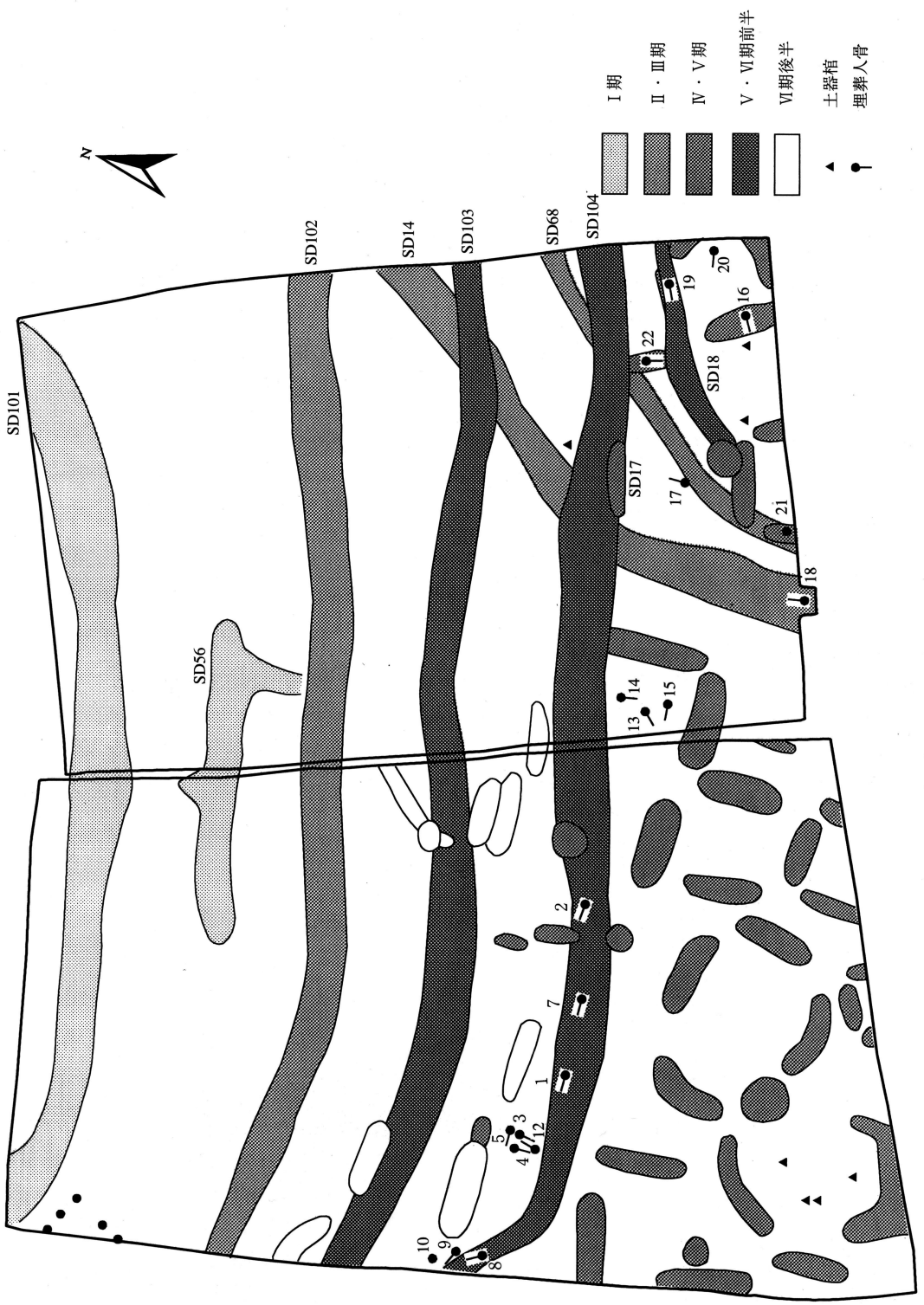
新たに隅丸方形の古墳が９基検出され、昨年度のものと合わせて２８基となった。また古墳群の北側より台付甕が３個体出土している。

中世以降

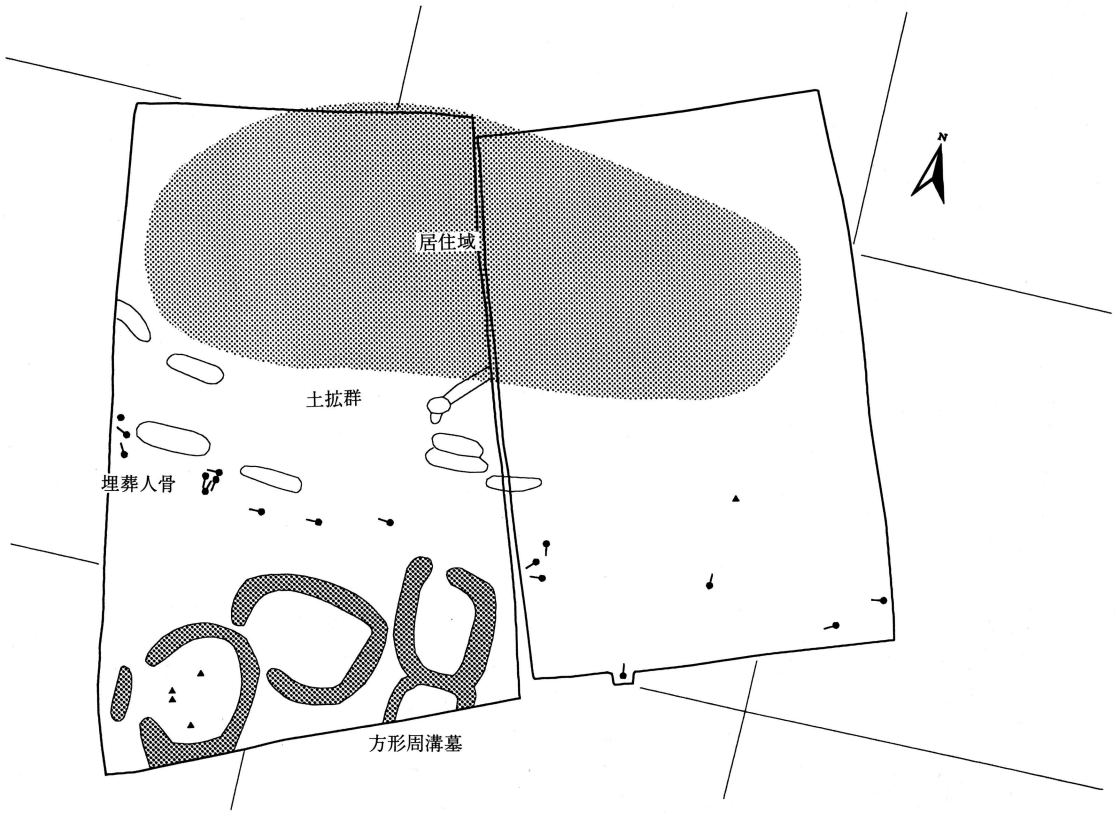
17基の方形土坑が検出され、昨年度のものと合計47基になった。ただ今年度の調査区内には江戸時代に下がるものは確認できなかった。



第２図　ＳＤ17出土土器（１：４）



第３図　Ⅰ～Ⅳ期主要遺構図（１：400）



第4図　Ⅵ期主要遺構図（1：800）

まとめ

1．弥生時代前期の良好な資料を含むＳＤ101が貝殻山貝塚を囲むように検出され、この時期の居住域にも環濠が巡る可能性が高くなった。

2．遺跡中心部の南居住域に走る区画溝と同様の大規模な溝が遺跡南西にも存在することや、同時期の新たな墓域が確認された。また、調査区が遺跡の端部に位置することに起因すると思われるが、中心部ではあまりみられなかった溝・土坑への貝・土器の廃棄が顕著であった。

3．過去の調査でははっきりしなかったⅥ期の集落のひとつのタイプを想定することができ、この時期に遺跡に大きな画期があることが再認識された。集落は調査区内で居住域・土坑群・墓域が納まるようなコンパクトなもので、同時期に出現してくる小集落との関係が注目される。

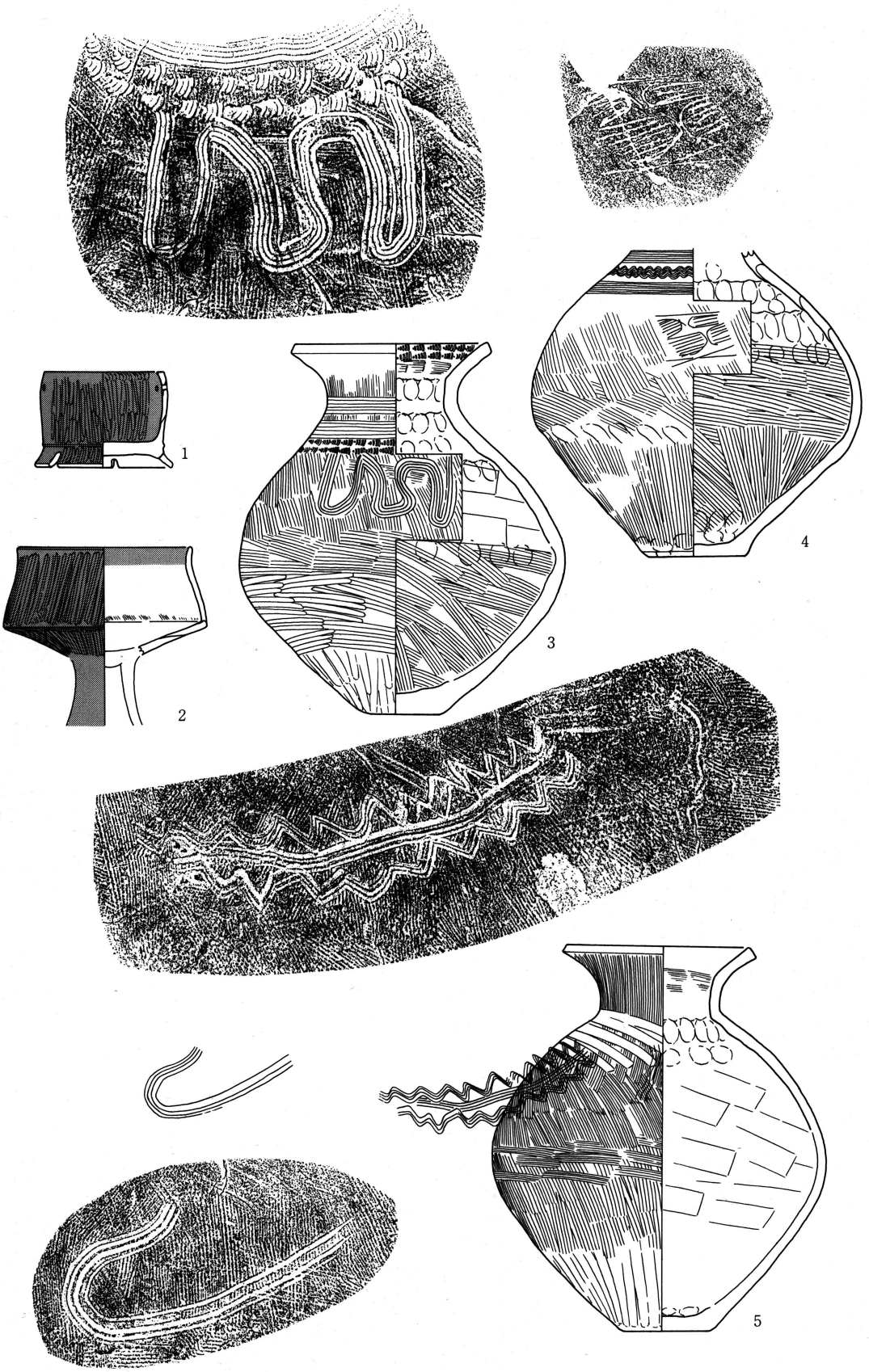
4．20体もの埋葬人骨がまとまって出土したのは今回初めてであり、弥生人を解明する資料として貴重なものとなろう。またこれらの人骨がⅥ期の集落に伴うものなのか、Ⅶ期～Ⅷ期初頭の方形周溝墓群に属するものなのかは今後の課題となる。

5．今まで不明な部分の多かったⅦ期～Ⅷ期初頭のまとまった墓域が初めて明らかになり、合子形土器や線刻・記号紋太頸壺などの特殊な遺物が出土した。

（宮腰健司・原田　幹）



第５図　Ⅶ～Ⅷ期主要遺構図（１：400）



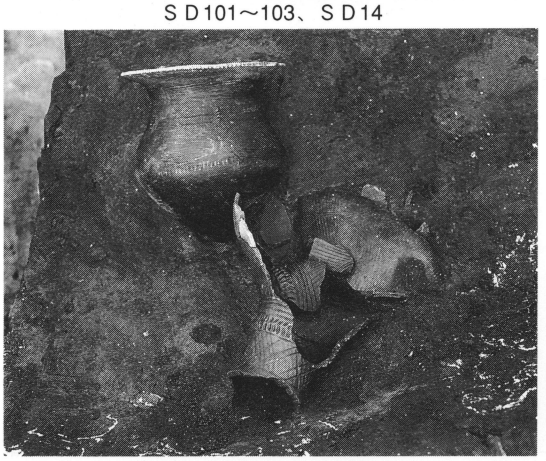
第６図　Ⅶ・Ⅷ期方形周溝墓出土土器（１～５は１：４　拓本は１：２）
１・２．ＳＺ09　３．ＳＺ12　４．ＳＺ10　５．ＳＺ02



ＳＤ101～103、ＳＤ14



ＳＤ14貝層、土器出土状態



ＳＤ17土器出土状態



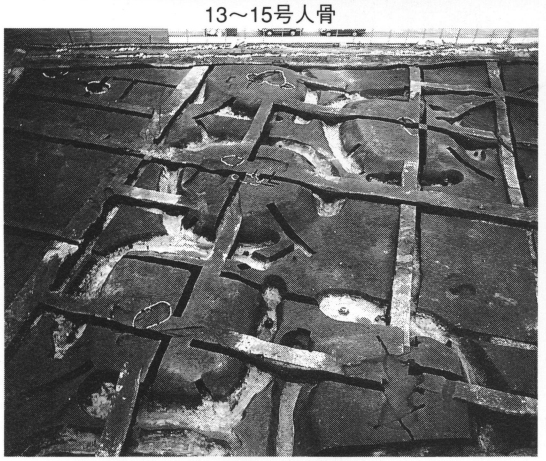
19号人骨



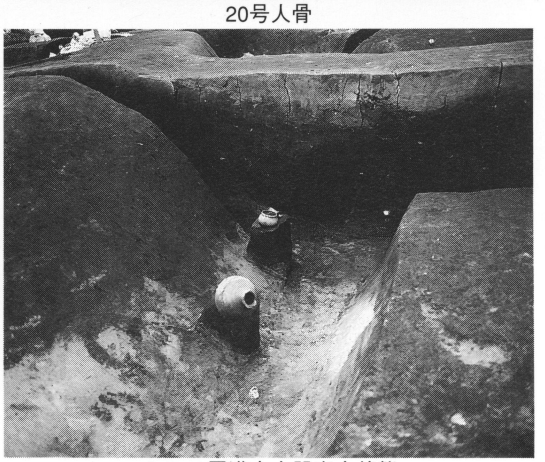
13～15号人骨



20号人骨



Ⅶ・Ⅷ期方形周溝墓



ＳＺ10周溝内土器出土状態